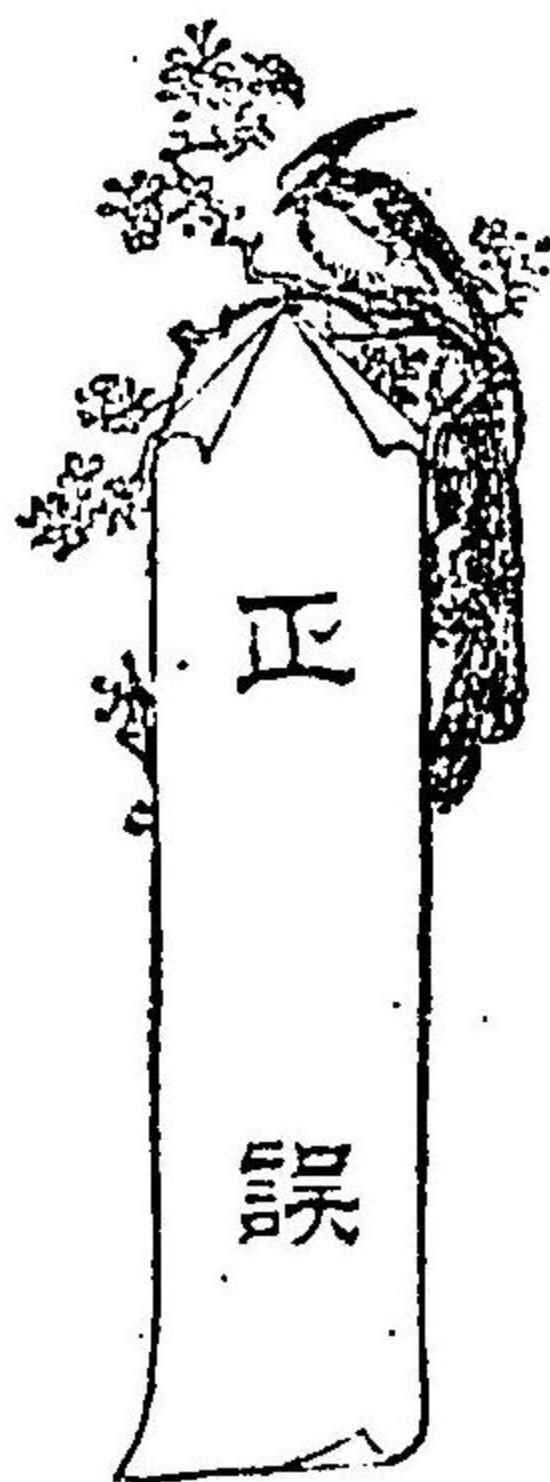


日本風景論中の挿畫大抵は雪湖極
畑君の揮灑する所君信州松代の人
年齒未だ壯酷た畫を嗜み連日薄書
滿案吏務鞅掌而して此の餘技あり
洋風の畫は海老名明四君の落筆に
係る君參州舉母の人予と同郷國居
常子家に入す有望の少年畫家
守持の兩君の揮灑落筆を需む兩君
歡諾畫皆な成る茲に之れを多謝す

明治二十七年十月十八日

知川生



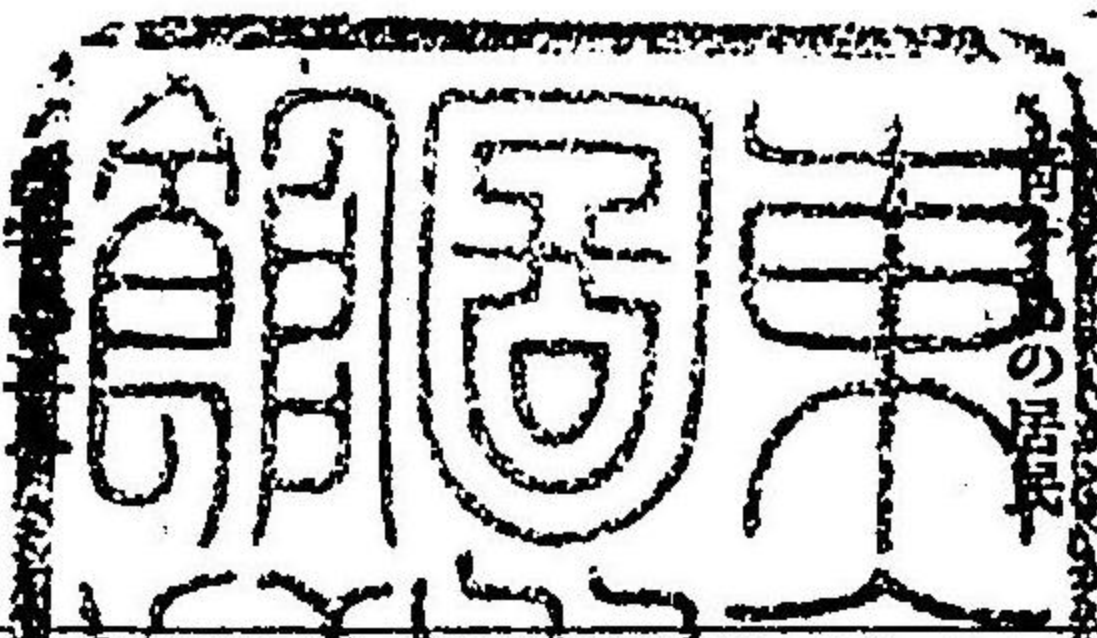
45
67

第二頁 十行目……………	(一) 三芳野の春の曙みしなれは 三芳野の春の曙みわたせば	誤
第三頁 九行目……………	(一) 太平洋岸は傾斜緩慢なる所少く (二) 太平洋岸は傾斜急劇なる所少く	誤
第二十六頁 挿表……………	一行目 岐阜四月温度一〇・七 二行目 六月温度一〇・二 三行目 六月湿度一〇・二 四行目 六月湿度一〇・二	誤
第三十二頁 欄上……………	十一行目 大陸より吹き来りたる西南風 大陸より吹き来りたる西北風	誤
第三十三頁 十四行目……………	あらし世話し花見の中へ越の雪 あらし世話し花見の中へ越の夏	誤
第五十二頁 七行目……………	(四) ……黒白風雨滿南都 (四) ……黒風白雨滿南都	誤

日本風景論

志賀重昂

(一) 緒論



緒論

美是吾郷と身世誰れか吾郷の洵美を謂はざる者ある青ヶ島や南洋諸島の間なる一項の噴火島爆然轟裂火光焔々天日を焼き石を降らし島中の人畜殆んど斃れ盡く僅に十数人の船を舩して災を八丈たるあるのみ而かも此の十数人竟に其の噴火島たる古郷を遺るの想むを待つこと十三年乃ち八丈を出で欣々乎として其の多古郷に歸りき占守や窮北不毛の絶島千島の内層氷累雪の處のみ後開拓使有司の其の土人を南方色丹島に遷徙せしむや色丹の地棋楠樹青蒼落葉松濃かに黒狐三毛狐其蔭に躍り流水涓々として處々に駛り玉蜀黍種べく馬鈴薯植うべく田園を開拓する者は賞與の典あり而かも遷

緒論

緒論

エスキモー土人

日本の江山

日本の江山の洵美なる理由

徒の土人、新樂土を喜ばずして、歸心督促三々五々時に其の窮北不毛の故島に返り去る。シカゴの博覽會、近世期に於ける人智の粹を盡くし、會場亦た金碧設色、眩耀眼を奪ふ、中にエスキモー土人の村落を置き、土人此處に居る幾多、而かも之れを欲せず、其の氷山雪塊の本國に逃れ去らんとしき。脆きは人の情なり、誰れか吾郷の洵美を謂はざらん、是れ一種の觀念なり。然れども日本人が吾が江山の洵美を謂ふは、何ぞ吾に其の吾郷に在るを以てならんや、實に絶對上、吾が江山の洵美なるもの、在るを以てのみ、外邦の客皆な日本を以て宛然現世界に於ける極樂土となし、低徊措く能はず、自から

花より明くる三芳野の春の曙みしなれば

頼山陽

もろこし人も高麗人も大和心になりぬへし

の所あらしむ、想ふ浩々たる造化、其の大工の極を吾が日本に鍾む、是れ日本風景の渾圓球上に絶特なる所因、日本人の吾が江山の洵美を謂ふ、抑も故あり、曰く、

日本の日本海岸と太平洋岸との大差

一、日本には氣候、海流の多變多様なる事
二、日本には水蒸氣の多量なる事
三、日本には火山岩の多々なる事
四、日本には流水の浸蝕激烈なる事
此の四の者を逐次縷述するに先ち、日本國の日本海岸と太平洋岸との一般上に大差ある事を知了せざるべからず、唯だ其の大體を表記し、以て曉々たる縷述に代へんか。

日本海岸

- (一) 日本海岸は傾斜急峻なる所多く、懸崖も多し。
- (二) 日本海岸は曲屈少し、故に短。
- (三) 日本海岸は曲屈少し、故に港、澳、熱鬧なる埠頭少し。
- (四) 日本海岸には沖積的の平原割合に少し。其の平原を稱するものも、岡臺の連嶺まで、延長する間に緩慢なる斜面となす所と云ふもの多し。
- (五) 日本海岸の地質は堅硬なる所多し。
- (六) 日本海岸の土地は沈降若くは減少する所多し。
- (七) 日本海岸には嶺山殊に多し。
- (八) 日本海岸の風位は律規正し。殊に冬季は西北風のみ

太平洋岸

- (一) 太平洋岸は傾斜緩慢なる所少く、懸崖も少し。
- (二) 太平洋岸は曲屈多し、故に長。
- (三) 太平洋岸は曲屈多し、故に港、澳、熱鬧なる埠頭多し。
- (四) 太平洋岸には沖積的の平原割合に多し。岡臺の連嶺まで延長する間に緩慢なる斜面となす所の平原は少し。
- (五) 太平洋岸の地質は疎鬆なる所多し。
- (六) 太平洋岸の土地は昇起若くは増加する所多し。
- (七) 太平洋岸には嶺山殊に少し。
- (八) 太平洋岸の風位は變化あり。然れども夏季は大概東

緒論

緒論

吹く。此の西北風は亞細亞大陸より直ちに吹き到る故に本來甚だ乾燥せるものなれども、日本海を經過する間其の蒸發したる水氣を收納し、之れを傳送して日本本州の分水脊となせる山脈の頂嶺に衝突す。此の水蒸氣は即ち此所に凝結し、分水脊以北なる土地を濕潤模糊たらしむ、故に冬中曇天多く、雪を降すこと多量。夏季は濕氣多く、夏季乾燥す。年内を概するに太平洋岸より晴天多し。

(九) 日本海岸は北方に在るが上に、其の氣象は亞細亞大陸の感化を享け(即ち大陸的)、且つ日本海の中央には寒帯海流流駛するを以て、氣候寒冷。

(十) 日本海岸は冬春の間風濤險惡、船舶の難破するもの多し。

(十一) 日本海岸の氣壓は概して太平洋岸より強し。然れども太平洋岸よりも濕氣の少量なる地方も多し。氣壓差中強。

(十二) 日本海の蒸發は太平洋よりも遅緩なり。其の鹽分は太平洋よりも少量、而して晴天少し。故に製鹽の事業盛ならず。

(十三) 日本海に注入する川河は北流す。

(十四) 石狩川 (石狩).....對

四

南風吹く。此の東南風は印度洋、支那海を経て吹き到る、故に濕氣あるが上に、印度洋、支那海より季候風中の濕氣をも携へ來り、且つ濕熱なる洋海より到るものなれば、其の經過中多量の水蒸氣を收納し來り、爲めに梅雨を醸す。又た八九月の候に到れば印度洋を経て大雨暴風の來襲すること多し。冬中晴天多く、雪を降すこと少量。夏季は濕氣多く、冬季乾燥す。年内を概するに日本海岸より晴天多し。

(九) 太平洋岸は南方に在るが上に、其の氣象は支那海、印度洋の感化を享け(即ち洋海的)、且つ其の沿岸には赤道海流流駛するを以て、氣候溫暖。

(十) 太平洋岸は夏秋の間風濤險惡、船舶の難破するもの多し。

(十一) 太平洋岸の氣壓は概して日本海岸より弱し。然れども日本海岸よりも濕氣の少量なる地方も多し。氣壓差中強。

(十二) 太平洋の蒸發は日本海よりも急速なり。其の鹽分は日本海よりも多量、而して晴天多し。故に製鹽の事業盛なり。

(十三) 太平洋に注入する川河は南流す。

(十四) 十勝川 (十勝).....對

(八) 御物川 (羽後).....對

(九) 信濃川 (信濃、越後).....對

(十) 犀川 (信濃川の幹流、信濃).....對

(十一) 神通川 (飛騨、越中).....對

(十二) 日本海中に在る島嶼は海岸に并行す、即ち海岸に沿ひて縱線的に海中に並列す。此等の島嶼は、火山脈の海中に走りて、低所は海中に沈没し最高點のみ海上に崛起し以て島を成すものにして陸地二群島を成す。此等の中未だ全く本土より分離せずして島を成らざるもの多し。

(一) 富士火山脈の北走して越後の外高山、米山、彌彦山を経て、日本海に入り、羽前の飛鳥と崛起し、尋で羽後の男鹿半島に入り、恐くは尙ほ北走して北海道の大島、小島を崛起するもの。

(二) 隆峻の島前、島後と崛起し、尋で能登半島に入り、磐爪山、鷲巢山、法龍山を経て、佐渡と崛起し、越後の粟生島と崛起し、遂に海に入りて北走するもの。

(十五) 日本海岸には概して砂糖、煙草、藍の類を産出する所多し。

(十六) 日本海岸は在來交通の利便甚だ少し。

(十七) 日本海岸は太平洋岸中よりも人口少し。

北上川 (陸中、陸奥).....對

利根川 (上野、武藏、下總、常陸).....對

天龍川 (信濃、遠江).....對

水曾川 (信濃、美濃、尾張).....對

(十四) 太平洋中に在る島嶼は洋岸に并行せず、即ち飛石の如く縱線的に洋中に並列す。此等の島嶼は、火山脈の洋中に走りて、低所は洋中に沈没し最高點のみ海上に崛起し以て島を成すものにして陸地二群島を成す。此等は皆な本土より全く分離し悉く眞正の島を成れり。

(一) 伊豆七島及小笠原群島。即ち富士火山脈の南走し洋中に入りたるものにして、大島より八丈島と崛起し、小笠原十七島を成し、明治二十四年中新版圖に入りたる硫黃島に至るもの。

(二) 大隅及沖繩群島。即ち遠く南洋諸島に起り、臺灣島を経て、沖繩群島と崛起し、薩摩群島より薩摩に入りて櫻島と崛起し、霧島山を経て肥後に入るもの。

(十五) 太平洋岸には概して砂糖、煙草、藍の類を産出する所多し。

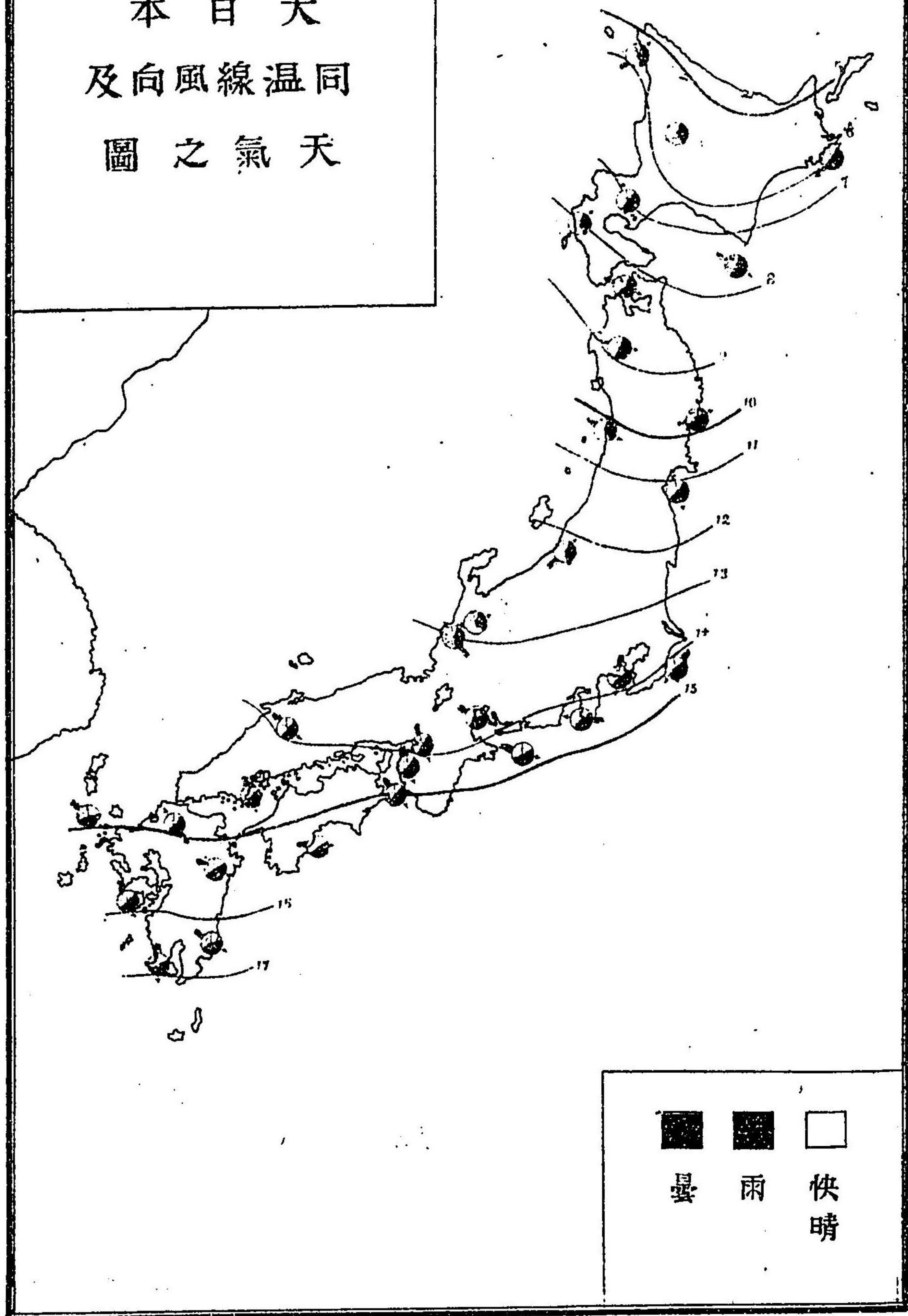
(十六) 太平洋岸は交通の利便甚だ多し。

(十七) 太平洋岸は日本海岸よりも人口多し。

緒論

五

大日本
同溫線風向及
天氣之圖



緒論

(十八) 日本海岸にては未だ日本歴史中の重要なる事件と演出したることなし。
 (十九) 日本海岸は未だ發達進暢せず、今日より發達進暢せんとするもの。
 (二十) 日本海岸は露西亞、滿洲、支那の北部、朝鮮に對するもの。

如繩路傍北暖通。不與南方景象同。
 隨月潮頭無大小。砲崖濤勢有雌雄。
 天開鴉帶晦曠日。海遠鴻呼秣弱風。
 孤客老懷自詣得。越山四度七年中。
 市川寬齋

六

(十八) 太平洋岸にては在來日本歴史中の重要なる事件と演出し、王朝歴代の興亡多くは此所に決せり。
 (十九) 太平洋岸は甚だ發達進暢し、日本の文化は多く此所に榮りたるもの。
 (二十) 太平洋岸は支那の南部、南洋諸島、濠太利、米國に對するもの。

紅噉直上亂松邊。萬井人家乍燦然。
 水合祥流蹄大壑。山陀餘勢赴平川。
 少連逸事哀殘闕。武衛遺民痛變遷。
 滿眼昇平今有象。蘆花洲化稻花田。
 曾我耐軒



不信人間竟無力。欲俯仰并破天懷。遺恨力薄破未了。狂教馮夷擬且頽。大塊文章看何日。黑風白雨妙儀山。

妙儀山下遇雨

市川寬齋

日本には氣候海流の多變多様な事

日本の氣候
日本の海流

日本の氣候

日本の氣候の偏
差は多様なり

(二) 日本には氣候、海流の多變多様な事。

吾が日本、細長き島國、蜿蜒として北より南に延び、其間亘ること實に二十有七度、北の方北極圈を距るゝ緣かに十度半、南の方熱帶圈を去る些々半度氣候宛として半寒帶温帶半熱帶を包羅す、其の海流の如き、太平洋沿岸の南半は赤道海流、黒潮の洗ふ所となり、北半には寒帶海流、親潮、駛走し、日本海沿岸にも亦た赤道海流の一派、對馬海流、注ぎ來り、寒帶海流(リマン海流)の餘派、其間に錯流す、吾が日本や實に寒熱兩海流の會所に當る、其の風候に至りては、冬春の間は亞細亞大陸より西北風、迷々として到り、五月六月、印度洋上季候風變化の餘派、到り、九月十月復た到り、而して沖繩群島の邊は東北貿易風吹くこと、孺々既に然り、吾が日本や寒温熱三帶の間に據在し、寒熱兩海流の會所に當り、變風季候風、恒風の三風域に跨る、加ふるに日本の地勢たる幅狹くして、而して高崇たる山脈の聳立するものなれば、日本には氣候、海流の多變多様な事

日本の生物

日本の生物は寒熱兩帶のもの相錯互す

日本には氣候、海流の多變多様なる事
海岸より山嶺に到るまで氣候の偏差多様に半熱帶、温帶、半寒帶、寒帶を併有するあるをや宜べなり造化の萬象其の開闢變化の狀昇降奇正の形生育殖發の功を吾が日本の内に鍾めたることや
且つ夫れ日本の地形一羣水の海峡を距て朝鮮半島より滿洲の寒帶平原に通じ北海道より樺太島薩哈連を経て髮の如きの峽水直ちに西比利亞寒帶平原に入り又た千島群島より忽ちカムサッカに連り而して南方沖繩群島より台灣を経て印度支那南洋諸島と相應接す是を以て其の

(一) 生物

の如き寒熱兩帶のもの相錯互し百尋の雪塊上に北極光高く半空を繞り其影氷海を掩映して地平線外遙かに紅を抹する處一羣の海豹聲を和して長へに嘯き臘胸獸身を掠めて相躍るの邊千島群島より白珊瑚礁上椰樹影婆娑鳳梨朱欒芭蕉翠色滴れんとし榕樹蓋の如く乳枝地に垂れて根を生じ忽ち幹と成り更に乳枝を生じて新乳枝復た新幹と成り宛然人をして印度亞弗利加の内地に携へ去るの感おらしむる處榕樹は土佐の

日本は寒熱兩帶の風物と兼併す

日本の松柏科植物

蹉陀岬同岬上の諸島日向大隅薩摩の一部沖繩群島に繁殖す 珊瑚礁は沖繩群島の一部小笠原群島に見るに到るまで造化は此處に一幅の妙畫譜を展開す冬間富士川の谿間に入らんか谿の亂竹雪に壓せられ折れて憂々響をなすや猿の稟性素と怯懦なるを以て爲めに恐悚し凄絶哀絶なる啼聲を放ちて聲々相和すを聞く日本人或は視開して以て尋常の事となす而かも累雪の下に竹蔭猿聲共に熱帶的生物を視開すとは到底印度亞弗利加人の腦裡に描く能はざる所寒帶熱帶の風物を兼併する字内寧ろ日本の如き處わらんや且つや夏間は降雨連りに到り其量多大加ふるに其間の温度甚だ高きを以て熱帶植物能く豊茂し諸般植物も亦た蒼翠秀潤轉た熱帶地方に在るの觀おらしむかど想へば亦た温帶半寒帶に生育する

(二) 松柏科植物

は國中到る處に之れを看る蓋し松柏科植物の日本國中到る處に存在する是れ日本國民の氣象を涵養するに足るもの日本人間々櫻花を以て其日本には氣候、海流の多變多様なる事

松柏は日本人の性情の標準となすに足る。

日本には氣候、海流の多變多様なる事
十
の性情を代表せしむ櫻花美亦佳其の早く散る所是れ惜まるゝ所なるも、忽ちにして爛熳忽ちにして飄落し、風に抗す能はず雨に耐に得ず、狼籍して春泥に委す所寧ろ日本人の性情とせんや、松柏科植物は然らず、獨り隆冬を経て凋衰せざるのみならず其の蘆々たる幹は天を衝き、上に數千鈞の重量ある枝葉を負擔しながら、孤高烈風を凌ぎて扶持自ら守り、節操尙適庸々たる他植物に超絶するが上に、其の態度を一瞥せば幾何學的に加ふるに美術的を調和する所、誰れか品望の高雅なるを嘆せざらんや、想ふ松柏の蘆々天を衝くは本性たり、而かも其根を托するの土壤や少量に、四圍の境遇も亦た逆ならんか、假令其幹をして天を衝かしむる能はざるも、豪氣竟に屈せず、斷崖絶壁石面稜層の上と雖も猶ほ且つ根を硬着し、幹や枝や葉や四時克く勁風に抗し、他の生平艶を競ひ媚を呈せる軟弱の植物は枯死し盡くすも、獨り堅執して以て生存し、而して會々斧を以て斬伐せられんか、些の未練を遺すなくして昂然踏るゝ所他の花木の企つべきにあらず、眞に日本人の性情中の一標準となすに足れり、瑞西の歴史を立論

日本は松柏科植物に富り

對馬の海岸

する者曰く、瑞西の歴史は不羈獨立を酷愛する民人の歴史なり、而して瑞西史の精粹は蒼健高聳なる松林の中に成育せるシニウツツウリウンテルツアルデン三州の民人に存す、松以て三州民人の性情を感化し、グネレル松林の中より身を挺で、埃太利の苛政に抗し、近古三州の民人松林の中より首として羅馬法王及び僧侶の非行を倡へたりと、松や松や何ぞ其の民人の性情を感化するの偉大なる、特に日本は松柏科植物に富み、實に全世界中第一の産所と稱せられ、黒松赤松海松五鬚松檜杜松ハヒネズシヤマロ杉樅アナボウモミトヤマツシラヒンコウヤウツサン金松水松羅漢柏樅粗樅等列擧するに遑なからんとす、是れ日本人の性情を感化するもの、何ぞ漫に英吉利人をして其の榭樹、蘇格蘭人をして其の山毛櫸、佛蘭西人をして其の落葉松、伊太利人、西班牙人をして其の橄欖を誇揚せしめんや、對馬の海岸を過ぎり、其の懸崖直立數百尺、西北風蓬々として黃海より吹き到り、怒潮百碎崖に激して萬斛の白雪を噴く處、其上より松樹の些の屈撓する所なくして生長し、或は聳直風を凌ぎ、或は欹斜して水を探ぐらんとす

日本には氣候、海流の多變多様なる事

日本は松園なるべし

日本には氣候、海流の多變多様なる事
十二
するの状を看る者誰れか夫の元寇の際州の目代右馬允七郎宗助國文永十一年十月六日が慨然八十餘騎を拉して胡元の戰艦九百餘艘三萬餘人を反撃し三子親姻と共に身を國に殉じたる偉蹟に酷類するを想起せざらんや日本は松園なるべし櫻花園と相待たざるべからず



日本の禽鳥類

(三) 禽鳥類

に到りては寒帶よりする者熱帶よりする者皆な日本に集合し且つ熱帶より寒帶に到る者寒帶より熱帶に去る者皆な日本を以て經過所となし鶯の渡せる橋の如く是を以てか日本に翱翔する禽鳥三百八十一種中百四十六は全く寒帶種に屬し百三十九は東半球の寒帶種に屬し四十七は熱帶種に屬し而して殘餘の四十九は日本絶特の者に係る夫の丹頂鶴や卷旋せる長き細き氣管を有するを以て一たび喉きて其聲幽亮所謂九臯より天に開ゆる者は是れ西北利亞朝鮮を冲けて我に到る所夫の島巡り鶯やアマ鶯や新秧十里一望蒼茫其の白色を以て此間を點綴する者は是れ熱帶地方より來る所且つや日本の地四方を環らすに洋海を以てし別に特立するを以て禽鳥も亦た此處に到來して特立する者多く而して自から新種新變種を化成するに到る日本に絶特なる禽鳥の多在するは此の所因ダーウソックスの島國は生物の新種を多成すと立説したるもの吾が日本之れを例證して餘あり乃ち倭國の一新種の如き日本に絶特な日本には氣候、海流の多變多様なる事 十三

日本には氣候、海流の多變多様なる事
る者あり、焉んぞ知らん其の

栗 本 飽 庵

と賦せしめたる鴝鷓の如きも、亦た悲涼凄楚の聲を以て長嘯する所の一
新種にあらざるなきを得んや、想ふに此個の鴝鷓、月前の枝に在りて聲々
悲涼凄楚、此の亡國の遺臣をして、數莖の白鬢を添へしめたるならん。
獨り禽鳥類のみならん。

(四) 昆蟲類

に到りても多種に、寒帯、温帯、熱帯の者相齊しく生息し、特に

日本の昆蟲類

(五) 蝴蝶

の如きは、舊北地方現存の種類中、五百餘種三分の一、百七十餘種は、日本國
中に欣々として翩翩するが上に、温度の偏差多様なるが爲めに、蝶の期
節中其の感受せし所の温度に随ひ同一種の者と雖も、其の狀態を多様に
變化して現出し、所謂同種變形を作り、同族中の異種よりも却て其の差異

日本蝴蝶の「同
種變形」

色

春

(晩冬ヨリ初春ニ
渉ル者ヲモ合ス)

●薔薇科

梅●李●杏●梨●林
檜●郁李●梅桃●木
瓜●シロバナイチゴ
●コデマリ

●百

●殼斗科

●榲桲●柯樹●オホナラ
●コナラ

●錦

●十字花科

薺●菜菔●蕪菁

●芸

●木蘭科

玉蘭●辛夷

●薔

●石楠科

山躑躅●イハナシ

●虎

●葡萄科

葡萄●ヤマブドウ

●厚

●荳科

紫雲英●胡豆

●歸

●厚皮香科

山茶

●馬

●木犀科

女貞

●菊

●楊柳科

白楊

●忍

●樺木科

赤楊

●睡

●松柏科

公孫樹

●千

●瑞香科

デンチヤウゲ

●次

●忍冬科

接骨木

●栞

●唇形科

野芝麻

●鼠

●莖菜科

マルバスマミレ

●桔

●菊科

蒲公英

●景

●蘭科

染ヶ香

●胡

●菊科

蒲公英●萵苣●金盞
草●風趨草

●菊

●木犀科

迎春花●連翹

●睡

●木蘭科

南五味子

●金

●毛茛科

側金盞花

●薔

●薔薇科

桃棠花

●殼

●瑞香科

黃瑞香

●無

●十字花科

莖蓋

●荳

●荳科

レダマ

●天

●石楠科

山躑躅

●毛

●楊梅科

楊梅

●薔

●石楠科

山躑躅

●紫

●薔薇科

紅梅●桃●緋桃●櫻
桃●ヒガンザクラ●
海棠●木瓜

●千

●薔薇科

薔薇

●毛

●薔薇科

薔薇

●薔

●薔薇科

薔薇

●千

●石楠科

山躑躅●山梨●石楠

●荳

紫								赤 及				紅		黃 類		黃																																	
●百 合科	●紫 草科	●瑞 香科	●木 通科	●石 楠科	●木 蘭科	●荳 科	●莖 菜科	●蘭 科	●荳 科	●櫻 草科	●木 犀科	●厚 皮香科	●石 楠科	●薔 薇科	●楊 梅科	●石 楠科	●荳 科	●十 字花科	●瑞 香科	●薔 薇科	●毛 茛科	●木 蘭科	●木 犀科	●菊 科	●蘭 科	●菊 科	●莖 菜科	●唇 形科	●忍 冬科	●瑞 香科	●松 柏科	●樺 木科																	
山慈姑	紫草	芫花	通草	山躑躅	木蘭	蘇方木 胡豆	紫花地丁 コスミレ ミヤマスマミレ	ニヒネ	レンゲ	クリンサウ	女貞	山茶 茶梅	山躑躅 山巖 石楠	紅梅 桃 緋桃 櫻 桃 ヒガンザシ 海棠 木瓜	楊梅	山躑躅	レダマ	蟹蠶	黃瑞香	桃棠花	側金盞花	南五味子	迎春花 連翹	草 風趣草	蒲公英 萬草 金盞	朶々香	蒲公英	マルバスマミレ	野芝麻	接骨木	デンチヤウゲ	公孫樹	赤楊																
●睡	●薔	●虎	●馬	●桔	●旋	●木	●玄	●茄	●綿	●蓆	●荳	●藜	●茄	●睡	●石	●夾	●蘭	●百	●菊	●錦	●馬	●荳	●千	●毛	●薔	●天	●荳	●錦	●殼	●無	●荳	●金	●薔	●睡	●菊	●胡	●柳	●胡	●織	●景	●結	●鼠	●殼	●桑	●柳	●夾	●千	●睡	●馬

合春スニ

夏

(晩春ヨリ初夏ニ)
渉ル者ヲモ合ス

秋

(晩夏ヨリ初秋ニ)
渉ル者ヲモ合ス

冬

(晩秋ヨリ初冬ニ)
渉ル者ヲモ合ス

香梨林
梅桃木
バナイチゴ

オホナラ

燕青

辛夷

イハナン

イソトウ

胡豆

マウゲ

スミレ

高貴金蓋
草

連翹

丁

17

百合科

萱科

錦葵科

芸香科

毛茛科

薔薇科

虎耳草科

木蘭科

厚皮香科

忍冬科

蘭科

粟科

菊科

馬鞭草科

千屈菜科

夾竹桃科

柳葉菜科

胡椒科

景天科

胡蘆科

カンコユリ
ユリ
オニユリ
紫モ
紫毛玉蘭花
ウチヤクサウ

シラフデ
シノヒメ
クサ
葛
胡豆
アサギ
錦葵
木樨
苧麻
野西瓜苗

柑
臭橙
柚
枳
鐵線蓮
牡丹
芍薬
薔薇
カナメガシ

コメウツギ
ソメイウツギ
ヒメウツギ
虎耳草
天女花
華草
ナツツバキ
水天蓼

厄子
満天星
ツバネサウ
クハネサウ

菊
ウスユキサウ
聖子粟
虞美人草
フウラン
石解
牽牛
花

海州常山
ビシヨザ

選
安石榴
夾竹桃

栲
楮
椴
椴

椴
椴
椴
椴

椴
椴
椴
椴

椴
椴
椴
椴

椴
椴
椴
椴

椴
椴
椴
椴

椴
椴
椴
椴

椴
椴
椴
椴

椴
椴
椴
椴

椴
椴
椴
椴

椴
椴
椴
椴

椴
椴
椴
椴

蓼科

菊科

藜科

錦葵科

萱科

石竹科

龍膽科

千屈菜科

取醬科

龍膽科

木本科

龍膽科

龍膽科

龍膽科

龍膽科

龍膽科

龍膽科

龍膽科

龍膽科

龍膽科

蕎麥
水蓼
馬蓼

菊
茵陳蒿
藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

藜
藜
藜
藜

厚皮香科
山茶
茶梅
茶若

薔薇科
枇杷
梅

菊科
菊

木犀科
ヒラギ

石蒜科
水仙

芸香科
茵芋

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬



冬季間ハ花甚ダ少シ、然レトモ園ノ
勞苦培養ノ結果トシテ化成シタル冬菊
アリ、冬牡丹アリ、冬櫻アリ、冬至梅
アリ。要スルニ原種ヨリ變種ヲ新創ス
ル技術ニ到リテハ日本ノ園丁ハ實ニ萬
國ニ冠絶ス。
山茶、茶梅ハ冬間初メテ開花シ、積雪
層氷ノ中ト雖モ依然タリ、此ノ如クシ
テ翌年四月頃マテ開花ヲ連續ス、是レ
海外人ハ最モ驚嘆スル所トス。

●木犀科 迎春花
●蝦梅科 蝦梅

冬季間ハ山野悉ク赭黄色ヲ帯ブ

ル技術ニ到リテハ日本ノ園丁ハ實ニ萬國ニ冠絶ス。

山茶、茶梅ハ冬間初メテ開花シ、積雪層氷ノ中ト雖モ依然クテ、此ノ如クシテ翌年四月頃マテ開花チ連續ス、是レ海外人ハ最モ驚嘆スル所トス。

蠟梅科 蠟梅

木犀科 迎春花

冬季間ハ山野悉ク赭黄色ヲ帶ブ

厚皮香科 山茶・茶梅

毛茛科 牡丹

萱菜科 イウテフクツ

- 千屈菜科
- 取醬科
- 龍膽科
- 鳶尾科
- 禾本科
- 薑科
- 千屈菜科
- 取醬科
- 龍膽科
- 鳶尾科
- 禾本科
- 薑科

- 胡蘆科
- 菊科
- 薔薇科
- 金絲梅科
- 無患樹科
- 殼斗科
- 錦葵科
- 天南星科
- 毛茛科
- 龍膽科
- 金絲桃科
- 無患樹科
- 天南星科
- 龍膽科

- 薔薇科
- 毛茛科
- 罌粟科
- 千屈菜科
- 馬鞭草科
- 錦葵科
- 菊科
- 松科
- 檜科
- 杉科
- 柏科
- 花科

- 薔薇科
- 毛茛科
- 罌粟科
- 千屈菜科
- 馬鞭草科
- 錦葵科
- 菊科
- 松科
- 檜科
- 杉科
- 柏科
- 花科

- 薔薇科
- 毛茛科
- 罌粟科
- 千屈菜科
- 馬鞭草科
- 錦葵科
- 菊科
- 松科
- 檜科
- 杉科
- 柏科
- 花科

●コスミレ
●スミレ
●胡豆

●桃●櫻
●山椒●石楠

●高麗●金盞

●薔薇科
●毛茛科
●罌粟科
●千屈菜科
●馬鞭草科
●錦葵科
●菊科
●松科
●檜科
●杉科
●柏科
●花科

●薔薇科
●毛茛科
●罌粟科
●千屈菜科
●馬鞭草科
●錦葵科
●菊科
●松科
●檜科
●杉科
●柏科
●花科

●薔薇科
●毛茛科
●罌粟科
●千屈菜科
●馬鞭草科
●錦葵科
●菊科
●松科
●檜科
●杉科
●柏科
●花科

●薔薇科
●毛茛科
●罌粟科
●千屈菜科
●馬鞭草科
●錦葵科
●菊科
●松科
●檜科
●杉科
●柏科
●花科

●千屈菜科
●取醬科
●龍膽科
●鳶尾科
●禾本科
●薑科

●千屈菜科
●取醬科
●龍膽科
●鳶尾科
●禾本科
●薑科

ル技術ニ到リテハ日本ノ園丁ハ實ニ萬國ニ冠絶ス。

日本の花

日本の食鳥類、
蝴蝶の地産蝶類
たる所因

櫻花と松柏とを
調合安排せしむ
のを以て日本人

を顯著ならしむことなれば日本國中に翩翩する蝴蝶の種類は愈々多
るが如く加ふるに

六 日本の花

は其の種類眞に多々白色黄色類黄色紅色紫色の者濃淡相競びて亂開し、
紛披掩映日本の宇宙は皆な花此間に翩翩する者如何ぞ類形の原則上其
色を此花に類せしめ其羽の光澤を此花に似せざるなけんや日本國中の
禽鳥蝴蝶の瑰麗燦爛たる固より所因あり試みに日本の花卉の大抵を列
挙すべきか。

(別表 參觀)

此の錦繡の間蒼健高聳の松柏科植物を點綴す花之れと映發して愈々鮮益、
麗西京の嵐山の如き實に是れ若し夫れ花のみならんか如何ぞ其鮮麗を
添ふに足らんや松柏科植物を待ちて愈々益其の鮮麗を添ふ櫻花の如き
特に然り蓋し櫻花と松柏とを調合安排せしむのを以て日本人將來の特
性となさざるべからず舉目の風物は眞に此の特性を涵養するに足る人

日本には氣候、海流の多變多様なる事

將來の特性を
さぐるべからず

橋南翁の「氣候」
説

日本は一個の
島山なり

薩摩、大隅、
日向地方の氣
候、生物

日本には氣候、海流の多變多様なる事

十六

豈に竟に之れに辜負せんや。

之れを要するに、日本國の位置にして縦線的に綿亘せずして地平線的に横ばらんか、如何ぞ氣候、海流、風位、生物の變化、此の如きあらんや、如何ぞ江山の洵美、此の如きあらんや、眞個の天縱、一百年前、石見の醫人橋南翁なる者、日本の東西に歴遊し、歸來記する所亦た以て參考となすに足るものあり、曰く、

先日本にて論すれば日本は一つの島山にして其島山の絶頂といふは信濃國なりそれより四方へなたれ下り東西の國あり南北の國あり南面北面それくの向きあり薩摩大隅日向の地は甚南にありて最暖氣の國之雪霜水の類は其方角によりて全く無き所ありそれゆゑ彼地いかなる高山深谷といへども三冬にわたりて雪有る事無し又人家に火爐といふものなく足袋頭巾の類用るに不及尤冬は天氣常に晴朗にして風亦強からず此ゆゑに冬も虫蟄せず蜘蛛蚊蚋蛇虺の類四時有り亦草木も是に應し蘇鉄蘭の類も自然生の山有り人家の庭にも直に植

北國地方の氣
候、生物

南國と北國と
一般の比較

てよく繁茂す櫻に冬より咲花あり梅も葉せず葉有なから花咲く葉と花と一度に見る事は珍敷事之柑欄龍眼肉皆實のる松竹よく榮ふ北國は是に異なりて高山深谷は四時雪消せず冬は氷柱軒端にくたりて水晶簾のごとく氷厚く堅きこと玉石のごとし大河急流といへども皆氷りて車馬水上を往來す此ゆゑに足袋頭巾冬春の二季はしばらくもはなすべからず火爐のみならず圍爐裏甚大にして晝夜盛に火をたく又九十月の比より春三四月の比までは毎日毎夜天氣曇り雪ふらざれば雨降霰わり北風また常に烈敷して面をむくべからず此故に秋冬春は虫絶て無し夏も甚少し草木も皆色白く其種類も南方よりは甚少なし竹絶て無し松も又甚稀なり梅櫻桃山吹藤躑躅梨李石榴杯雪消て後に開くゆゑに皆四五月の比に一様に花咲なり梅は若葉出ると花咲と一度にして葉花を一度にみる南國の梅は葉不落して花咲き北國の梅は葉出て花咲く氣候の相違かくのごとく甚し此ゆゑに北方は寒烈の氣にて氷までも堅く南方は暖和の氣にて石までもやはらかなり北方

日本には氣候、海流の多變多様なる事

十七

中部の地

日本には氣候、海流の多變多様なる事
十八
は巖石堅剛なりゆゑに山嶽峩々として高く聳は是に應じて海甚深し
越中立山の沖に當れる海ふかさ三百尋の餘に及べるにても知へし山
高き所は其海必深し南方は石やはらかなるゆゑ土地に骨無く山嶽高
く聳ることわたはず南嶽の諸國高山無く海また甚淺し地球の中に
凡日本程山高く海深き國は稀なり此事萬國の地理を論せる書に委し
日本の内にては南方の山は平穩にして巖石なく樹木茂れり土地たに
かくのこどくなれば人の氣も剛柔の相違あり獸も北方は猛惡のもの
多し鷹鷲の類も北方の者に慄悍の氣あり毒有る物香ひ有る者は北方
には稀にして南方に多し只中部の地は四時の氣候正しく生類も中和
の氣を受得て剛柔の偏なく萬物ゆたかに備りて實に王者の住所なり



日本の生物
に関する品
題

歐米人の其國に
在りて看る能は
ざる所と取り品
題となすべし

日本の生物に関する品題

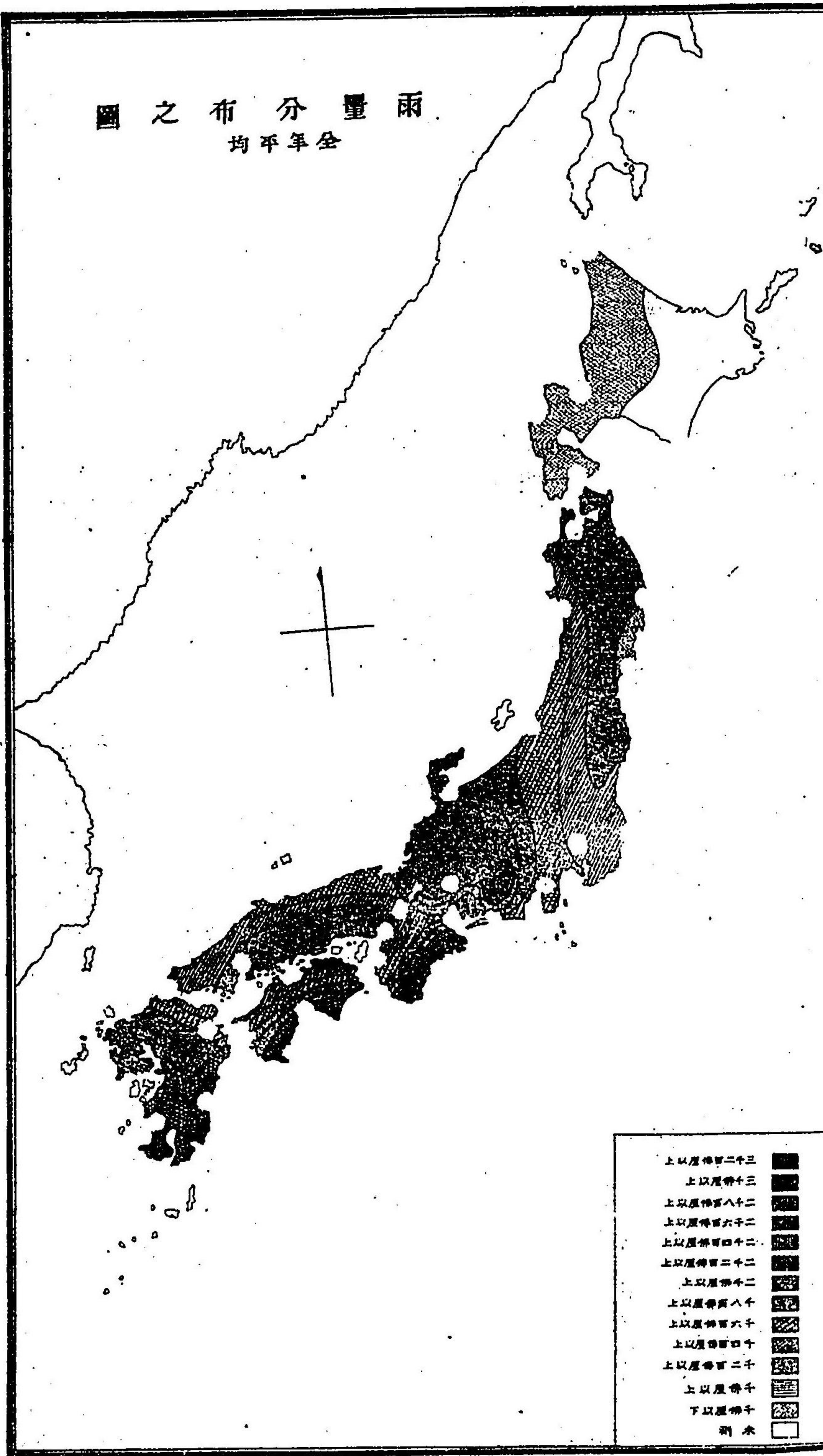
是れ日本の生物に関する詩歌俳諧畫彫刻の品題なり植物若くは動
物の日本固有の者若くは日本固有の風物にして歐米人の其國に在
りて看る能はざる所のみを撰擇す日本の文人詞客畫師彫刻家風懷
の高士は須らく歐米人の其國に在りて看る能はざる所を取り品題
となすこと可

- (一) 新秋滿頃白鷺魚を窺ひて情立す。
- (二) 荒城古戌夜深く鴉鴉孤棲して缺月に嘯く。
- (三) 紫駟嘶きて櫻花の雪に入り去る。
- (四) 夕陽倒射公孫樹葉金を累ぬる間浮圖塔脊其上に露はる。
- (五) 小豆花の深き處草蟲鳴く。
- (六) 南燭の實珊瑚を綴る一雙の繡眼兒之れを啄き來る。
- (七) 瀑布直下カヤクマリ鳥一群巖樹の間に翱翔和鳴す。

日本の生物に関する品題

十九

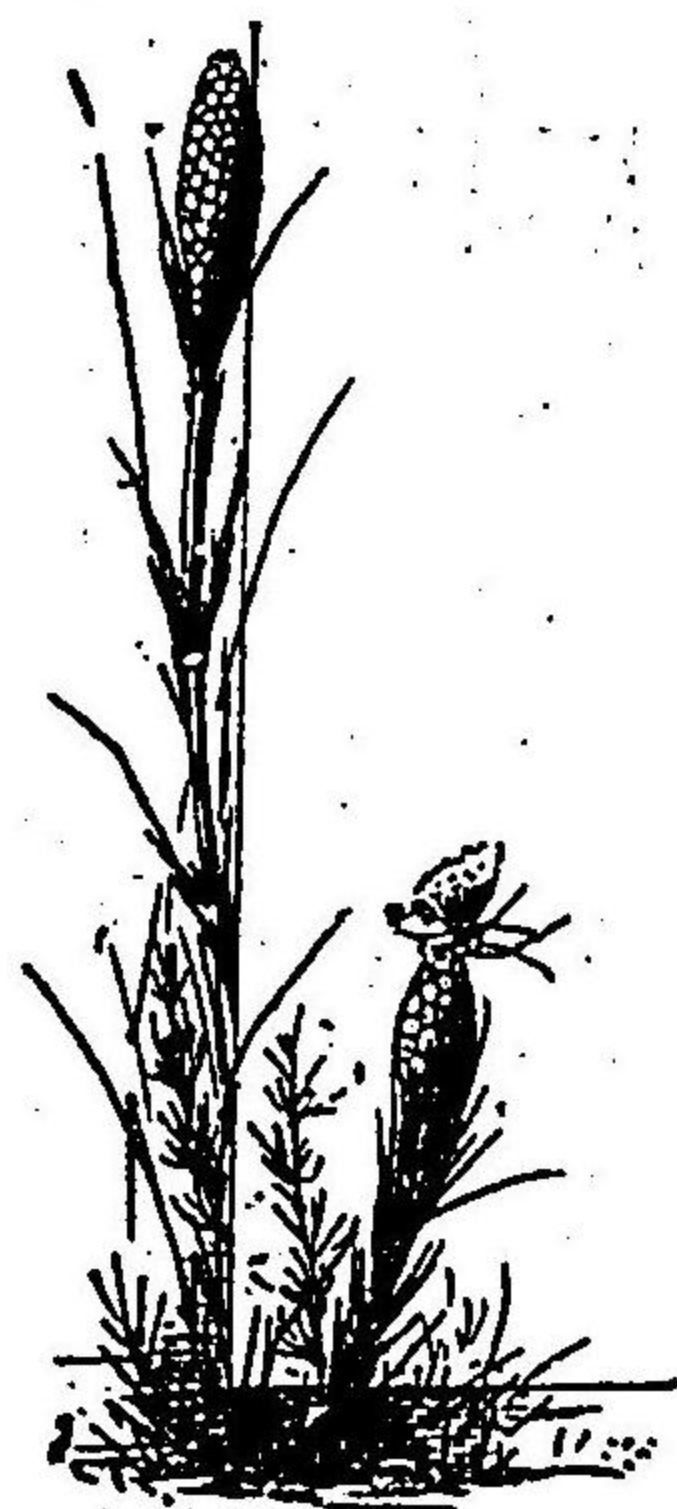
雨分量分布之圖
全年平均



(八)(九)(十)(十一)(十二)(十三)(十四)

日本の生物に関する品題

谷内の村墟梅花遮蔽屋脊少しく露はる。
 舞後の秋水菱を採るの小艇蕩漾す。
 火山岩磊落潮水に浸して半ば露れ、カラスバト鳥其上に停まる。
 華表柱頭暮煙方さに合し林梢微茫青鷗遠へり去る。
 曙色滿天水光千頃曉露蓮花を洗ひて淡紅滴れんとす。
 夕陽松樹に在り、馬を下りて古陵を吊ぶ處頭白の鳥啼く。
 海豹氷塊の上に嘯き、船帆北風を剪りて飛ぶ。



日本には水蒸氣の多量なる事

日本に於ける水蒸氣の

晴色
霧霞
殘煙

(二) 日本には水蒸氣の多量なる事

我が日本四面皆繞らすに大瀛の水を以てす水蒸氣の多量なる知るべきのみ況んや温暖海流黒潮及び其の支流の蒸發を促すわり温暖海流の寒冷海流と相衝突するわり加ふるに西北風は亞細亞大陸より日本海の水蒸氣を拉して到り東南風は多濕なる印度洋より來る而して國の中央には峻崇たる山脈海岸線と相并行して連續す水蒸氣の之れに撞撃して凝結する固より然り。

(一) 日本に於ける水蒸氣の現象

是を以て朝暾僅かに昇るや光線は此の水蒸氣の分子を透して來り紅靄濃淡曙色特に一層の趣を加ふ而して夕陽西山に春かんとするや餘照は暮雲に掩映して五彩色をなし殘煙は沈まんとして尙ほ樹梢に棲む是の如きの景象多く大陸に見ざる所大陸の文人詩客が雲の形容を誤り其の畫師が雲を以て故さらに詭怪に描くは蓋し多く水蒸氣の變化を目睹せ

日本には水蒸氣の多量なる事

日本には水蒸氣の多量なる事

二十二

ざるを以て然るか其の陽春三月百花亂發するの候に到れば這般の水蒸氣は霞となり、

小夜ふかくかすみの網にいる月を

正

徹

ひくやみなどの蛩のよひこけ

霞の網や、蛩人喚聲の分明なるや其の水蒸氣の多量あること測り知るべきのみ既にして印度洋上貿易風季候風と相交錯し季候風の北進するや、氣象雨氣を催はし漸くにして卯の花くだしとなり、五月雨(梅雨)となり、虎の涙雨となり多感の詩人をして

卯の花くだし
五月雨
虎の涙雨

霏々漠々滿天墜云是名妓於菟淚於菟曾在大磯里玉貌華顏拔於萃一夜奇緣呢十郎慵向他人進杯陽豈圖孤負鴛鴦枕提劍去赴復讐場黃泉報父死何烈翠閨棄妾恨何滅富士山下獨躊躇涕淚萬行滴不絕淚能化花竟凋萎淚能染竹有枯時妾淚好作滿天雨長瀧富士山下祠

村上 佛山

の句あらしむ九月十月印度洋上季候風の南退し貿易風と相交錯するや、

二百十日

所謂二百十日前後の天候を現はし既にして冬季に入り會々太平洋上の温暖海流所在の蒸發を促し空氣方さに稀薄となるや亞細亞大陸上なる重厚の空氣は之れに乗じて衝き到り西北の方向を取り日本海を経て其間の水蒸氣を携へ來り忽ちにて日本の中央に連續せる大山系に撞撃し遂に此處に凝結して所謂

大嶽削成三萬丈絶巖縹緲有無中吹散雪氷來作雹濤聲動地北溟風

仁科 白谷

の狀をなし此の如くして中央大山系以北の地に雪空をなし雪もよひをなし雪かこしをなし六花繽紛山陰北陸東山北海の四道一面の銀世界となるは此の故正に是れ

雪空
雪もよひ
雪かこし
六花

立山如玉立上有太古雪三伏炎蒸日寒光猶凜冽况此深雪時望之皆欲

裂立山

大窪 詩佛

水蒸氣の感化其の日本の天文地章を洵美ならしむ現象を縷述すべきか

日本には水蒸氣の多量なる事

二十三



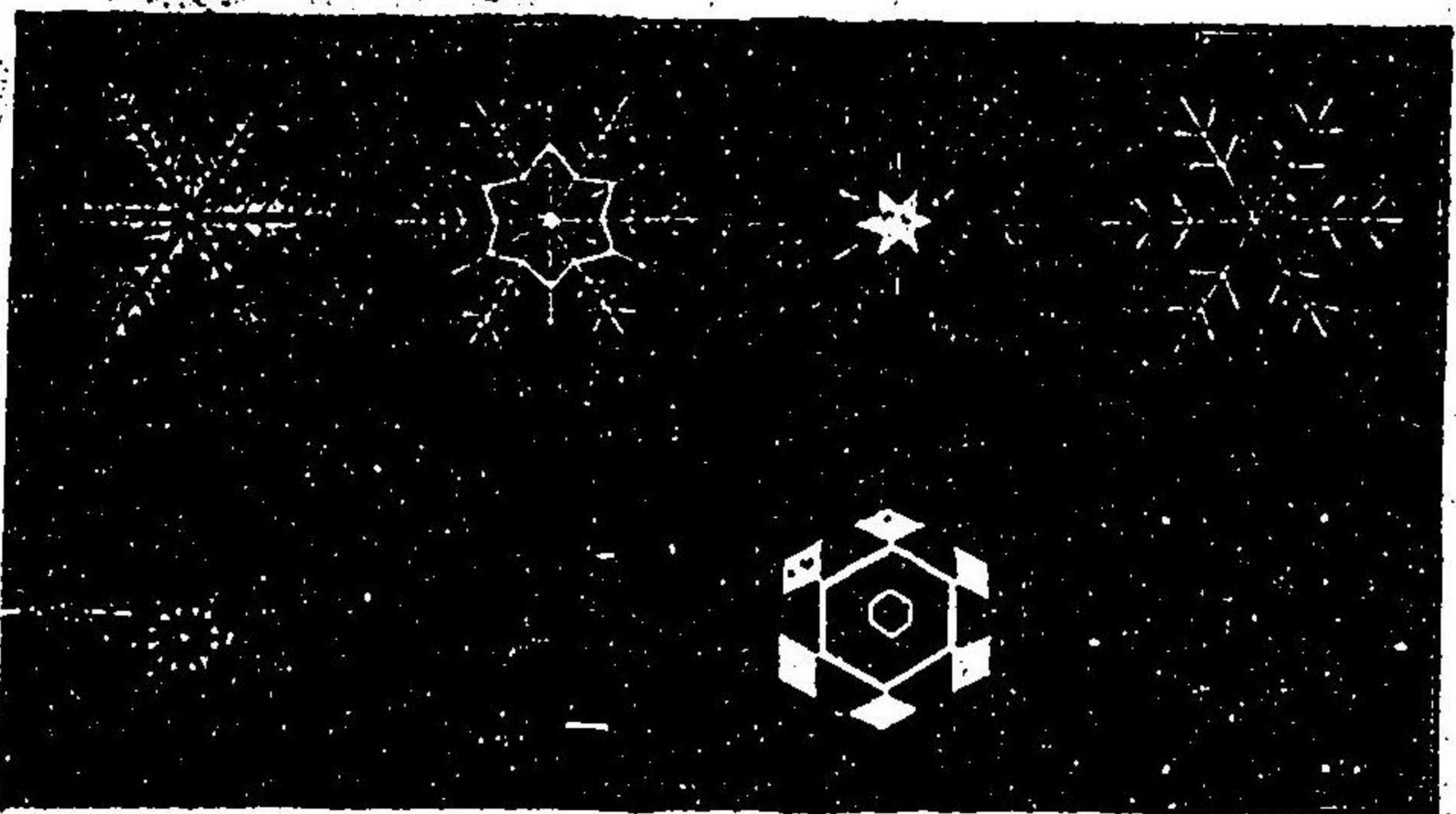
東山道の春。

東海道の初夏。山陰道、北陸道の夏。



紀南半島、四國の南、半九州の秋。

北海道の冬。



東山道の水蒸氣(春)

(二) 東山道の水蒸氣(春)

亞細亞大陸よりの西北風、日本海を經過する間に、其の水蒸氣を拉して吹き到り、日本中央の大山系即ち東山道諸國の中央に重疊せる山系に撞撃するや、水蒸氣は此處に凝結して霜となり氷となり霰となり雪となり、山道諸國を充塞するも、四月春氣漸く發し、

はるはいまかすみそわたる最上川

具 氏

龍のこほりもどけやそむらむ

と、恰かも側金盞花は陽皇の正使として、南谿解氷雪の下先づ咲ひて來り、次で赤楊は流れ初むる潤水の上副使として、其の叢生花を示す。既にして温度頗る高昇、雪俄かに解け、

ゆき解けや鴨も首ふる最上川

素 盈

東山道に於ける百花一時發達の盛觀

の候となるや、石楠梅、桃、櫻、李、梨、杏、カツラ、玉蘭、木蘭、辛夷、一時に競發し、紅なる者、白なる者、黄なる者、紫なる者、圓き者、細き者、珠玉の如き者、體式雷同せず、或は火山岩下に倚り、或は花崗岩の懸崖に臨み、或は棧橋に沿ひて、渾

日本には水蒸氣の多量なる事

二十五

水を探り或は嶺上の茅店を環り或は故關の曙色に開く葛因是句あり梅
 桃李無次第二十四番一時風と此の如きの景象南方人士の看る能はざ
 る所蓋し山道各地百花の一時に競發するは冬季中蓄芽の多量の水蒸氣
 に涵養せられ内心鬱勃春來温度の激昂に刺戟せられ嘔ち發奮するに因
 る試みに東山道各地と東海道各地と冬季中の濕度及び春來温度の變化
 を比較せんか。

百花一時競發の
 所因

濕度(100ヲ以テ飽和トス)

温度 (攝氏)

地名	北緯	海拔	十二月	一月	二月	三月	平均	一月	二月	三月	四月	五月	六月
岐阜	三五.二七	四九五	八〇	七七	七三	七三	七五.三	二五	三四	六九	一二.七	二六.九	二二.三
長野	三五.四〇	一三八七.三	七九	八四	七八	七三	七八.五	二二	四四	九八	一四.五	一九.二	一九.二
宇都宮	三五.三三	四二二.五	七四	六九	六六	七三	七〇.三	〇.四	一八	六八	一〇.二	一六.七	一八.九
福島	三五.四五	二〇四.六	七七	七九	七六	七五	七六.八	〇.四	一五	六二	一一.〇	一五.二	一九.〇
石巻	三五.二六	一四七.八	七九	八三	八〇	七五	七九.〇	〇.八	〇.一	四五	九.一	一三.六	一六.九
宮古	三五.三八	一〇〇.三	七一	七二	七三	七三	七三.〇	下零	〇.六	二六	七.七	一三.七	一五.一

道	青森	山形	秋田	津	名古屋	濱松	沼津	東京	銚子
緯度	四〇.五一	三五.二四	三五.四二	三五.四三	三五.二〇	三五.四三	三五.四一	三五.四四	三五.四四
湿度	一四.二	五〇.三	三三.七	八六.一	五〇.二	九一.四	三三.七	六九.三	九二
一月	七九	八二	八二	六六	七三	六八	六九	六八	七三
二月	八一	八七	八四	六六	七三	六四	六六	六六	六八
三月	七九	八三	八二	七二	六九	六三	六七	六七	六八
平均	七六.七八	七六.八二	七八.一五	七二.七〇	六九.七一	六三.六五	七〇.六八	七〇.六八	七二.七〇
一月	三一	二〇	一九	三九	二〇	四四	四八	二六	五二
二月	二六	〇.九	二六	五六	三九	四九	五一	三五	六〇
三月	〇.八	四.三	二.三	八四	八四	八三	八五	七〇	九七
四月	六.七	九.四	八.二	一一.三	一一.九	一一.五	一一.四	一一.二	一一.三
五月	一三.一	一五.一	一三.九	一八.六	一八.六	一七.〇	一六.八	一六.九	一六.九
六月	一五.八	一八.七	一七.五	二〇.九	二〇.九	二〇.八	二〇.七	二〇.三	二〇.〇

山道の各地冬季中水蒸氣の多量なる春來温度の變化劇烈なる此の如し、
 其の百花の一時に競發する固より然り。

東海道の水
 氣(初夏)

(三) 東海道の水蒸氣(初夏)

東京城中の春光將さに盡く恰も印度洋上の季候風は是時より北進し來
 日本には水蒸氣の多量なる事

り其の感化として眼前の風物は正に是れ

淺茅原頭雨濛濛。班女廟前草接空。杜宇聲々啼不歇。鏡池一面落花風。

龜田 鵬齋

日本をして米産國たらしめたる所因

日本植物の蒼翠秀潤なる所因

の如きあり既にして藤花燕子花了る乃ち去りて東海道に上らんか六郷鶴見河畔沖積的平地十里季候風北進の感化は愈顯著に梅雨冥々河水平常より嵩まること數尺分流して諸溝渠に入り其聲湯々新秧勃然鮮綠滿目蓋し日本をして米産國たらしめたるもの全然季候風の感化梅雨及び温度の高昇に因る漸く大磯に到る高麗山途に當る喬木暢茂蒼翠秀潤滴れんとす想ふ大磯の地海岸を距る三五町にして山脈逶迤す萬頃の太平洋面より發上する水蒸氣は東南風と共に此の山脈に撞擊し山脈以南一帶の處に英々浮動す高麗山は之れに潤澤せらるゝが上に古來高麗神社の靈場として樹木の伐採を禁ず其の喬木の暢茂して蒼翠秀潤滴れんとするもの故なしとせず蓋し日本植物の蒼翠秀潤なるは實に水蒸氣多量の感化に因る加ふるに神社佛閣の樹木は古來伐採を禁止せるを以て

山林保護法の實際上の履行

柑

柑の日本に繁生する所因
石材に蘘苔蘘葛の蔓生する所因

函根山の草樹葱葱たる所因

茶の日本の主産物となりし所因

愈益暢茂し自から山林保護法を實際に履行し來る神社佛閣の樹木伐採禁止の效能は冥々なるが如きも實は甚だ顯著國府津に到る驛背なる丘陵の南面到る處柑を植う花正に亂發半丘皆な雪蓋し柑は素と熱帶的植物而かも能く此間に繁生し此處より南方一帶伊豆半島紀南半島齊しく其の名産を以て鳴るは實に水蒸氣の多量なりと温暖海流黒潮の近岸を流駛するとの二感化に因る沿道の石材大概は安山岩凝灰岩を用ふ所謂相模石「伊豆石」此岩亞細亞大陸に多く見ず是れ素と多孔なるもの乃ち水蒸氣の潤澤に因り蘘苔之れを蒸し蘘葛之れを纏ひ千歳の下古城斷崖の間將軍の碑を讀むに當り土花寸寸人をして懐古の情に禁へざらしむ小田原を去り函根に入る地質頓に激變沖積層及び第三世紀層玆に盡きて新火山岩のみ累積す草樹鬱葱亦た是れ水蒸氣の多量なりと露散せる新火山岩の殊に肥沃なるを以ての故山嶺を下らんか駿河の平野忽ち展開し早く看る幾群の村娘は歌を和して新茶を採ることを茶も素と熱帶的植物而かも其の日本の最主物と化成せるは氣候の比較的溫暖

日本には水蒸氣の多量なる事

富士山

晨夕富士山嶺と
白雲の上に仰望
する所因
畫師の大悟すべ
き所
富士、大井、天龍
階江の夏間流水
の淡々なる所因

日本には水蒸氣の多量なる事
なると地味之れが發育に順適するに因ると雖も亦た水蒸氣多量の感
化最も與る所富士山一萬二千餘尺此間に聳立す東海より東南風の吹き
拂へる水蒸氣は寒冽なる山嶺の空氣と撞撃し宛として白綿を曳くに似
而して晨夕空氣の運動靜穩となるや此の綿に似たる白雲は漸く下降し
て山腹以下に繚繞するを看る其の

心わての雲間はなをもふもとにて

大管中養父

かもはぬ空にはるまふしのね

の如く晨夕、行客の富士山嶺を白雲の上に仰望するは此故若し夫れ日光
之れを射らんか濃紅淡紫千變萬幻是れ畫師の最も大悟すべき所富士大
井天龍の諸江を渡る諸江齊しく源を日本中央の大山系に發す大山系固
と高崇故に所在の空氣は寒冽にして蒸發力は爲めに遲緩に加ふるに冬
間堆積せる氷雪は夏季に到り漸次に融消するを以て源水甚だ多量是れ
富士大井天龍諸江の激烈なるにも關せず夏に入りて能く流水の淡々た
る所因次で遠江、參河、尾張、伊勢、近江の諸州を過ぐ沿道の濤聲遠州洋の機

水蒸氣多量の感
化に因り音響と
殊に分明に聞く

山陰道、北
陸道の水蒸
氣

聲參河水綿を織る、鶉聲尾張熱田神社の漁歌の聲伊勢海の、兒童讀書の
聲近江村邑の、皆な水蒸氣多量の感化に因り聞き得たり殊に其の音響の
分明なるを行々竟に舊都に入る。

(四) 山陰道、北陸道の水蒸氣(夏)

山陰北陸の各地冬季中、亞細亞大陸よりの西北風は日本海を經海の水蒸
氣を拉して吹き到り、日本中央の大山系に撞撃し、此所に凝結するを以て、
水蒸氣多量に、氷雪四境に充塞す、而かも夏季は之れと全然相異り、太平洋
岸東海道等は印度洋上なる季候風に感化せられ爲めに濕潤多雨となる
も、日本海岸山陰道北陸道等は、此の感化を享くること些少に、山陰道の初
夏早く既に

郭公こえ晴れくしいつも山出雲山

寛之

の象あり、愈々夏に入りて晴雨計の昇降益々些少に、空氣乾燥にして天候
齊整、日本海は波穩かにして鏡面の如く、唯だ朝暮陸風海風の規律正しく
交るく、吹き來りて雪の如き蕎麥の花を搖曳するのみ、然れども冬間に

日本には水蒸氣の多量なる事

三十一

大山、白山の雪、
神通川の水量と
澁々たるしめた
る源、劍嶽、刮
山、立山、後立
山、赤鬼ヶ嶽、鉦
ヶ嶽の峯頂の雪、
針木嶽の雪
田は皆な冬間亞
細亞大陸より吹
き來りたる西南
風の日本海を越
過せし間に拉し
來りたる水蒸氣
の變形なり

日本には水蒸氣の多量なる事
於ける水蒸氣多量の現象は隆夏に到るも歴々とし、大山、伯耆富士峯頂の
谿間時に或は殘雪を看人をして轉た

伯耆富士松江の夏に蓋すなり松江

三千 風

の感あらしむ、漸く北陸道に入る、金澤の市上、南に白山の雪色を望み街頭
兒童の笹が枝に雪を包みて、白山の雪々々々々々を喚ぶを聞く、聲々清涼滴
れんとす、苟んぞ知らん、此の松江の夏に蓋するの冷氣、笹が枝内、一掬の雪、
正に亞細亞大陸より西北風の冬間、拉し來りたる水蒸氣の變形なること、
を越中に入り、神通川を渡る、水量澁々、鱒魚潑刺、是れ南方、連嶽の峯頂より
解け去りたる雪水に因る、亦た亞細亞大陸よりの西北風の拉し來りたる
水蒸氣の變形、神通河畔、劍嶽、刮山、後立山、立山、赤鬼ヶ嶽、鉦ヶ嶽、山の名稱
既に圓椎形の兀立するを示す、自から火山的の者を仰ぎ望まんか、稜々た
る峯頂、齊しく白雪を冠ひるを看る、眞に是れ

たち山にふりねける雪をどこ夏に

池 主

みれ共あかすかむからならし

針木嶽山道の雪

玉山壁立、撫青空、鐵鎖援、雪摩月宮、晚嚼會、仙壇畔、雪朝吟、飛下北溪風、
立山 龜田 鵬齋

針木嶽頂の壯觀

針木嶽の山道登ること五千三百尺、海拔、隆夏實に雪を踏む、登ること更に
二千四百尺、嶺頂に達し、脚を雪上に停めて、南望せんか、八ヶ嶽、駒ヶ嶽、信濃
の間、恰も富士の芙蓉八朶を認む、是れ富士を望見する極北の處、眞個に一
幅の油畫、畫師の品題に入る、至妙の處、蓋し日本中央の大山系や、冬間、水蒸
氣の多量に因り、冰雪滿積、而して隆夏、其の一たび融解せしもの、今少しく
寒冷なる温度に遭遇せば、更に凍冰して、所謂氷田を化成せしや、必然、唯だ
温度の少しく高きが爲めに、竟に此に到らず、日本に氷田を看るべからざ
るは、太遺憾然れども、既に榕樹、椰樹を見て、亦た氷田を看んとす、是れ貪慾
腰くを知らざるもの、既に隆夏、針木嶽上、二里四方の雪田を看、又た嶺の谿
間、小部分に氷河を看る、亦た以て氷田の看を倣して可
之れを要するに

わら世話し花見る中へ越の雪

不 筈

日本には水蒸氣の多量なる事

三十三

日本海岸に於ける夏季の來狀

紀南半島、

四國の南

半、九州の

水蒸氣(秋)

紀南半島の秋

紀南半島に柑の

繁生する所因

四國南半の秋

四國南半の天候
植物

日本には水蒸氣の多量なる事

の句日本海岸に於ける夏季の來狀の全、班を蔽ふ、十七字、正に百卷の地文學萬千の氣象的材料に優る。

(五) 紀南半島、四國の南半、九州の水蒸氣(秋)

あき風の骨見付けたる鳴門哉

百

和

と秋風早く鳴門海に吹き到るや、紀南の大半島は忽ちにして黄金世界と化成し、玉柑累累蓋し太平洋より吹き到る水蒸氣の熊野三山一帯に撞撃して凝結し、南方一面を雲包霧裏すると、温暖海流(黒潮)の近洋に流駛する、地形南方に斗出して氣候の特に温暖なると、此の三の者實に沖の暗いのに白帆が見ゆるアレハ、紀の國密柑船何等の詩趣何等の活畫圖、神韻千古の句あらしむる所因。

四國の南半、土佐全國阿波の一部も亦た太平洋より吹き到る水蒸氣の四國中央の山系に撞撃して凝結することなれば、北半(阿波の大半、讃岐伊豫)と全然氣象を相異にし、天候多雨、熱帶植物能く暢茂し、一般植物も亦た鬱葱す、若し夫れ秋風一陣九十九里灣に入るや、假令秋山は春山に似ず一般

四國南半は日本國中にて最も水蒸氣多量之處、魚梁瀬山脈の雲土佐國中の瀧渠運河の水量は多々なり、四萬十川の水量

九州の秋

に明淨拭ふが如く、秋江は水涸れ沙長きものなるも、而かも四國の南半は日本國中にて最も水蒸氣多量之處、其の現象は、如として一景一境に代表せられ、阿土二國の境界なる魚梁瀬山脈は、白雲縹緲として、背腹を捲き、夫の一代の英物たる野中兼山が心血を澆ぎて、鑿通せし各處の溝渠、運河は、水量殊に多々に、紙經節煙草を搭載せる小艇、絶えず上下相來往し、四萬十川(一名渡川)は、注々として湖水の如く幅或は二十町深サ時に十尋中に、白渚青嶼ありて、煙霧杳溟岸を隔つるの人家、隱見出沒の間に在り、想ふ、四國の南半、盆大の處に、此の湖様の大江ある實に、所在水蒸氣の多量に源因し、所謂四萬十條の溪、水造大にもせよ、合流するを以てなり、秋既に四國に來る九州、豈に動かざらんや、一朝

彦の嶽や色なき風もけさの秋彦山に到り、嶽下の耶馬溪(原名山谷)は

三千

風

肌入た羅漢もありて、けさの秋耶馬溪羅漢寺

涼

袋

となり、涼氣既に紫海に横はりて、

日本には水蒸氣の多量なる事

三十五

日本には水蒸氣の多量なる事

三十六

西肥城郭古諸侯滿目人煙接地浮紫海潮聲高永夜天山雪色入深秋白沙
沙衰帥行臨野落日涼風獨倚樓十歲龍鍾書劍客追懷往事不勝愁佐賀

古賀 穀 堂

水蒸氣多量の感
化は九州の山野
に徹洞す
九州の秋の盛觀

日本の秋色は北
亞米利加の秋色
に優る

の候に入るや水蒸氣多量の感化は山野に徹洞し雨餘霜後銀杏挿天知故
國なる阿虎の故城下熊本城銀杏城に公孫樹黃金に似て筑前筑後の江堤
に楡紅錦を曝らし楡は九州の秋を代表す日向の連山に柯樹黃ばみて薩
摩の火山岩上に柿マユミ色を染む栗ドウダンナラ櫻桃野葡萄南燭樹山
毛樺漆樹地錦亦た齊しく葉を染め來り柑類亦た累々黄色類黄色紅色紫
色白銀色は濃淡深淺樟棕櫚竹の鮮綠色と其間に錯雜し更に一層々の彩
色を添ふ海外の人談會々秋間彩色の多種多様な事に及ぶや輒ち北亞
米利加の森林を説く而かも一たび日本の秋色を看るや忽ちにして憮然
自失獨逸の山林にも穀斗科の植物秋に入りて大に色を變ず然れども其
の種類極めて些少穀斗科植物の多種にして秋間其色の多様なは遙かに
日本に下れりと宛然一千四百餘の彩色を所有して宇内第一と誇揚せ

る獨逸の一染工場主をして二千の彩色を所有せる日本京都の川島氏に
會せしむと一般既にして

やつしろや蜜柑の秋も今三日八代

支

考

となり秋や漸く九州を拂ひ去る。

(六) 北海道の水蒸氣(冬)

西北風亞細亞大陸より日本海を經海の水蒸氣を拉して吹き來り北海道
中央の大山系に撞撃するや忽ち凝結して雪意漸く動き九月下旬凍雨霏
々木葉方々に飛びて林梢蕭疎石狩嶽上早く白霜を被ふるを看る十月中
旬札幌市西の手稻山上雪既に下り十二月下旬以降玉屑漸瀝悉く石狩の
平野を蔽ふ蓋し淡墨色の同雲空に連り冬間天色模糊忽ちにして雪を下
すものは西北風の日本海上なる水蒸氣を拉し到りたるが爲めのみ雪既
に石狩の平野に下る機車三々五々陸續來往す是れ奇觀而かも奇觀中の
最奇觀は實に原人時代の山林中に雪の滿積せる所是れなり想ひ起す混
茫一白榆樹々枝玉を懸け其間蝦夷松棋楠の聳立して皎光翠色相點綴す

日本には水蒸氣の多量なる事

三十七

北海道の水
蒸氣(冬)

北海道の雪景

北海道雪景の奇
觀

北海道東海岸の
冬
海上の冰封

コマイ魚釣り

山陽道、四
國の北半

る處兩群の鴻雁同雲を度りて、一暮の天風時に氷海を剪りて來る、北方豪健の象歴々眼に在り、眞個に文人畫師の氣局を恢弘するに足る所、東海岸に到りては寒冷海流北極圏より來り、三冬の間、海上一面に冰封し去る、蓋し氷は凍氷の際容量の百分の七増殖するを以て、氷の益、張り詰むるや遂に龜裂を生ず、信州諏訪湖の冰封する間、諏訪明神の狐の神渡りとして氷面に一條の大割線を生ずるや、爾後人馬の安慮して氷上を渡過するも此理と一、氷厚サ四寸能く騎兵隊を渡らしめ得、是に於てか人馬其上を渡り、且つコマイ魚釣り、コマイ魚は冬間根室灣中に群游す、氷に小穴を穿ちて海水まで貫き、釣を此中より垂るれば、輒ち餌に懸りて多く獲、冬間諏訪湖の氷上、氷引きとして漁人の鯉、鯽、鱈、魚、アカツチを釣るも之れと同一趣向の小屋氷上到的處に點散す、是れ南方人士の看る能はざる所、亦た一奇觀、

(七) 山陽道、四國の北半

山陽道、四國の
北半は日本國中
の最も乾燥せる
部分なり

山陽道四國の北半は北は中國の中央を横絶せる山系に依り、亞細亞大陸より日本海を經、吹到せる水蒸氣を遮斷し、南は四國の中央を横絶せる山系に賴り、太平洋より吹到せる水蒸氣を障屏す、是を以て空氣特に乾燥、天海光朗かに、

うみすとし百八灯の星のかけぬき

不

言

山陽道、四國の
北半に製鹽業の
盛んなる所因

の象あり、潮水も亦た空氣の乾燥なるが爲め蒸發劇甚、鹽分を含有すること多量、是れ山陽道四國の北半に製鹽業の盛んなる所因、其の鹽燒く小屋より煙の高く颯りて一層の詩趣を添ふ所、亦た空氣の乾燥なるに因る、之れを要するに水蒸氣多量なるの間、此の一部分の乾燥なる個處を遺す、乾燥相待ちて日本國の景象却て大觀を加ふ、天の日本を惠する大、水蒸氣多量の現象、其の痛奇なるものは、

迷景

(八) 迷景

にして所謂、氣樓なるものは、是れ古來之れを記する者、其間妄誕の理窟を存するも、現象の實際を言ふ所に到りては取るべきもの多し、曰く、

日本には水蒸氣の多量なる事

日本には水蒸氣の多量なる事

初は幕を引くがごとくなりしがしばらく見る間に城廓のごとく矢倉高塀やうのものも見に矢間などのごときものも見にしか又暫する間に松原の如く繪に書る天の橋立などのやうに見に夕暮に及び風少し出たれば漸々に消失して跡かたもなくなりしなり富山よりは纔に六里を隔てたる所なれば城下の人々皆見物したく思へども何時に結ぶもしがたく又むすひたる時急に人して告しらすにも其間には消失して見るべからず此ゆゑに魚津近所の海邊の人は例年見る事なれど二三里を隔てたる地方の人は一生涯つひに見ざる人多し余か越中にありし時も三四月の間を魚津に逗留して屋樓を見るべしと人々にすゝめられ余も亦年頃の望なりしかど富山にありし比は正月二月なればそれより三四月まで越中に逗留せん事あり永々しければ残念なりしかども見ずして越後にこゝたり越後の糸魚川にて松山茂叔に此事を語りしに此人も糸魚川の海中遙に山の出来たるを見たり漁人のいひしはこれは鹽山といふものにて折

魚津の所在たる
富山灣は、山岳
を以て圍繞し、
特に東南には氷
雪と堆積せる立
山の連山あり、
其の峰頂より吹
下せる風は、海
の水面と吹き廻
り、水面上の空
氣と上層よりも
數等寒冷ならし
め、空氣の密薄
を下層と上層と
殊に差違せし
む。是時に當り
太陽の光線の魚
津より映するも
のは、之れと直
ちに對岸せる能
登半島の連山の

と見ることなりといひしと語られき余初め唐人の作れる詩杯を見て思ひしは屋樓は大洋にある事にて陸地近き入り海にはなきこと
のやうに心得しが魚津の地理を見るに左にはあらず魚津は北海に
臨める地なるに向ふの方七八里と思ふ程に能登國の山を屏風ので
とくに見る魚津の海は東よりの入海なり海中より蒸登る陽氣向ふ
の山に映じて色々の形を見る之向ふに當なく數百千里見はらした
る大海にては陽氣のぼるといへども向ふの當無れば映することな
くして人の目に見にかたしと覺ゆ伊勢の桑名の海にも三十年五
十年の内にはたま／＼屋樓を結ぶ事ありといふ是も向ふに尾張三
河の山を受てあるゆゑなるべし又安藝國にてたま／＼は有りど
云是も向ふに山あり(東遊記)

伊勢國四日市の海面を那古浦といふ(中略)此浦より春夏のあいだ屋
樓海上にたつ諺に云伊勢大神宮尾の熱田宮へ神幸あるといふ其形
鳳輿行幸旌蓋前後にあり又は諸侯行列の休又は樓臺宮殿の相鮮か

日本には水蒸氣の多量なる事

東側南側に反射し、合、空気の密薄劇なるに逢遇して風拆し、竟に迷霧を生ずるものとす、南溪(東遊記)の著者(紀する所信然々々

日本には水蒸氣の多量なる事

に見へて漁人時々見る事あり忽須臾のあいだに消くとなる又尾州鳴海の浦などにも春の頃見ゆると又西國北國などにもあり按るに潮水の氣陽精に乗じて立昇るなり陽炎の類にやあらん東海道名所圖會

那古浦屋樓記

靜者天地之質也、動者天地之氣也、質者始不諭焉、夫一氣之運動轉旋也、含氣者皆與焉、神仙人靈禽獸鱗蟲、有逍遙者、有苦勞者、有顯見者、有隱匿者、彼此萬態、皆一氣哉、吾鄉四日市驛之爲地也、在勢灣北畔、而遠望東南、數十里、而于大洋海門矣、是海門也、南界勢之熊岳、北則尾州海嶮也、其間亦數十里、有龜洲及小洲、數處、點々如盆地、設石然、吾鄉所望不能挹取、其微而已、春夏之交、數月中一日、晴霽和氣、雲靜風收、將雨之前、自熊岳至尾之嶮、忽爾烟靄飄飄、失海門所在、而地如連接、霧上有物、如雲烟、變態或臺閣、或門闕、前有干旄、後有犛路、行伍排列、森森子子、奇觀不可說也、須臾隱滅、而山海景象復平常矣、其顯見也、發南、而移轉、而失北、古今不違、歲率五

七回、若二三回、或不見焉、不過吾鄉畔數千步、蓋所以爲吾鄉名勝也、土人傳道、二所皇太神廟遊幸千尾之熱田神廟也、博物者云、勢灣之北畔、產屋也、尙矣、蓋以爲其所吐也、嗚呼、神靈之遊幸也、屋之吐氣也、天理不可窮、神慮不可測、若夫天地間之一氣、運動轉旋、爲奇觀、爲名勝、者非邪、(下略)

寛政七年乙卯夏五月

勢州四日市驛馬曹 西村貞節甫

の如き是れなり、是れ神靈之遊幸にわらず、屋之吐氣にわらず、水蒸氣と大陽の光線とに交渉せる一現象のみ、日本人幸に水蒸氣の多量、岬灣の出入多々、高山の海岸を圍繞せる國土に在るを以て多く之れに逢遇す、以上水蒸氣多量の感化する所佳なるもの、奇なるものに止まる、然れども其の日本國の現象に感化する、豈に單に佳なるもの、奇なるものに止まらんや、豪放の特に豪放、跌宕の最も跌宕なるものに到りては、實に

(九) 颯 颯

是れなりとす、是れ秋間九十月、印度洋上季候風の南退するに當り、氣象頓

日本には水蒸氣の多量なる事

颯 颯

に激變爲めに太平洋上特に薩南群島沖繩群島の間に起るもの、曲亭馬琴は近代の俊髦其の著はせる小説些事と雖も苟くもせず、資る所の材料悉く據る所あり、皆る知者に斟して而して後執筆す、全椿説弓張月中掲ぐる所の沖繩海上颶風の紀事を閱了するに、荒天の前に於ける快晴水蒸氣の糢糊荒天の豫兆として文鰐魚の飛揚海蛇の浮出皆な實境に遭遇せし者に據るに、あらずんば知るべからざる所、其間荒唐の言辭も亦た在りと雖も、叙事至緻至密實境如取るべきもの甚だ多し、加ふるに文字踴躍跌宕、乃ち拔萃して鄙筆に代へんか。

この日天よく晴て一點の雲なく渺々たる洋中波靜にして順風に眞帆揚たるに日ははや入はて、月は海よりさし昇り頃しも秋の最中なれば金波管を漏り玉兔浪を走り汐風いと冷やかなりかくて曉方ちかくなるまゝに霧いとふかくたちこめて咫尺の間も見わさがたく船は潮に引れけん午の比及に霧は舞たれど何處の澳とも思ひわかず時に魚ありその状鯉の如くにして島の翼あり蒼文白首鬚赤

く其音鶯雛に似て波の上に群り飛ぶこといづくといふをしらず且して水面穢れ泡だちて米槽を散せるごとく夥の海蛇浮出て船の左右に充満たりこれだゞ事にあらずとて衆皆面をわはしつゝ思ひ感さるものなし當下爲朝は水と天との景迹に目をつけて大に驚き白縫姫に宣ふやうわれ西國に成長り又伊豆の島々に十年の春秋をかくりしかば渡海の風信自然にくはし大約南海は三月清明のち地氣南より北にゆくことをもて南風を常とす又九月霜降の後地氣北より南にゆくことをもて北風を常とすもしその例に反ときは風の怒らざるとなしそれ大風烈しきを颶といふ又甚しきを颶と稱ふ颶は常に驟に起り颶は漸ありて來たる颶は瞬のうちに發りて倏に止み颶は一晝夜或は數日にしてなほ止まず正二三四月は颶おほし五六七八月は颶おほし渡海の船颶に遇ときはなほ脱るゝことありもし颶に遇ときは當がたし十月以後は北風常に作るしかれども颶に定期なし五六七八月は南風に颶ありその風發らんとするとき

日本には水蒸氣の多量なる事

四十五

に北風まづ至り轉じて東南となり又轉じて南となり亦轉じて西南
となる颯颯のはじめて發らんとするときにまづかならず雨降るそ
のとき半天に一朶の雲出づまた斷虹のときもものありこれその應
なり又颯の起るときに帆のときも雲出づ又半天に及て稍霧の尾に
似たる雲となるはそも前象なり鯨は蟹に似て南海に生じ十二の足
腹の兩旁より出眼は背の上にありてその口は腹の下にありこのも
の海を過る毎に相負て背を示し風に乗じて遊行す海人これを鯨帆
と呼ぶ其皮殼甚堅し異國の人これを冠にすといへりわれ見たまへ
今も又鯨に似たる雲半天にあり嘗聞颯發らんとすれば海水穢れ泡
たちて海蛇夥水上に浮み文鰐魚群り飛ぶ舵工これを見るときはふ
かく怕れ遠く慮りて帆を收め嚴重にしてこれを避らし準備速なら
ざれば船忽地に傾覆ざることなし今三ツの不祥悉く備るものども
なぞて帆をふるさるといさまさ給へは白縫姫はさらなり衆皆舌
を振て驚き喉つゝ帆を引ふるしさて礎をふるさんとするに底ふか

くしてその網とくべうもあらざればこはいかにせんとていよ
周章す浩處に遙に後れたりける舜天丸の船やうやくに乗若て間ち
かく糟ならべ八町礫紀平治高間太郎等舳先に躊躇し主の船に對て
まうすやう今曉より挾霧ふかくたちこめて船のゆく所をしらず東
へ赴くべき船の南へ流されたるかとおぼし加旃何となく海の氣色
の怪しく見る候を君にはいかにおぼしめすやらんと問を爲朝見か
へりて汝達がいふごとくわが船南へ漂流せしに疑ひなし故いかに
となれば文鰐魚の群がり飛ぶをもて是をしれり彼魚は南海に多し
おもふに薩摩瀛を去ること數十里なるべし見よ半天に怪しき雲あ
り且水の上に海蛇夥しく出たるが即惡風起らんとするの前象なる
今これを避んとするに船を入るべき湊口なし只手を空して死を俟
のみ薄命の係るところわれに於てせんすべをしらず今さら驚く事
かはと回答給ふに件の兩人肩を繋めしかりと雖ども知つゝこれを
防ざるは智の足らざるに似たり船大さやかなれば風波も輒く傾覆

すに至らず稚君の御船と殿の御船を繋ぎて連環し衆人力を戮して船ならばいかでか必死を脱れ給はざらんと信だちて既に纜を投かけんとするを爲朝急に押しとめ汝達の言差へり親子ひとつ船にありてその厄難を等しく冥んこと究めて宜からずわが主従三十餘人命凶なるものみにはあらじかの網に入る魚も十に二三は脱るゝものを抑爲朝伊豆の大島にありしときはつちやう以下の七島に往來し早潮黒潮の難をすら屑とせず千里の波濤を家として一たびも大風に吹流されたる事なかりき皆是神佛の擁護あるに似たりしかるに今華洛に推渡て君父の仇たる清盛を狙撃んとするに挾霧に舵をとり悞て刺風濤の難に親子主従悉く大魚の腹に葬れなば天なり命なりすべて一年十二月悪風の發る日あり八月十五日を魁星隨と稱す箕壁翼軫の四宿はみな風を起す事を主るとぞ我これをしらざるにあらずきのふ魁星隨の日期に船出して事なく今日に至て隨にあはれども脱がたき主従が命ならずやといらへ給ふ其言いまだ訖

らず船の前後に籠められて水の沸たつ事二三丈瞬間に風颯と吹來る程こそあれ天驟に結陰大雨盆を覆すがごとく降とゞき四方野子玉の烏夜となりて面をおはするも送にその人を見ず只聲をしるべとしてかのく罵り罵し力を戮して船を操り命かぎり働けども風雨ますます烈くて船は只管に跳り繞り浪を打入るゝことしばしばなれば水を浸乾すに遠なく衆皆瞑眩て撲地と仆れ舜天丸の乗給へる船もいづちゆきけんおぼつかなきにありとも見へずは木々は其處かごとかと呼び給へど絶て答るものもなく吐嗟船は目今傾覆べう見たりける當下白纜は潮垂るゝ兩の袖を絞あげよるめく足を踏かためて聲をふりたて御曹司かくては萬死に一生を得がたし(中略)しかれども風雨はなほ止ずして海の鳴音凄じく船は輪を蹴るごとく高く揚りて半天に至り或は傾きおちいりて浪よりも低く沈みもやらず浮もやらず廿餘人の郎黨は白纜入水し給ふといへども終に應なきを視て今はかうと思ひたに舷に手をかけてやう日本には水蒸氣の多量なる事

日本には水蒸氣の多量なる事

五十

やくに身を起し吾儕木原山に参りつかへしより以來命は君にたてまつりぬ倚琴高が鯉に跨り烈子が風に御るにあらずは脱れ給ふべくはおぼはれず誘給へ死出の先登つかまつるべしといひも果すかの刀を引抜て或はさしちがへ或は腹かき切り絃より轉墮て名をだにしらぬ荒海の底の水層となりけり(下略)

岩石の霽敗

(十) 岩石の霽敗

を誘致し脆弱なる地皮の如き之れが爲めに洗ひ剝がる而して是れ此の最も多量なる日本に多しとす其の甚だ顯著なるは

此山のすがた世に類なき奇異のありさまなれば神靈ある事むべからざる名山にかならず靈あり故に祈ればしるしありとぞしられけ

秋里 籬島

てふ妙義山是れなり然れども焉んぞ知らん此の靈なるものは神にあらず鬼にあらず實に雨水氷雪が火山岩を浸蝕して表面の脆弱なる土壤を

妙義山

笠置山中の一搖石

洗ひ剝がしたるものならんとは又た夫の齋藤拙堂をして

有搖石者在大盤石上高及人頷可重數千鈞以手撼之則兀々動搖理之不可詰者也

と記せしめたる笠置山中の搖石の如き何ぞ理之不可詰者あらん蓋し此の大盤石は花崗石若くは片麻石搖石も亦た花崗石若くは片麻石其質極めて堅硬而して大盤石と搖石との間に在る脆弱なる土壤は雨水氷雪の爲めに洗ひ剝がれ堅硬なる花崗石のみ之れに拮抗して殘留し得搖石は上部大に下部漸く細く而かも重力の中心外に出でず大盤石上に屹立し

以手撼之則兀々動搖するのみ皆な是れ雨水氷雪の作用若し夫れ吾が日本にして水蒸氣の多量ならざらんか吾が天の文地の章焉んぞ此の洵美あらんや此の繡錦あらんや是れ大陸に棲息する者の多く享受する能はざる所造化の我が文人詞客畫師彫刻家風懷の高士に瀾するや多し

日本にして水蒸氣の多量ならざれば天文地章の洵美なし

日本には水蒸氣の多量なる事

五十一

日本の水蒸氣に関する畫題

是れ亦た歐米人の其國に在りて看る能はざる所を撰擇せざるべからず。

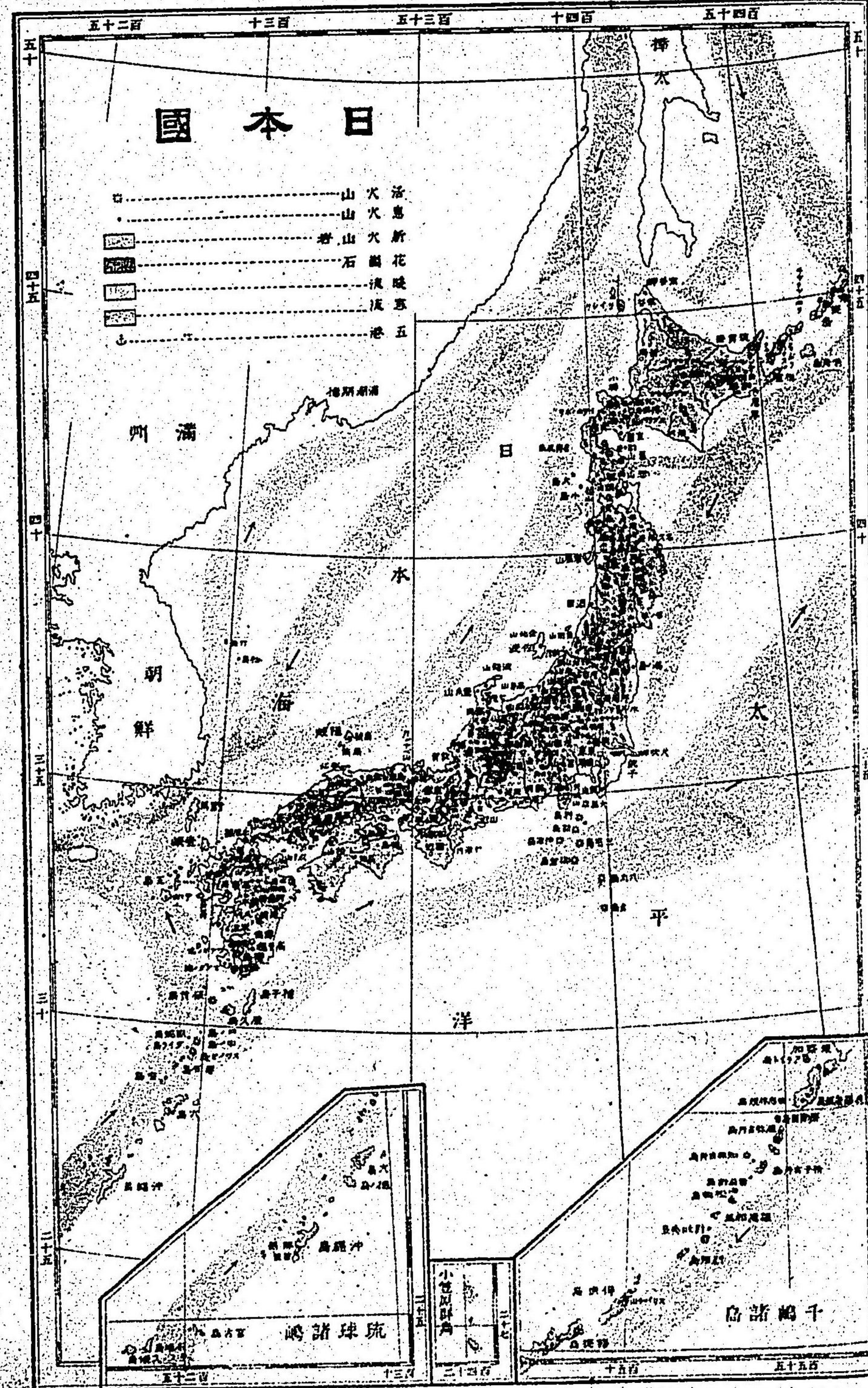
- (一) こそ吹きて曇りつる蝦夷の春の夜の月。
- (二) 富士の峯尖白雲の上に露はれ太平洋の地平線上旭日正に昇り此の白雲を下層より紅色紫色靛黄色黄色淡黄色と漸次に抹し來る。峯腰(富士)一片雲散作千山雨(泰山) 都竹外
- (三) 半空湧出兩浮圓更有伽藍俯九衢十二帝陵低不見黑白風雨滿南
- (四) 都竹外
- (五) みち汝よ鳥海山の八重かすみ兼五
- (六) 初虹や橋またひとつ雄鹿の島朝四
- (七) 朝はらけ宇治のかは霧たえくくに
あらはれ渡る瀬々のあしる水榭中納言定頼

- (八) 卯花雪の如く杜宇聲々梅雨霏々。
- (九) 長空一碧忽ちにして半天一點の黒雲を看る雲疾く馳せて地平線上に下降し靄霧冥合颯颯將さに來らんとして汀上の椰樹三五株頂上の葉早く翻りて幹と漸く直角をなす。
- (十) 籬落の秋聲夕陽反射霜後の柿實其葉と共に丹紅燃えんとす。
- (十一) 五月雨や或夜ひそかに松の月邊太
- (十二) 月の弓爰にひけどやいわし雲葉外



蘆荻花飛拂活汀。深秋時節恰聚輪。潑入勿說前朝事。落日寒煙盡水陵。

知川生



日本には火山岩の多々なる事

日本の火山脈

富士帯

火山岩の多在するは日本の景物をしむる主原因
日本の風景と朝鮮、支那の風景との比較

日本には火山岩の多々なる事

五十四

(三) 日本には火山岩の多々ある事

(一) 亞細大陸の火山脈カムサツ半島より千島列島に入り北海道に進出し、前みて奥羽に到り三派に別れて、中原に朝宗し来る。(二) 南洋の火山脈も亦たフィリピン群島より沖繩群島に到り薩南諸島を経て九州に入り、遂に三派に別れ、一派は肥前の温泉嶽を作り、一派は阿蘇山を成して東走し、直ちに四國紀伊に到り、参河に入り、一派は山陰道に入る。北來の火山脈、南來の火山脈と相衝突する所を富士山邊となす。而して兩々の火山脈相衝突するや、其の勢力は地皮の最も脆弱なる箇所を求めて馳走し去り、直ちに伊豆半島、豆南七島、小笠原群島、硫黄島を聳起す。これを要するに吾が日本や實に北來南來兩火山脈の衝突點に當り、火山の存在するもの無慮百七十個にして、全國表土の五分の一は火山岩に係る。是れ日本の景物をして洵美ならしめたる主原因。

(一) 日本の風景と朝鮮、支那の風景との比較

朝鮮の地質

支那北方の地質

支那の黄土

想ふ火山岩たる元と地皮の皺縮せる際熱氣を揮霍し餘怒激し爆然表土の上に噴き來り噴き來りたる溶石の外氣に觸れて收縮せしもの故に其状や槎牙重複裂くるが如く缺くるに似或は刻削せる壁の如く或は斧鑿せる柱に似謠奇變幻眞に具狀すべからず日本表土の五分の一實に此岩に係るとせば日本方物の翫拔秀俊なる固より知るべきのみ蓋し其の朝鮮の如き多くは原始期太古期の地質に係り火山岩たる少々支那の如き北方は一面第四世期地層に係り平々たる水成岩延縁すること無慮四萬二千方里日本全面積の一倍七強所謂黄土と稱し黄河の濁江汪々として其間に曲折し注ぎて黄海に入り滿畔皆な黄色克く一山一峯の此際に聳起する者なく其の風物の單一同様なる眞個に行客を倦殺せしむと況んや若し夫れ北風直ちに蒙古より到るや千里之れを遮斷するものなく所謂黄風北來雲氣惡季夢陽黄塵紛々戸障に入り木葉を蔽ひ田園に累り泉水亦た黄濁殺風景の極を盡くす是れ支那詩人の動もすれば黄塵萬丈の語をゐす所因敢て日本の如き火山岩國の淨山澄水の間に使用すべから

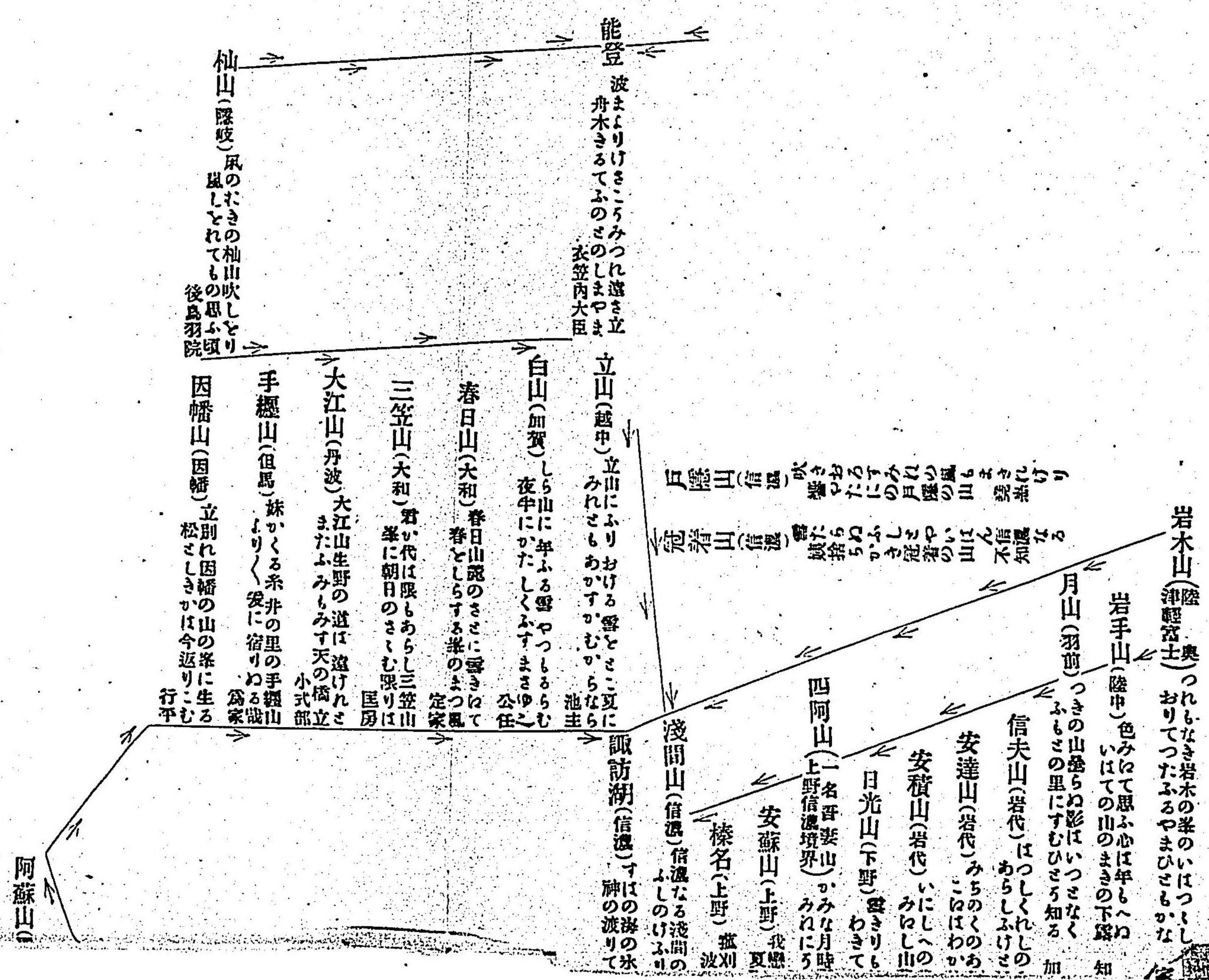
日本には火山岩の多々なる事

五十五

ざるの語蓋し野曠天低日欲西北風吹雪雁行低黃河古道行人少一片寒沙
沒馬蹄(屠隆)是れ實に支那北方の景象を描きて餘蘊なきもの其の南方
に到りては十中の七八は太古期中古期の岩石に係り是れ亦た平々凡々
而して森林は幾千年來濫伐し去りて巨木高樹の幽邃少く(四川省楊子江
の上流を除きては)僅かに蒼鬱(ツツミ)一様の畫を描きて假形的に山水を眼前に
現はし所謂臥遊して以て聊か自から慰むるに過ぎず素より火山岩國た
る日本の景象の到る處警拔秀俊なるに似ざるなり。
既に然り日本は火山岩國たり是を以て古來歌人の好みて吟咏する所大
概は火山岩ならざるはなし。

(別表參觀)

此の如し然れども日本の歌人は單に山として火山岩の山岳若くは活火
山を吟咏し若くは風懷を之れに寄托したるのみにして其の火山岩の瑰
偉變幻なる所活火山の雄絶壯絶にして天地間の大觀を極盡する所に到
りては未だ之を寫さざるなり詩客畫師彫刻家も亦た多く然り是れ千古



能登 波よりけさうみつれ遠き立
舟木きてふのさのしまやま
衣笠内大臣

仙山(隱岐) 風のたきの仙山吹しとり
嵐しとれてもの思ふ
後鳥羽院

立山(越中) 立山にふりおける雪とこ夏に
みれどもあつすむらなら
池主

白山(加賀) しら山に年ふる雪やつもらむ
夜中にたたくふすまらむ
公任

春日山(大和) 春日山麓のまに雪きて
春としらする峯のまつ風
定家

三笠山(大和) 君代は限もあらし三笠山
峯に朝日のまも限りは
国房

大江山(丹波) 大江山生野の道は遠けれ
またふみもみす天の橋立
小式部

手廻山(但馬) 練くくる糸井の里の手廻山
後宿りぬる
為家

因幡山(因幡) 立別れ因幡の山の峯に生る
松さしきやは今返りこむ
行平

戸隠山(信濃) 吹さおるすかたの戸隠の山
霧やたにの戸隠の山
藤原

砲臺山(信濃) 霧たらぬふしと霧の山
霧たらしき霧の山
信濃

岩木山(陸奥) つれなき岩木の峯のいはつし
津輕宮土 おりてつたふるやまひごもかな

岩手山(陸奥) 色みわたる思ふ心は年もへぬ
いはての山のまきの下露
知

月山(羽前) つきの山曇らぬ影はいつこなく
ふもとの里にすむひささる
加

信夫山(岩代) はつしつれし
あらしふけ
加

安達山(岩代) みちのくのあ
こはわ
加

安積山(岩代) いにしへの
みねし
加

日光山(下野) 雲きりも
わきて
加

四阿山(名寄) 名寄月時
みねに
加

安蘇山(上野) 我
波刈
加

浅間山(信濃) 信濃なる浅間の
ふしのけふ
加

諏訪湖(信濃) すはの海の水
神の波りて
加

阿蘇山

岩手山(陸中) 色みねて思ふ心は年もへぬ
いはての山のまきの下路 知来
月山(羽前) つきの山登らぬ影はいつこなく
ふもこの里にすむひささを知る 加賀

信夫山(岩代) はつしつれしものやまのしみち葉と
あらしふけさほちの山もいさるさもに 忠文男
安達山(岩代) ちのくのあらしの山もいさるさもに
こねはわがれのかなしからしと 忠文男

安積山(岩代) いにしへの城とほしらしあまの山 蓮生
日光山(下野) 雲きりてはて高き山のほに 道興
四阿山(上野信濃境界) かみな月時雨はるればあつまの 西行

安蘇山(上野) 我輩はあつ山もこの背懸 爲家
榛名(上野) 孤刈いほの沼のいか計り 順徳院
浅間山(信濃) 信濃なる浅間の山も燃ゆなれば 駿河

諏訪湖(信濃) すはの海の水の上の通ひ路は 顯仲
ける雪とこころ互に 池主
かすむむらなら 公任
ふる雪やつららむ 公任
しくふすまきゆ 公任
麗のまきに雪きけて 定家
しらす雪のまつ風 定家

は限もあらし笠笠山 朝日のさしむ限りは 匡房
牛野の道は遠けれと 小式部
かみしみす天の橋立 爲家
る糸井の里の手廻山 爲家
く安に宿りぬる哉 爲家
因幡の山の峯に生る 行平
しきさは今返りこむ 行平

阿蘇山(肥後) あつ山の中よりいつる白川の
いさつこらむむふかき心と 中務卿皇子
高千穂峯(日向) くしふるの山にかすめる春の雨
天つちらよりくたるさうみ 元長

箱根山(相模) 眺めやる箱根の山をたかたみに 俊頼
あくれは雪のふりたほらむ 俊頼

蘆湖(相模) 玉くしけはこれの山の分れ深く 慶融
みつうみらてすめる月かけ 慶融

足柄越(相模) ゆきさくるしみにしたく鶴の 西行
みちゆきにきあしからの道 西行

愛鷹山(駿河) 浮雲のあしたの山ははやけれと 道興
なつめる駒ちすむさしなき 道興

富士山 伊豆小山 千早振る伊豆の小山の玉櫛 鎌倉右大臣
早きは神のしるしなりけり 寶朝

湯走山 伊豆の國山の南にいつる湯の 寶朝
早きは神のしるしなりけり 寶朝

宇津の山道(駿河) 露しけき高のしけみと分越して 覺盛
岡部にかくるうつのやまみち 覺盛

日本の火山
「名山」の標準

の遺憾

(二) 日本の火山 「名山」の標準

春日酒庵京師の儒士日本近代に於ける陽明學の泰斗言あり山峙川流雲行雨施花之開葉之落鳥而飛魚而潛浩々大化不期而然者躍如心目不覺令人消化夙習夫豈獨黠化同志也我亦可以自點化焉と眞然眞然能く大極の妙を悟り胸中に造化を融會する者にあらざるよりは如何ぞ此言あらんや而して此間特に人性を點化し高邁にし神聖にするもの實に山岳に過ぐるなく山岳中特に名山に在りとす

「名山」の標準

所謂名山の標準如何曰く

一、山の全躰は美術的體式と幾何學的體式とを調合安排せるもの
二、然れども山中の境遇は變化多々にして且つ不規律なるもの
是れなりと信ず想ふ全躰の美術的體式と幾何學的體式とを調合安排すとは夫の美妙なる圓錐形を聳起せる火山正に是れにあらざるや而して火山中には槎牙拮据たる岩石あり石壁障立せる噴火口あり副噴火口あり洞

日本には火山岩の多々なる事

穴あり湖あり草樹の蒼翠秀潤せるあり境遇の變化多々にして且つ不規律なるもの實に是れに過ぐるなしとす。橋南溪名山論一篇を著して曰く、余幼より山水を好み他邦の人に逢へば必名山大川を問ふに皆各其國々の山川を自賛して天下第一といふ甚た信し難し既に天下をめぐりて公心を以て是を論するに中略山の姿峨々として峻岨畫のこどくなるは越中立山の劔峯に勝れるものなし立山は登る事十八里彼國の人は富士よりも高しと云然れども越中に入りて初て立山を望むに甚高きを覺えず數月見て漸々に高きを知る是は連峯參差たるゆゑ之最高く聳えたがいに相争ふ程ある峯五ッあり劔峯も其一之其外にも峯々甚多く連り波濤のごとく連り皆立山なり此ゆゑにたとへば都の北山を望むかごとし遠くより見るに何れを鞍馬山とも稱しかたさかごとし是をみても人多能なる者は反て其名を失ふを慎むへし白山は只一峯にて根張も大に殊に雪四時ありて白玉を削れるがごとく見るより目覺る心地す又山の姿のよきは鳥海

山月山岩城山岩鷲山彦山海門嶽なり皆甚富士に似て一峯秀出畫かけるかごとし又景色無双なるは薩摩の櫻島山之蒼海の真中に只一ッ離れて獨立し最峻峻なるに日光映すれば山の色紫に見へ絶頂より白雲を蒸かごとく煙り常に立登るたどへは青壘の上に香爐を置たるかごとし大抵海内の名山是等に留るへし其山内の奇絶は又別に書あり今此所には仰望む所を論するのみ

「名山」とは火山の別稱なり

と。南溪の所謂名山たる立山、白山、鳥海山、月山、岩城山、岩鷲山、彦山海門嶽、櫻島山は等しく是れ火山に係る、此等山岳の何にが故に「名山」なるやの理に到りては彼れ未だ深く推究せず、且つ其の悉く火山たるを悟了せざりしと雖も實際上目撃の結果、此等山岳を以て「名山」と判定し、而して今日其の悉く火山たるを知らば、眼識古今眞に期せずして相會したるもの要するに「名山」とは火山の別稱なり。

想ふ火山及び火山岩は天地間の大觀を極盡するものなり、人間に在りて自然の大活力を認識せんと欲せば、之れを看破するに過ぐるなしとす、請

日本には火山岩の多々なる事
ふ往きて火山に登臨せんか。

「名山中の最名山を」

富士山

富士山に對する
世界の嘆聲

(三) 富士山

どなす。豈に一辭だに自讃を要せんや。聽け此山に對する世界の嘆聲を。
「富士は蝦夷語火の女主より由來す、以て太古蝦夷人が此山を崇拜せ
且つ愛慕したるを知る。

日本國亦名倭國中略、東北千餘里、有山名富士、亦名蓬萊、其山峻、三面是
海、一朶上聳、頂有火煙、日中上有諸寶流下、夜即却上、常聞音樂下略。

(後周 義楚六帖)

芙蓉獨立臥清虛、始信大東天帝居、堪競俊才高復潔、氣調來迫奈君如、

朝鮮國文學 秋月

人とはゝいかゝかたらん言の葉も

琉球 讀谷山王子

ふよはぬ富士の雪のわけはの

“Mons excelsus et singularis.”

荷蘭 博士ケムン

“Not only do we find a vast number of native books describing this mountain,
but every book treating of Japan which has been published in foreign countries,
always finds occasion to mention the ‘peerless Fuji.’ In consequence of its
height, the symmetrical curvature of its slopes, and its solitary grandeur, Fuji
has become one of the most famous mountains of the world. Not only is this
mountain an object of admiration to the European, but it obtains an equal
if not greater share of admiration from the Japanese.” 英國 博士ミルン

富士山に對する世界の嘆聲此の如し、豈に一辭だに自讃を要せんや、然れ
ども理學上其の優絶なる所は、竟に説かざるべからず、蓋し理學上富士山
の優絶なる所は、其の麓底の平面より、峯頂に到るまで、同一距離の縦坐標
を以て山を幾個に横切し、一對の縦坐標の加を其差を以て除するに、常に
不變數の商を得宛として、對數曲線の定則を表はすに在り、此の規律の齊
整なるに加ふに、至妙なる美術的體式を以てす、宜へなり。

日本には火山岩の多々なる事

理學上富士山の
優絶なる所

鍾得秀靈氣築成東海灣。天工盡于此。不復出名山。石野雲嶺

の句や、眞に「天工盡于此」日本人の富士山を誇揚し、彫刻に、繪畫に、詩文に、俳諧に、之れを以て「名山」の宗と仰視するもの、偶爾にあらざ、富士實は全世界「名山」の標準。

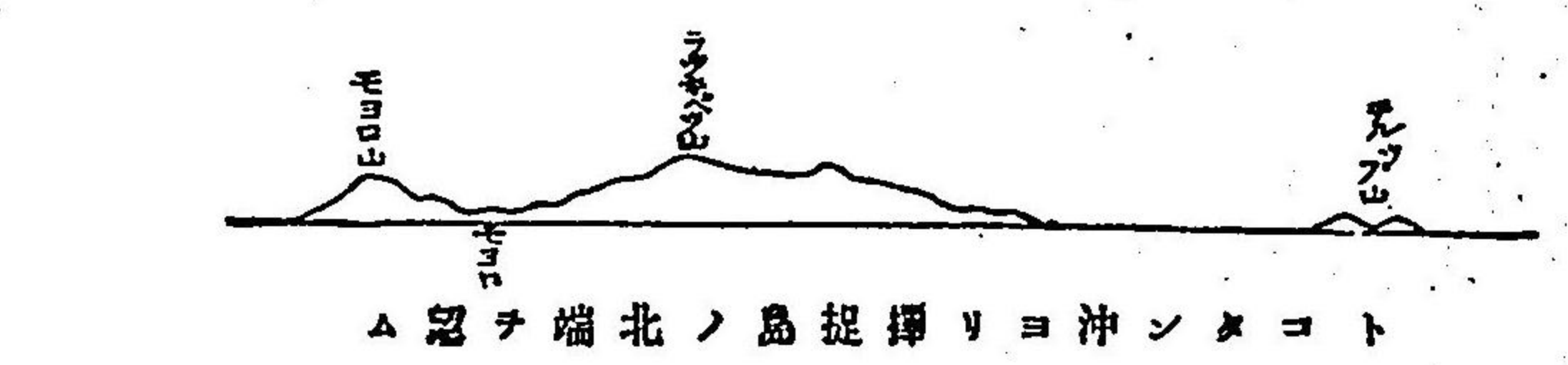
富士山は全世界「名山」の標準なり

風懐の高士彫刻家、畫師、詞客、文人にして、自然の大活力を認識し、卓落雄抜の心血を寄托せんと欲せば、主として火山若くは熄火山に登臨するに在り、乃ち全國の火山熄火山を一々縷述せんか。

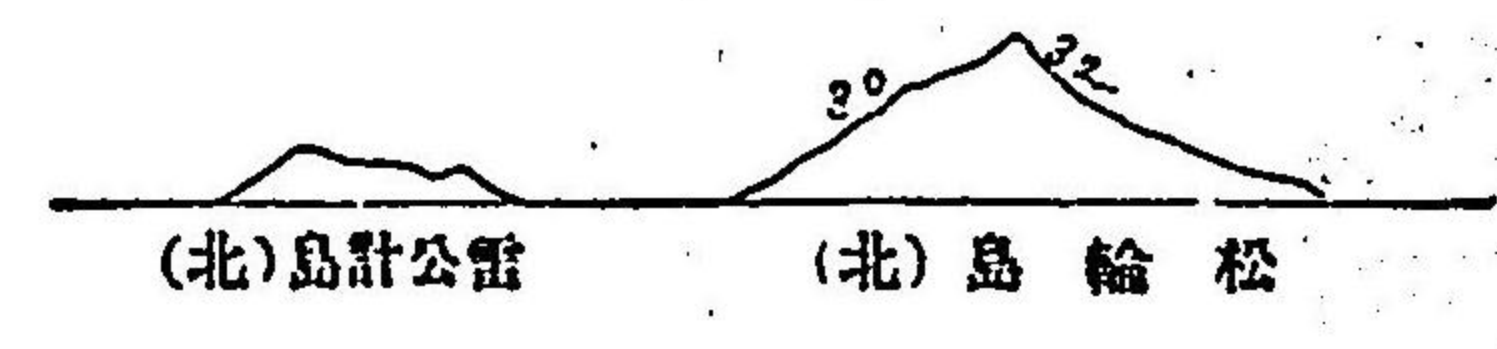
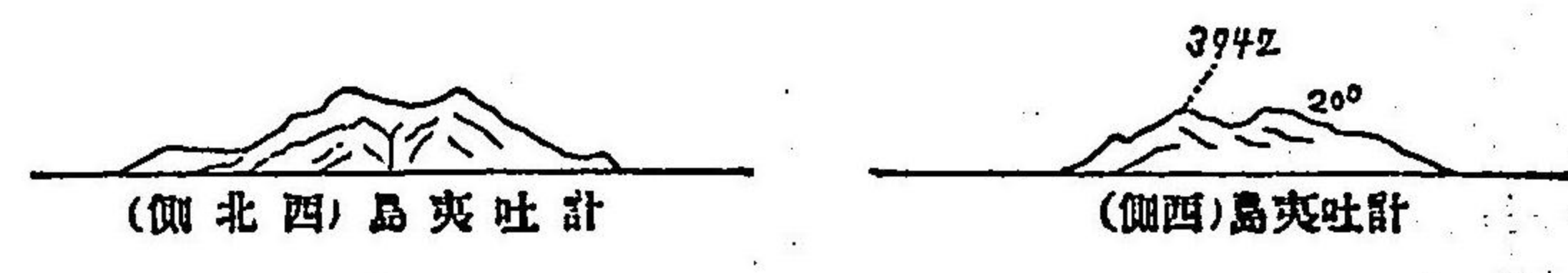
(四) 千島列島の火山

后土の大活力、其の胸腹より發し、爆然として、壁き起したるものを千島列島となす、宜べなり、其の景象の、到る處磊落豪健なることや、試みに舟を此間に行らんか、無數の小富士山は、我帆を逐ひ來り、近山は、剝るが如く、遠山は、筈の立つに似人をして、恍乎送迎に、追わらざらしむ、沿岸亦た火山岩の峭壁、百尺波浪疾く馳せ疾く擊ち、天雪は浪雪と相交り、眞に造化の偉觀を

千島列島の火山



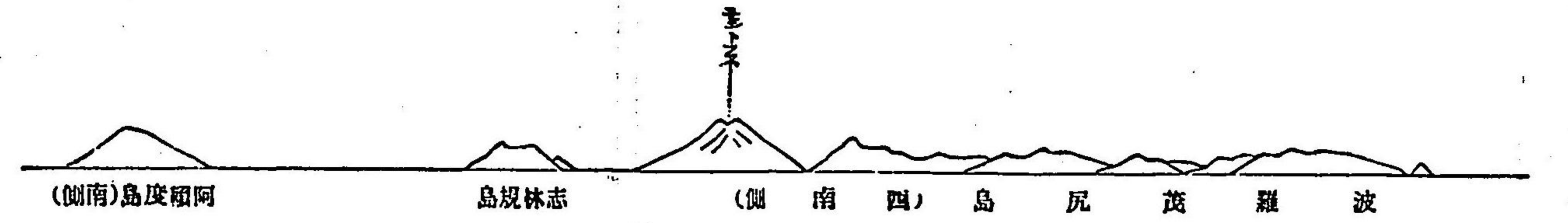
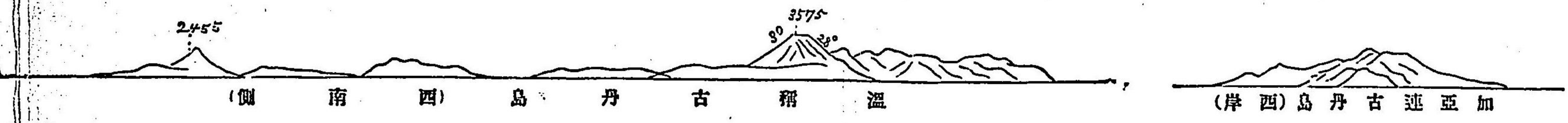
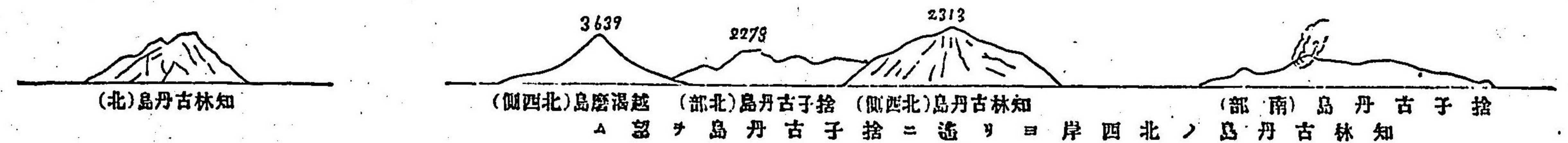
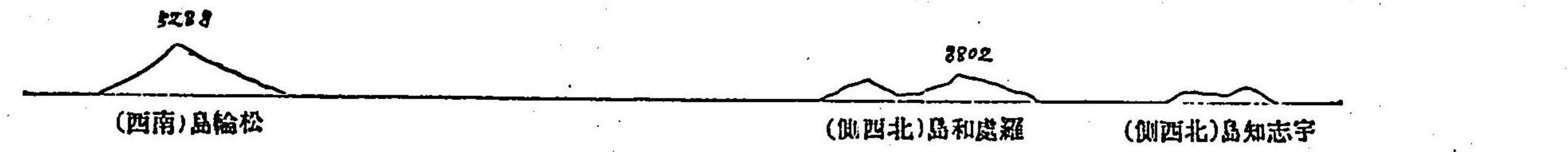
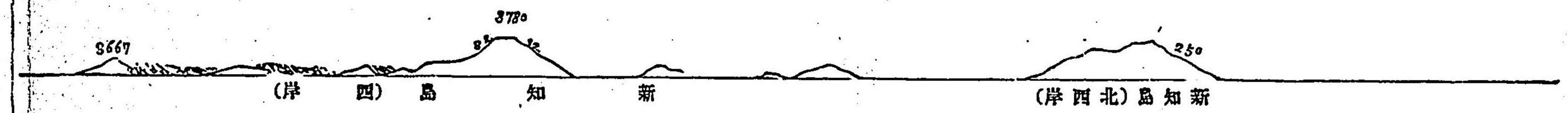
(側北)島頓魯武



(北東)島頓魯武

(岸北東東)島以保理知

(端北)島撫得



島列島千

(ル到ニ北東リヨ南西)

(シベス照參ト頁四十六第、頁三十六第)

(ル據ニ所ルヌ寫據地質ノ君耶次壯山横士學農)

極む蓋し日本風景の粹は火山及び火山岩に在り而して日本の火山及び火山岩の粹は千島列島に在り。

阿頼度島 千島列島の極北端 島は一圓錐の兀然海上より聳立するに似たり其形規矩甚だ齊整、海抜六、七二〇尺 其の秀絶なる千島列島に冠たり 我皇版圖の極北に富士山と代表す

波羅茂尻島 帝國の極東たる古 北端に活火山アツリマツキ(海抜凡四千尺あり。西南端にフス山(海抜凡六千九百尺)あり、其形圓錐狀にして甚だ齊整。其他火山四個守の南に在る大島 平坦なる火山(海抜凡二千五百尺)あり。北端に活火山ありと云へり

志林規島 波羅茂尻島の西南 全島一圓錐體となす(海抜一、八七二尺)。島の中央に一火山ありと

磨勒留島 波羅茂尻島の西南 北西端に圓錐的火山(海抜二、四五五尺)あり。東南端に富士山狀の火山(海抜三、五七五尺)あり。二山の間に四個の圓錐狀なる火山あり

温稱古丹島 波羅茂尻島の西南 全島不規矩なる火山狀と現す。火山の大湖一個小湖二個ありと云ふ

加亞連古丹島 温稱古丹島の西南 北端に富士山狀の活火山(海抜二、一七三尺)あり。西南端に活火山(海抜凡二千七百五十五尺)あり。白煙常に蒸騰す。二山の間土地平坦

捨子古丹島 加亞連古丹島の西 全島宛として富士山狀の火山(海抜三、六三九尺)となし山頂尖立す

越渴磨島 捨子古丹島の西北 全島圓錐體なり。頂上(海抜二、三一八尺)は二重富士山形となせり

知林古丹島 越渴磨島の西北 海上より突起せる圓錐體(海抜一、三四三尺)或は曰ふ活火山なりと

雷公計島 捨子古丹島の西南 全島秀絶なる圓錐體となす、頂上(海抜五、二三八尺)は少く狭損す

松輪島 雷公計島の西南西

日本には火山岩の多々なる事

羅處和島 松輪の西南十九哩 北南各一個の圓錐山あり。南山海拔三、〇八二尺は北山より高且大

宇志知島 羅處和の西南十哩 北南二小島あり、共に火山的。南島に温泉あり、硫氣盛んに飛昇す

計吐夷島 宇志知二島の西南 此島(海拔三、九四二尺)の中央なる山頂より蒸氣を噴出す云へり

新知島 計吐夷島の西南海 北端に鋭尖なる圓錐山(海拔三、六六三尺)あり。中央にアレグザスト

知理保以島 新知と得撫との間 北南二島より成る。北島に二圓錐状活火山あり。南島は死火山なり

得撫島 新知島の西南五十 北端に平低なる圓錐山あり。其北なる摺鉢山(海拔凡四千尺)は鋭尖

擇捉島 得撫の西南に在り 六哩の海峡と距つ にして頗に硫氣を噴く。中央に雪光山あり。峽頂圓錐峰にして秀絶

國後島 長凡四十三里幅最 得撫の西南に在り 廣五里周凡二百 八十里、千島三十 二島中最大なる者

千島列島中の最南 北海道本地と八哩 北海峽を以て距つ

北端に平低なる圓錐山あり。其北なる摺鉢山(海拔凡四千尺)は鋭尖にして頗に硫氣を噴く。中央に雪光山あり。峽頂圓錐峰にして秀絶

モロ(海拔三、四七五尺)、富士状をなし二火口あり、半月形の湖あり。周回二里、ナルツア、砂那の西北に立つ。シヤツカ、砂那の東に立つ。ナルツア、砂那の東南に秀つ。單冠表面にはストカツプと記す。真箇の富士、鶴巻(表裏にはアトシと記す)(海拔凡四千五百尺)二重富士状をなし秀絶。ヘレメラ、島の最南端に在り、硫氣を噴く

チヤチヤノボリ(海拔五、〇五八尺)、島の北端に在り、富士の上更に小富士を載する。如し。ルレイ、圓錐山(海拔凡三千尺)島の中央に兀立す。メチラス(海拔凡千五百尺)、其北に二湖あり、一湖(ボントーと云ふ)より硫黄の熱湯を噴く、共に燻火口なるべし

北海道本島の火山

(五) 北海道本島の火山

北海道本島亦た火山多々之れを大別して三區分となす(一)千島列島より

千島列島より連続せるもの

(一) 千島列島より連続せるもの

連続せるもの(二)後方羊蹄山彙に屬するもの(三)渡島山系の東派

硫黄山 知床海角の中央邊 海拔凡千五百尺、北側の側火口には熱湯沸騰し硫黄の蒸氣を噴出す

良牛山 知床海角の中央邊 海拔凡五千尺、硫黄山の南隣に在り、缺損したる火口様のもあり

摩周、又マシニイ 根室國四別河の源 マシニイ嶽頂の湖は即ち燻火口なり、風光絶佳。湖畔に新火口あり

アトサノボリ 釧路國釧路湖の東 海拔凡千六百五十尺、硫黄坑山として特に著名たり、噴煙甚だ壯大

男阿寒嶽 釧路國阿寒湖の東 海拔凡四千八百尺、秀絶なる圓錐峰を築立す、山頂の眺望真に雄拔

女阿寒嶽 釧路國阿寒湖西南 海拔凡四千七百九十尺、頂に火口壁、熱湯池あり、四時硫煙を噴く

スタノカウシベ 石狩國石狩河の源 海拔凡七千尺、世の所謂石狩嶽なるもの、西南側より煙氣を噴出す

オプダケシケ 十勝、石狩の境界 此の山彙に噴煙せる火山數個あり(表圖中の男嶽女嶽も此間に在り)

(二) 後方羊蹄山彙に屬するもの

日本には火山岩の多々なる事

後方羊蹄山彙に屬するもの

惠庭嶽

膽振國支笏湖の北に屹然兀立す。札幌より南に望む。

海拔凡三千八百尺、峭然たる火口あり、山頂に鋭尖なる岩塊あり、札幌農學校寄宿舎南面の破窓に映發するもの實に此嶽魁ひ起す、十年前此の嶽世の几前に落ちたることと、知らず嶽色なきや否や

樽前山

膽振國支笏湖東南至嶽嶽と相對せり。

海拔二千八百三十尺、千歳村より川に沿ひ原人時代の山林と過ぎり行くこと七里、火口壁あり此中の新火口より硫氣と蒸氣とを噴出す。

有珠嶽

膽振國洞爺湖の南

海拔凡千八百六十八尺、二個所より噴煙す、登臨せば風光殊に跌宕

硫黄山

後志、石狩の境界

海拔三、三、七四尺、數個の火口ありと云へり、岩内市街より東南五里

駒ヶ嶽

渡島國函館市街より峠下、シッコンノッ

海拔三千八百六十尺、函館の正北に在り、函館と出でて五稜郭、栢根の湖水に倒射するを看、此峰に一睡し、半夜疾く起ち、拂曉駒ヶ嶽の火口壁に登らんか、曙色噴火煙より來り、薄菜の湖光、函館の海色、之れと映發し、眞個一幅の活畫圖、我んや脚底火山岩の磊落雄渾なると添ふるや、文人高師若くは風樹の高士は登臨すること最も可

渡島山系の東派

(三) 渡島山系の東派

惠山

函館より湯ノ川、小安、月井、尻岸

海抜凡千九百十尺、函館を發し一里二十九町にして湯ノ川温泉湯あり、行樂の處、湯ノ川と去り海岸に沿ふこと十四里、山麓のト、ホックあると看る、ト、ホックより登ること一時間に飛瀑の海中に直瀉する、火口壁あり、壁の上には純黄色となし、常に暗白濃密の硫氣を噴出す。

本州東北の火山

本州東北の火山に二主脈あり、(一)中央火山脈、(二)西岸火山脈、(三)寒風山火山脈。

(六) 本州東北の火山

中央火山脈

(一) 中央火山脈

是れ北海道火山脈より津輕海峡を經陸奥國斗南半島の燒山忍山に連り、延縁して舊奥羽の境界となり、太平洋に注入する川河と日本海に注入す。

日本には火山岩の多々なる事

征帆一たび噴火灣に入らんか、左に惠山駒ヶ嶽あり、前に有珠、マッカリヌブリ(後方羊蹄山)硫黄山あり、右に登別樽前飛瑠山、惠庭あり、八火山の秀色は歴歴として雙眸に落つ、全世界中復た此の雄絶壯絶の觀あらんや、宜べなり「噴火灣」の稱。

湯爪雪泥幾往還。征帆復過火山灣。十年遊獵厭頗好。煙霧羊蹄山又出。胡笳聲歇水西東。夾岸棋楠看欲空。御木舟遙入既去。有珠山上月如弓。 別 川 生

る川河の分水脊となり、本州東北部の主軸をなし、南に下りて兩毛の間に入り、竟に富士火山脈に合するものとす。北方豪健の象を形成するものに是れ。

- 燒山 陸奥下北部の西部 齊整せる圓錐峰となす、第三火口は缺損す、岩質は大礫石安山岩
- 恐山 陸奥下北部の中部 海拔凡千米突、硫氣を噴く、舊火口の大湖(恐山湖)となすものあり
- 八甲田山 陸奥東津輕上北部 海拔一、八五二米突、東津輕郡より上北部に延縁す、火口三個あり
- 赤倉山 陸奥東津輕上北部 十和田湖の北岸に在り、第三世紀層礫層より突出する燒火山となす
- 十和田湖 陸奥、陸中の境界 海拔凡四百五十米突、湖中の「内海」は舊火口にして其岸は峭壁なり
- 戸來嶽 陸奥上北三戸二郡 海拔一、二一七米突、十和田湖の東岸に兀立し上北三戸二郡に跨る
- 名久井嶽 陸奥三戸郡の南部 海拔六五九米突、三戸町の東に在りて馬淵川の兩岸に孤高天を衝く
- 七時雨山 陸奥、陸中の境界 海拔一、一〇六米突、馬淵川上流の南に當り兀然たるものは是れなり
- 森吉山 羽後北秋田郡東南 阿仁銀山の東に聳ゆ、奥嶽(海拔一、四五七米突)は圓錐峰となす、前嶽(海拔一、二四九米突)は舊火口の四壁となす、嶽上の眺望絶佳

- 燒山 羽後國北秋田郡全 西の方蘇吉山より連り東して岩手火山群に合し中央火山脈の北部形
- 鬼ヶ城山 仙北郡と陸中郡の間に盤風 腹區域となす、燒山山頂には南北凡七八町東西凡五六町なる橢圓形
- サカビ山 蘇吉山の東に緯互 此口より噴出せしこもりサカビ山、元山は燒山の西に在り、硫
- 元ヶ山 蘇吉山の東に緯互 此口より噴出せしこもりサカビ山、元山は燒山の西に在り、硫
- 岩手山 陸中北岩手郡南 早天盛岡市を出て、(二)八里人力車(午)茶時岩手山麓なる大礫硫黄温
- 駒ヶ嶽 陸中、陸前の羽後 泉に達す、別れ、(一)山(甲)の上(乙)あり其又上(丙)あり(丁)あり
- 酢川嶽 陸中、陸前の羽後 泉に達す、別れ、(一)山(甲)の上(乙)あり其又上(丙)あり(丁)あり
- 吹上間歌泉 陸前國玉造郡鬼首 小屋あり、山頂に岩手山神社あり、健脚の者は黄昏大霧に返へり得
- 荒神嶽 陸前中部と羽前中 陸中、陸前の羽後 泉に達す、別れ、(一)山(甲)の上(乙)あり其又上(丙)あり(丁)あり
- 船神嶽 陸前中部と羽前中 陸中、陸前の羽後 泉に達す、別れ、(一)山(甲)の上(乙)あり其又上(丙)あり(丁)あり
- 泉嶽 陸前宮城郡の中部 荒神山に北に聳ゆ、船嶽は荒神山の南に秀づ、共に火口あり、二山
- 藏王嶽 陸前、羽前の境界 即錐峰となし、火口あり、仙臺市より西南に當りて之れを眺望し得
- 虚空藏山 羽前山形市の西南 海拔一、〇一三米突、一名白藏山、東南南村山東西置賜五郡に跨る

日本には火山岩の多々なる事

岩木山

陸奥國中津輕郡より四津野に跨る。弘前市の西北にあり。一名津野山。海抜一五九四米突。

鳥海山

羽後國飽海郡、由利郡に跨る。由利郡より五里六町にして日本海岸なる吹浦に到り此所より登山すると以て最も利便とす。一名鳥ノ海山。山頂に鳥ノ海神社あり。又、鳥ノ海神社と稱す。海抜一、一五七米突。

月山

羽前東田川、最上、西村山三郡に跨る。海抜一、九六〇米突。鶴岡町若くは山形市より登る。月山の西北に湯殿山あり。北に羽黒山あり。合して三山と稱し。諸者甚だ多し。

朝日嶽

羽前、越後の境界。越後三面川の上流に峭立す。嶽の北麓なる大島池は蓋し碧火口なり。

飯豊山

羽前、岩代、越後。山頂(海抜一、八八〇米突)は花崗岩なるも麓は大牛火山岩なりとす。

御神樂嶽

岩代、越後の境界。海抜一、二一九米突。岩代河沼郡と越後東蒲原郡に跨る。飯豊の南西

守門嶽

越後東境の中央邊。越後南蒲原、古志、北魚沼三郡に跨る。布引瀧あり。高サ百廿丈と稱す。

淺草山

越後北魚沼郡東北。海抜一、六三二米突。齊整せる圓錐峰となし。山頂に蓑火口一個あり。

駒ヶ嶽

越後北魚沼二郡。守門嶽の南西に在り。北魚沼二郡に跨る。圓錐峰となし。火口あり。

苗場山

越後南魚沼郡南部。海抜二、一五五米突。駒ヶ嶽の南西に在り。圓錐峰となし。火口あり。

白根山

上野香妻郡より信濃上高井郡に跨る。海抜二、一四二米突。草津温泉湯場より登ること二千米突(海抜)にして錐形火口あり。廣き所五百米突。幅百五十乃至二百米突。其の壁は峭絶なり。然れども東邊に低所ありて此所より入り得べし。内に硫黄熱湯の大湖あり。

吾妻山

上野、信濃の境界。海抜二、三五七米突。一名四阿山。齊整せる圓錐峰にして火口あり。

寒風山火山脈

(三) 寒風山火山脈

是れ羽後國男鹿半島より起り、半島の東側に寒風山、西側に新山、本山を崛起し、中央西岸の二火山脈と并行して南南西に走り、日本海中に入り、飛鳥粟生島を崛起し、復た陸に上りて直ちに越後の角田山を崛起し、日本海岸に沿ひて西南走し、越後國中の諸名山を崛起して、信濃の境に入り、竟に富士火山脈に合するもの。

日本には火山岩の多々なる事

日本には火山岩の多々なる事

寒風山 彌彦山 妙高山 黒姫山 焼妻山 高妻山 戸隠山

日本には火山岩の多々なる事
 山頂に圓形なる岩火口あり、周圍一里餘、金山嶺石安山岩より成る。又た山の傍に散在の間に火山岩層散在す、温泉の湧出する所あり。沿岸は日本海の急流岩石を撃ち、風光の跌宕なる東北地方に冠絶す。海抜六三三米突、日本海岸に望み、新潟市の西南に在り、山に彌彦山神あり、山頂より日本海を望む。北方角田山との間に温泉あり。越後國西蒲原郡、三島郡の間に跨る。海抜九一〇米突、刈羽郡の西境より延きて中頸城郡の東境に延び、直江津鐵道山口停車場より下車し、赤倉温泉場に到り、夫れより登ること可、妙高山阿彌陀堂(舊暦六月二十三日夜大開帳あり)へ登拜者の登る道あり、雖も峻険にして可ならず、赤倉山の硫黄噴口に到るの道と取りて可、此の硫黄噴口(甚だ高度なる二温泉湧出す)と去るや、陸夏と雖も、餘間處處に硫黄と見る、又た道の最も狭き所幅二寸弱に、鐵鑿と懸崖に懸き之れに頼りて以て過す、硫黄噴口數所にあり、絶頂阿彌陀堂の側に泉水あり、寒冽にして一飲齒牙爲めに冷、飲後四方を眺むべし、東南に淺間、富士あり、南には黒姫山の雙尖聳立し、其間より飯綱山と望み、南西に銀ノ峯、西北西に焼盤山の頂を看る、赤倉温泉場より往復七時間にして上下し得。海抜一、九八二米突、信濃の北境に望み、圓錐峰にして岩火口あり。海抜二、四一〇米突、金山嶺石安山岩より組成し、山頂は甚だ齊整せる圓錐峰となし火口あり、又た硫黄噴口あり、但し落石は認めず。海抜二、四二五米突、信濃の上水内郡西北頸城郡の間に跨る。越後國中頸城郡に在り、信濃國境の北に登り、越後鐵道北行の直江津越後の境に入り、里の左の山即ち是れなり、赤倉温泉場より登る最も利便。海抜二、四四四米突、信濃の上水内郡北部。越後中頸城郡、西頸城郡の間に跨る。海抜二、四二五米突、信濃の北境(越後との)に望み、焼山の南に在り。長野町より直ちに登り得、荒安村より飯綱山麓の高原と經(原の最高所に島居あり、牛里洞にして道路左右に別る、右は中院道、左は寶光院道(二十町あり)寶光院より老杉を植ゑたる山道(檜洞)と登り三十町にして奥院に達す、九頭龍神社あり、社の神酒甚だ芳醇、奥院の更に奥に銀ノ峯あり、登り三里道路峻険なりと雖も、山中の小屋に一宿し、翌日大岡の昇ると看る殊に奇觀たり、水蒸氣の雲の中、山の現象と大悟せん、欲せば須らく登臨すべし、必ずや得る所あり。

飯綱山 冠着山
 以上表記せる外、(一)中央火山脈に前乘山(陸中)赤崩山、飯森山以上二山、羽前岩代の境界、七ッ森山(岩代、福島町の東東南、鬼面山、箕輪山、鐵ヶ杖、和尚嶽)以上四山、岩代、皆な吾妻火山彙の南に延きたる所、會津布引山、白河布引山、海抜一、〇三〇米突、二股山、小城、森大城、森旭岳、海抜一、九七〇米突、小野嶽、明神嶽、博士山、海抜一、四七九米突、船ヶ鼻山、七ッ森山(海抜一、六七一米突)、中山、峠、長手山(海抜一、一六〇米突)、燧嶽(海抜一、九八〇米突)、圓錐峰をなし火口あり、尾瀬沼以上十四山一沼、岩代、武尊山(上野、赤城山の北海抜二、〇七四米突)の諸名山及び舊火口あり、(二)西岸火山脈に赤安山(越後御神樂嶽の西北、狸ヶ森山、岩代、越後の境界、御神樂嶽の西南、八十里、越海抜八四五米突、六十里、越(海抜一、三〇一米突)以上二越、岩代、越後の境界、岩管山(海抜二、五一一五米突)、横手山(海抜二、二四七米突)以上二山、信濃、上野の境界の諸名山あり、(三)寒風山、火山脈に新山(海抜七二〇米突)、本山(海抜六八三米突)以上二山、羽後男鹿半

日本には火山岩の多々なる事

島、角田山(越後新潟市の西南彌彦山の北、日本海岸に聳立す)、黒姫山(海拔一〇九〇米突、米山の東南、不動山、鬼面山、海拔一、六一五米突)、雨師山(海拔二、〇四〇米突、薬師ヶ嶽以上五山、越後皆な妙高火山帯に在り)の諸名山あり。北日本の名山了る、君請ふ登臨し、火口湖の晶明なる冽水に嗽きて、太古の雪を嚼み、天風に獨嘯して、長空に向ひ浩歌せんか、君や人間の物にあらず。

不詳し、米山、雨師山、黒姫山、角田山、彌彦山、

中部日本の火山

(七) 中部日本の火山

中部日本の火山に二主脈あり、(一)富士山火山脈、(二)立山火山脈。

富士山火山脈

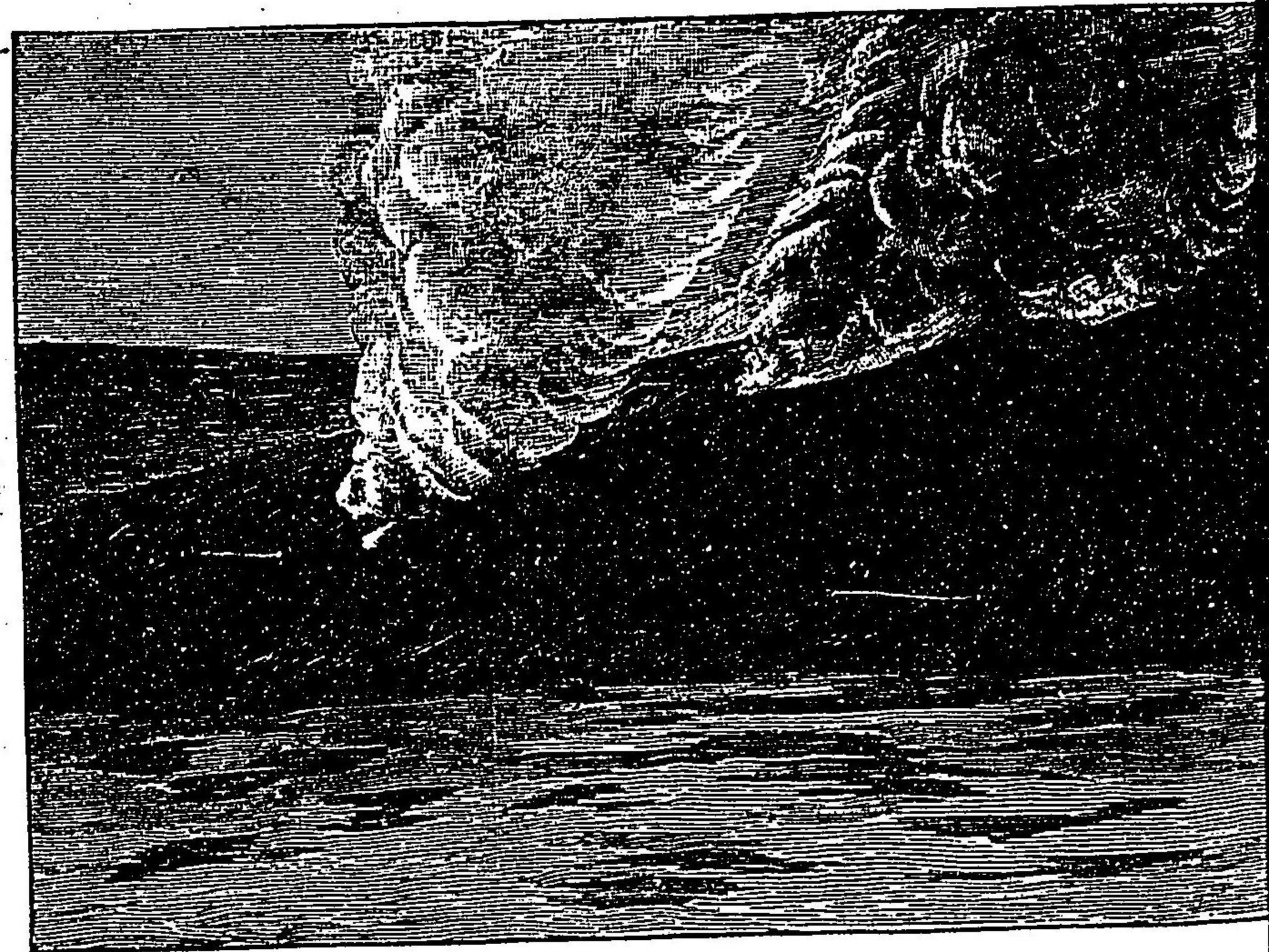
(一) 富士山火山脈

是れ東北火山脈中寒風山火山脈の西南端なる妙高火山帯より東南走して、浅間富士を崛起し、伊豆半島を構造し、竟に太平洋に入りて、豆南七島、鳥島、小笠原群島、硫黄諸島を崛起するもの、其間名山殊に多々、列擧すべきか。

鏡臺山

信濃埴科小縣二郡松代町の背に聳ゆる

千曲川の東岸に聳立す、威捨山と相對す、威捨山より月の昇ると看るに、此の山嶽の凹所に圓月の懸る所宛も鏡臺の如し、故に此名あり



吾妻山ノ噴煙
(噴煙ノ遠望ノ状)

(此ノ山上ノ新學ノ爲ニメテ、瑞々シク學士三浦宗次君ノ親ヲ撮ルセシメ所)

中部日本の火山此の如し、試みに登臨せんか、人々や漂渺として羽化せんとす、何ぞ一たび攀らざる。

南日本の火山

日本海火山脈

(八) 南日本の火山

(一) 日本海火山脈

富士山火山脈立山火山脈中部日本以南を南日本とす。南日本の火山脈、大別して四(一)日本海火山脈(二)白山火山脈(三)阿蘇山火山脈(四)霧島山火山脈。是れ日本海中なる佐渡島の金北山に起り、西南走して能登半島に上り、半島中に寶立山、高洲山、鷹爪山を崛起し更に海中に潜入して西西南走し、隠岐に上り、隠岐の島後、島前に數火山を崛起して復た海に入り、西南走して長門の見島を崛起し、前みて壹岐島に上り、竟に平戸島、五島に到るもの。

金北山

佐渡國加茂郡より維多郡の間に跨る。海拔一六二米突。

佐渡全島の最高點にして、島の北半(俗大佐渡と稱す)の中央に據り、夷町若しくは吉井村より登り得。山頂より北西に日本海と云々、南に國府川、全溪谷及び島の南半(俗小佐渡と稱す)の連山と下瞰す。

東飯山

海拔六四六米突

經寶山

海拔六二〇米突

高寶山

海拔六二一米突

別應山

能登の北部に登ゆ

鷹爪山

能登風至郡の北部

寶立山

能登風至、羽咋、鹿島三郡の間に跨る

隱岐山

日本海中に羅列する島後、島前(中ノ島、西ノ島、知夫島)に別つ。列島の母岩は大概火山岩

壹岐島

全島の北方一部、東南方一部を除き、能く火山岩と數く

大生島

壹岐と平戸島の間に羅列する群島の生月島は平戸の西北に在る細長島

佐渡の南半(小佐渡)の中部に連続する火山脈、松ヶ崎港の西に秀つ

海拔五一八米突、山頂よりは綠剛、珠洲二海角の外に日本海と望む

海拔五五〇米突、寶立山の西南、輪島町(輪島塗の産所)の東に登ゆ

鷹爪山、海拔四四二米突。別所山は鷹爪山の東東南走する間に登ゆ。

共に山頂よりは東南に七尾灣、能登島と看、西及び北に日本海と望む

島後に大嶽寺山あり、一名摩尼山、海拔凡六百二十米突、西郷港の正北二里に獨立す、隱岐列島中の最高點にして、圓錐峰と顯示す。

島前の四ノ島中央に焼火山あり、海拔凡四百六十米突、隱岐列島第一の高山、火山の傍近は杉、松の長材と多産するも他山には少し

島の西南に嶽ノ嶺(海拔二二三米突)秀つ。西に神山(海拔一七九米突)あり。西北に本宮山(海拔一二四米突)輪浦港の南岸に登ゆ。東北岸に魚釣山(海拔一五五米突)起る。皆な火山岩とす。四岸に温泉あり

皆な火山岩より組成す。大島の北部に宇戸嶽(海拔二二四米突)登ゆ。生月島の中央に雷嶽(海拔三〇四米突)起る。其他小嶽火山あり

日本には火山岩の多々なる事

報恩寺山 越前大野郡の北部 海拔一、二一六米突、經ヶ嶽の西、勝山町の東に獨立する一熄火山
 大日山 加賀、越前の境界 海拔一、三四〇米突、勝山町の北、福井市の東微南に秀然と突起す
 國見嶺 越前坂井丹生二郡 海拔六三八米突、日本海岸に獨立す。西南越智山あり、亦た熄火山
 青葉山 若狹、丹後の境界 海拔六二〇米突、日本海岸に獨立す、頂よりは御角海光の眺望瀾大
 但馬播磨 但馬の西隅に神鍋山秀づ、其の傍近に湯村の硫黄温泉あり。但馬、
 磨因幡 播磨國の北西境に 播磨、因幡の境上に菅野山(海拔一、六五〇米突)、水ノ山(海拔一、
 の境上 涉り、因幡國の東 三、一八米突)突起す。但馬、因幡の境上に扇ノ山(海拔一、四二〇
 鳥取市傍近 因幡鳥取市の東北 駒籠山(海拔四五一米突)、駒籠山の南東
 鷲峰山 因幡高草氣多二郡 海拔九四七米突、寶木、鹿野より南微東に入る、香谷の東南に聳ゆ
 船上山 伯耆八橋郡の西部 八橋の西南に聳ゆ 海拔九七五米突、名和長年の後醍醐帝を奉じて勤王の兵と擧げたる
 高麗山 伯耆汗入郡の東部 海拔七七六米突、船上山の西に秀づ。麗南なる赤松池は蓋し舊火口
 大山 伯耆國八橋汗入、 御來屋より左折し南行して登る、山腹に大神山神社(祭神大己貴命)
 米子町の東に聳ゆ あり、徑路は峻峻なりと雖も絶頂よりの眺望は最も瀾大、北に隱岐
 中國第一の高山嶽と 列島日本海上に浮出し、西に出雲、石見の境上なる三瓶山の即離岐
 認の得、米子町に下らんまで西麓より車大村に出づるを最便とす と看、東に三國山(但馬、播磨、丹波の境界)及び但馬、丹波の連山と
 海拔一七八一米突

阿蘇山火山脈

三瓶山 出雲神門郡、石見 海拔一、一七三米突、齊整なる圓錐体となす、火口あり、徑路は峻
 安濃郡の間に跨る 峻なりと雖も、絶頂よりは前に日本海を望み背に無數の山嶽と看る
 青野山 石見鹿足郡の西境 海拔九五〇米突、石見、周防、長門の境上に秀起せる一熄火山なり

(三) 阿蘇山火山脈

是れ肥後の阿蘇山を主幹とし、東西に延縁し、西の方熊本市傍近なる金峯
 山麓より起り、田原坂、吉次越、木留、皆な火山岩に係り、市の西郊に法性花岡
 の二丘を起し、東東北走して阿蘇大火山麓を聳突せしめ、肥後、豊後の境上
 に涌出山を涌出し、二豊に入りて彦山を崛起し、豊後に黒嶽、久住嶽、鶴見嶽、
 由布嶽、雙子嶽を簇立せしめ、前みて海を渡り、四國に入り、伊豫の南境に石
 槌山、三津ヶ濱の海上に小富士、松山市の東北に高繩山を崛起し、讃岐に到
 り丸龜町の東南に飯ノ山を崛起し、更に東北走して海中に潜入し、遂に本
 州に入り、紀伊、和泉の境上を経て、大和の中央に到り室生山を崛起し、愈、東
 北走して伊勢の中央を過ぎり、參河の鳳來寺山を崛起するもの。夫の楡垣
 女の孤棲せし處、金峰山、粟岩戸山の麓、慶應十七日七千人の殺傷せし處、田

多良嶽

參詣者は大抵八時
間にて諸峰地を巡
覽すると例となせ
ども健脚者は五時
間にして巡覽し得
肥前縣津、東彼岸、
北高來三郡に跨る
大村町より東北位

り徑路甚だ峻峻、遂に絶頂に達す、頂よりの壯觀は普賢嶽に譲らず。
島原町に下らんごせば、左に温泉嶽、右に高嶽の間なる窪地と過ぎ、
空地なる火口湖と見、深間に下り、又た登り、又た下りて前山の暗
絶奇絶なる火口壁を見、平地に下り、遂に島原縣下の市街に達す。
海抜一、二六六米、西岸の大村町より、黒水二村を經、登り得、
頂に掛かるる大火山口あり、頂よりの四圍は規模或は温泉山嶽の普賢
嶽に譲るごせ、大嶽は異らず、頂より少しく南に下れば金泉寺あり

フガツケ博士の
英國風景説

火山の日本國に普遍する此の如き、想ふ火山は天地間の所謂「大」なる者、天
地間の「大」なる者にして日本國に普遍する此の如しとせば、浩々たる造化
が其の大工の極を日本に鍾めたりと斷定する、誰れか之れを借越なりと
言ふぞ、博士ラポツシ英國皇立學士會會員、英吉利の風景を詠説して曰く、
多様多變の風景を小範圍の裡に呈出せるは、全世界中、我島國の如き
所恐くは他に在るなけん、試みに南方より始めんか、先づ蒼海あり、沙
汀あり、セント州に白聖の懸崖あり、アラム灣に彩色ある砂土あり、デ
ヴォンシャー州に赤砂岩あり、コーンウォール州に花崗岩、片麻岩あ
り(以上海岸、内部に入らんか、白聖なるダウンの丘脈及び明淨なる流

英國には火山岩
の一大山だにな
し

水あり、暢茂せる森林及び豐饒なる葎草園あり、西せんか、礫質なる丘
陵の起伏せるあり、更に西せば、花崗岩の突起せるあり、英國の中央に
到れば、東にノルfolk州の諸「水」及び「澤地」あり、次に膏腴なるミッドラ
ンド地方に入れば、穀圃あり、豐饒なる牧場あり、肥大なる牛犢あり、西
に向へば、ウェールズの諸嶺連り、更に北せば、ヨークシャー州のウォルド山
脈あり、ランカシャー州の群丘あり、ウエストモアランド州の諸湖あり、
愈、北せば、丘陵の起るあり、陰々たる澤地あり、ノルサムバランド州カム
バランド州に畫様の城郭あり
と、英吉利や、國土の美なる誠に此の如きものあらん、而かも遂に活火山の
在るなきを如何、活火山の在るなき猶ほ可、其の火山岩の一大山だに在る
なきを如何、蘇格蘭エディンボロ市傍近のアーサーズ、シートは石炭紀時代
に現存せし一火山の噴出管あるべしとの説あれども、一小丘にして固よ
り言ふに足らず、日本は、ラポツシの英吉利に詠説する所を悉く網羅し盡
くして、之れに加ふに、天地間の「大」著たる火山の到る處に普遍するを看る、
日本には火山岩の多々なる事

造化は大工の極
と日本に鍾めたり

日本火山の
緑色

日本の火山は緑
色にして韻致あ
り

火山湖

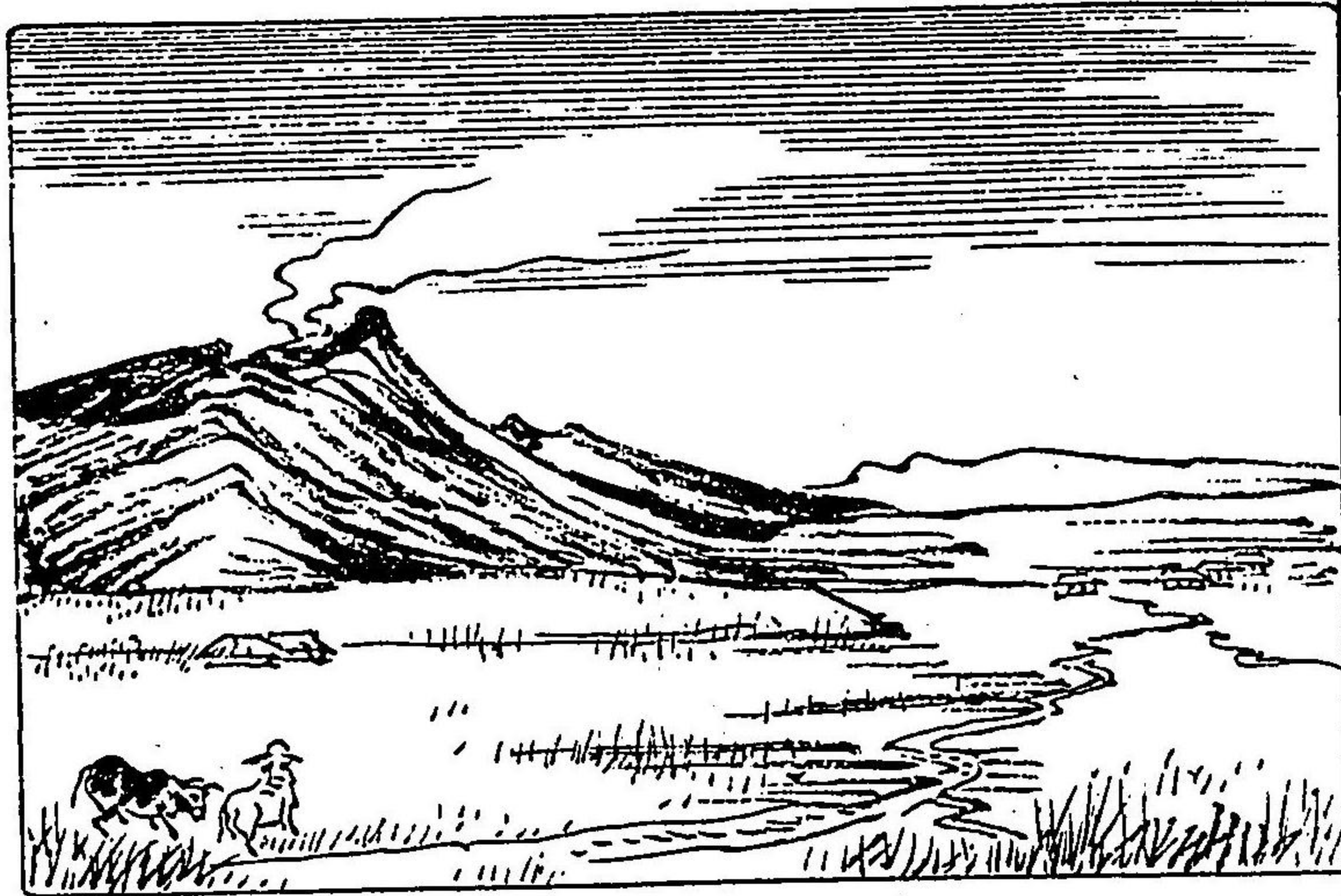
一火山だに在るなき處に於てすら猶ほ且つ全世界中の多様多變なる風景を呈出すと絶説す何ぞ況んや吾が日本をや浩々たる造化が其の大工の極を日本に鍾めたりと斷定する愈益僭越にあらざるを確信す且つや

(九) 日本火山の緑色

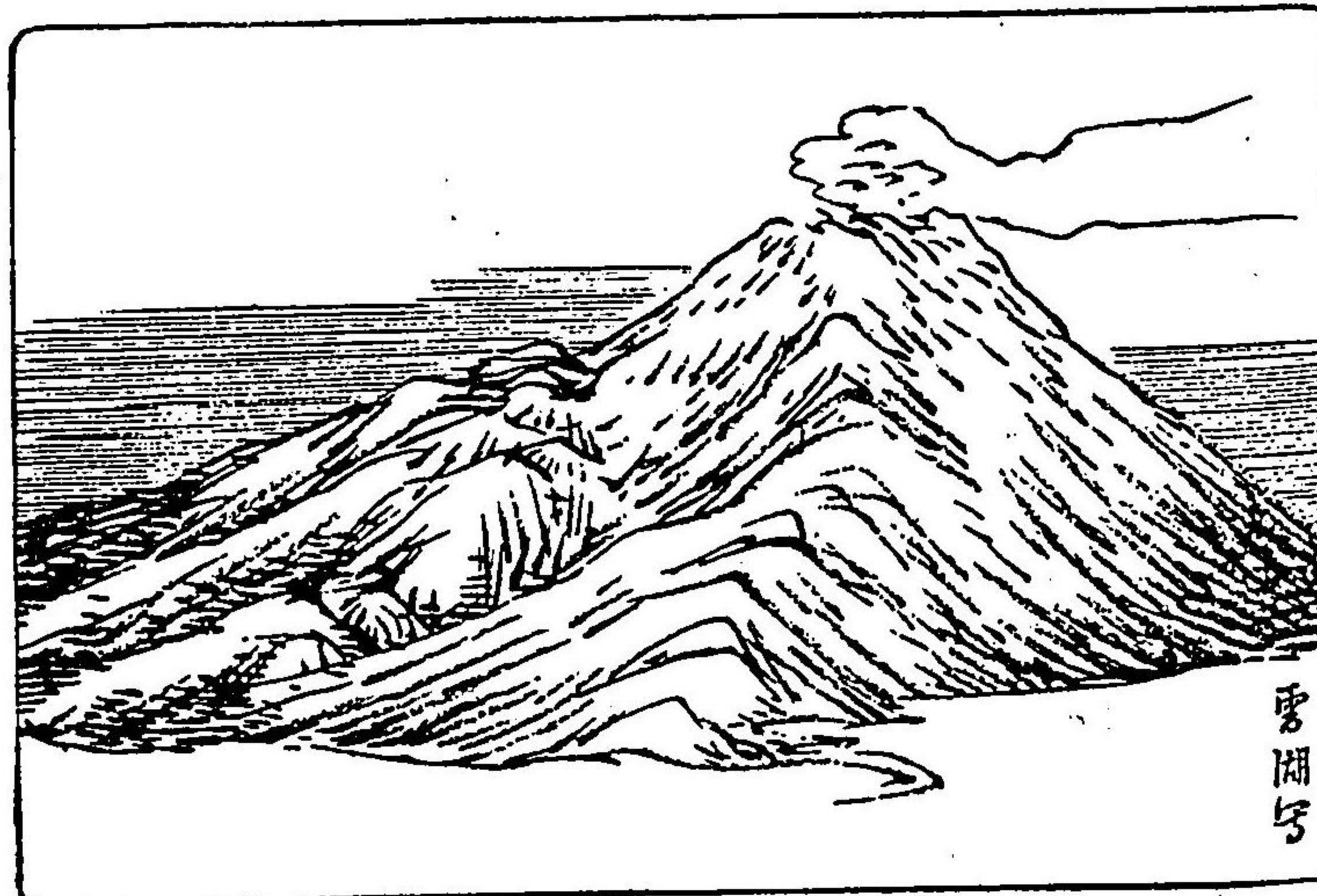
なるは是れ亦た我が絶特なる所蓋し日本の氣候たる多濕多雨故に水蒸氣は外部より火山岩を攻撃するが上に亦た多孔なる此岩の内部に浸入して輒ち之れが霰取を促し膏腴なる土壤を山上に化成し加ふるに日本の夏季は雨量特に多大其間温度も亦た劇しく高昇し時しも驕矜なる太陽は輻絶なる火山の側面を炙るを以て他邦の火山たる多くは赤裸々なるも日本の火山は然らず喬樹灌木相交互し綠蔭鬱然松籟處處々に起り火山の大に添ふに更に韻致を以てす是れ甚だ他邦に看ざる所更に韻致を一層に添ふるものを

(十) 火山湖

となす想ふ日本の湖たる(一)所謂火山湖種に屬するもの最も多々即ち熄



山前樽
(△ 望 = 北 四 日 原 曠 牧 小 苔 國 振 騰)
(▽ ナ 詳 = 頁 六 十 六 第)



山間淺
(△ 望 = 北 日 原 分 迫 國 渡 信)
(▽ ナ 詳 = 頁 七 十 七 第)

香間号

火山力の副産物たる湖
噴起の際出生せる窪地に化成せし湖

河道を遮断して化成せし湖

火山湖の景象

日本には火山岩の多々なる事

らず、火山力の副産物として湖の化成せしもの多々、(二)噴起の際、地盤の陥没し若くは溶岩、火山屑等の堆積して火山又は他岩質なる山嶽との間に窪地を生じ出するや、氷雪、雨漬は之れに溜溜して、堰ち湖を化成す、此種の湖や大概は山麓に湛ゆるもの、夫の樹林翠蔚たるの下一碧十二里中にトモモシリ島を屹立する、釧路湖、雄阿寒、雌阿寒、二嶽相對して、峭突するの間に、緑蔭水畔を彩り、危巖四岸に峙ち、島を浮ぶること、幾個其の絶勝、北海道第一の稱ある阿寒湖、以上、釧路、惠庭、樽前、の嶽影を鑑する、支笏湖、蝦夷、富士山下の洞爺湖、以上、膽振、雲煙、杳靄せる、猪苗代湖、岩代、富士山麓なる、明媚、畫様の五湖、山中、川口、西、精進、本栖、の如き、即ち是れ、(三)噴起の際、溶岩、火山屑等吐出し來り、川河の流道を遮断して、河水爲めに、滯滞し、忽ち湖と化成せしもの、夫の駒ヶ嶽下に、泓然たる大沼、尊菜沼、渡島、磐梯山、爆裂の際、化成せし三湖(檜原、秋元、小野川、日光山頂の中禪寺湖)の如き、即ち是れ、想ふ、這般の諸湖たる、一泓澄深、而かも大陽の光線は、下徹し、晶々として、鏡の新に磨ける如く、鬚眉、輒ち鑑すべく、俯して窺へば、鱉魚、アメモス魚、イワ

世の「平和」中の最平和の代表者

火山湖と大陸所在の湖
洞庭湖

日本には火山岩の多々なる事

ナ魚、洋々として往來し、玻璃瓶中を行くに似、忽ちにして、巖影、樹影、山影、倒映して水中に入るや、鮫魚は山に登るが如く、アメモスは樹に攀り、イワナは巖上に躍らんとす、頭を擧れば、衆峯回環し、交るゝ高を争ひて、其間僅かに、天光を窺はし、萬象の蕭瑟たる、轉た人の神骨を冷々たらしむ、況んや、火山湖の四岸懸崖壁立、直ちに水面より、峭絶する處、愈益、景象の蕭瑟を、添へ來る世に「平和」なる語あり、而かも「平和」中の「最平和」は實に、火山湖に依りて代表せらる、誰れか料らん、此の「最平和」の代表者は、爆聲、轟々、火光、煽々、天日を焼き、岩石を溶かし、硫煙空を衝きて、逆上し、熱灰地を捲きて、吹き散じたる、當初の火山口ならんとは、「平和」か、「平和」か、知れ、眞成の平和は、物力を極端まで費了せずんば、竟に得べからざることを、若し夫れ、火山力の副産物たる、各種の湖に到りては、其形曲折、出入極めて、不規律、石罅、或は水心に突立し、飛巖、或は潭外に錯峙し、亂礁、或は波際に點綴し、變化萬狀、固より他の大陸所在なる、沿岸の平阜、單一景象の庸々凡々たる湖と、比較すべきに、あらず、一たび洞庭湖(支那)と聞かんか、人をして、輒ち、月白く、風清きの夕を

想起せしむ、而かも其岸の沮洳たり、其深サ梅雨の候と雖も僅かに二尋、冬季一尋、水色常に渾濁珊瑚色をなすを知らば南岸の水色は稍澄清なるも湖の大概は渾濁す、人をして意阻み興醒め復た湘娥を吊ふの念なからしめん況んや、湖光宜雨最宜晴、好景偏憐夜色清〔沈徳澄〕てふ西湖支那は、其の所在鹵濕、マラリヤ熱の窩窟となりて、孤山處士棲遲の趾は瘴氣の胃す所となり、其の宜雨日は微菌を培養するの期なり、宜晴の日、夜色清の時は恰も沼瓦斯蒸發の際なり、眞個殺風景の極、誰れか復た其畔に歸隱を計る者ぞ、君や克く火山力の如き氣力を揮霍し盡くして大に社會の間に周旋し、他年功成り名遂げ、竟に歸隱を計らんと欲せば、請ふ須らく蓋を火山湖畔に結べ、瘴氣に胃れず、沼瓦斯の蒸發するなく、高臥閑に肉神を養ひ、最平和の間に能く天命を終へん、明哲身を保つ、の術此所に在り。

十一 玄武岩

となす。蓋し玄武岩たる純然たる火山の噴出物、其の初め溶岩の流液は火

西瀾

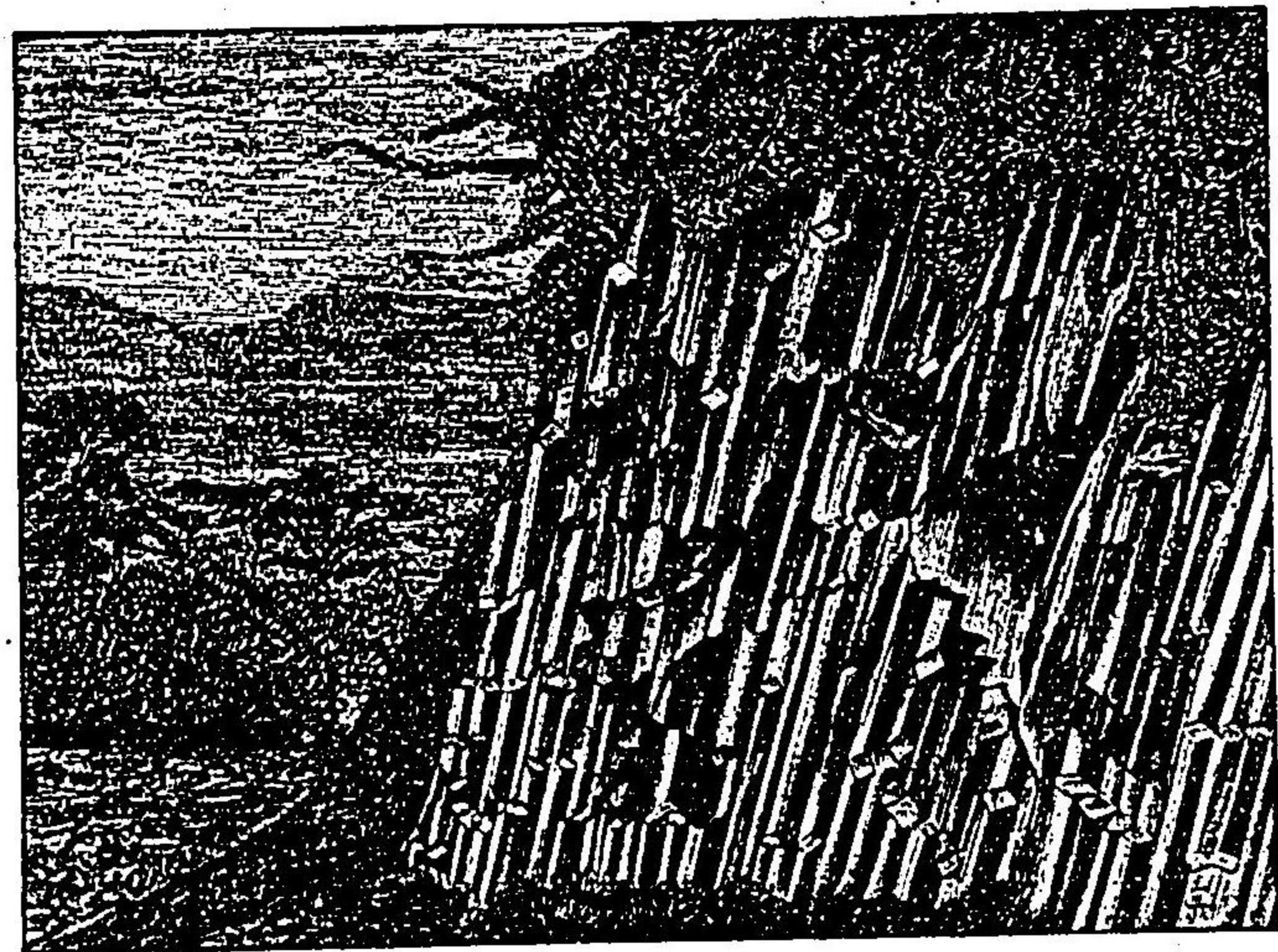
玄武岩

口より噴出せられ、一たび出で、空氣の寒冷なるに觸れ、忽ち其熱を放發し盡くし、冷却して固結す、其際、各岩の中心點に向ひ烈しく收縮するを以て、表面に龜裂を生じ、六角形を化成す、玄武岩の六角形を成すは此の故、其間冷却の度一様ならず時に不規律に固結するを以て、或は五角形を現はし、或は三角形を構造するも要するに稜角分明、井々然として排列するは、玄武岩皆然り。

英吉利の地誌を讀む者何人も、フンガル窟〔フンガル洞〕、巨漢ノ石道〔グランド・ベン・ストーン・ロード〕なるもの、在るを知り、之れが挿圖を覽るや、其のバザルト石なるもの、三角柱數千萬より湊成するを識り、獨り以爲らく造化の奇を弄する何ぞ一に茲に到るや、而して我邦竟に復た此の一奇なきか、日本の人大概は日本に此の如き奇觀あるなしと信ず、而かも其の多々存在するも、會僻隅陬境に在りて、輒ち視聞せざるを如何、材木嶽〔玄武岩〕を觀、絶嘆して曰く、

岩代〔材木嶽〕

己未十月、余自羽州還、過奥州下戸澤、觀所謂材木嶽、巖磊聳立、高數千仞、上摩霄漢、幅數百間、下有一溪、清冽如鏡、石根入水、深又不知其數千仞、日本には火山岩の多々なる事



石 木 材

(圖右上途ル至ニ湯戸波福ヲ出テ道陸ヲ入ニ湯泉温泉園野下)
尺二一至乃寸七六幅其し列駢に立直く高柱石の角六



峠打波山松ノ末

(上途ル到ニ町岡福ヲ曰町戸一國奥陸)
リセ成組リノ岩成水ノ質泥はく若、質砂、質灰山火く全は山
リわ松ノ越波 寸幾を般介に中土砂 リあ浪波に近傍上頂

越後「七不思議」
「田代ノ七ッ釜」

日本には火山岩の多々なる事

百六

蓋其全形一石壁立削成而有直拆者如掛棟梁有横裂者如列梅接所以
有材木之稱也余得其石片崩墜在地上者細觀之其質堅緻類豆州御影
石而石或四角或六角皆如琢磨成之者潭潭可以鑑焉甚乎天巧之奇至
此也巖固骨立無巔然石之崩墜者其迹欲然成罅而松生長其間蒼髯黛
色浸影溪流又有小鳥數百翱翔和鳴於巖樹中粧點以添其景致實天下
之奇觀也屬吏杉立某在側謂余曰某嘗游松島松島之勝冠天下其境彼
此異觀而今較論其勝不易優劣也余因慨然起歎曰彼名大顯而此則寥
寥無情頑石尙然况於人耶安政六年冬十月三日屬稿於福島客館

林 鶴 梁

と其の彼名大顯而此則寥寥なる所誰れか同感の情なからんや然れども
玄武岩を嘆稱する古來必ずしも寥寥たるにわらず越後「七不思議」の一な
る「田代ノ七ッ釜」は即ち此岩を神視するものにして所謂
魚沼郡の官驛十日町の南七里許り妻在庄ウヰンシヤの山中に田代といふ村あ
り村を去ること七八町七ッ釜といふ所あり里俗語云ツホ瀧七段ある

玄武石柱里俗灘石と稱す高サ二十尺乃至三十尺なるもの蓋々として排列する其の萬千條なるを知らず柱は七八寸乃至一尺毎に横に裂理あり、故に疊々として幾多平石を累積するが如く、一々拉し去らば人工を要せずして好個の建築用石材に應用を得維新以前此洞の奇勝を毀傷せざらん爲め石を此所より拉し去るを禁止す後禁弛み所在人民恣に拉し去りたるも今や復た之れを禁止せり。因に云ふ越後田代ノ七ッ釜は往時人民之れを神祝したるも今や所在の樹木を濫伐去大に風致を毀傷せしと宜しく但馬の玄武洞に倣ひ奇勝保存の計を畫すること可、真個に天巧の極。若し夫れ玄武岩の大觀に到りては九州北海岸の中央より少西に多々排列するもの是れにまて即ち筑前國の西隅志摩半島の西岸芥屋浦大門崎の巖洞より起り其の對岸肥前國神崎に所謂七ッ釜を鑿ち神崎より以西呼子港に到る間は海角島嶼到る處悉く此岩より形成せざるなく、玄海洋の濤浪怒激し來り或は之れを洗ひて懸崖を琢磨し或は之れを齧みて洞を鑿ち石門を開き規模の雄大壯宏なる「フッソガール」窟「巨漢」石道の比肩

玄武岩の大觀

筑前芥屋浦大門
崎の玄武洞

すべきにあらざ其の芥屋浦大門岬嶮絶百尺北西南の三面海に斗出し岬の全部皆な玄武岩或は直立し或は斜欹し或は横臥し其數千百萬條玄海萬頃の濤浪奔馬の如く轟雷の如く衝き迫り北東の岬崖を撃ちて飛瀉噴散雪花狼籍漸く岩の弱所を破壊し窟となり洞となるや洞頂より懸下せる岩柱は横に多々の裂理あるを以て輒ち重力を失ひ自から海中に墮落し了る而して濤浪は此の墮落せし岩塊を驅り來り驅り去り共に迫り擊ちて一層々に浸蝕力を増進し竟に此の大洞を鑿つ洞門の間口二間高サ四間南東に開き其内幽黯口より五十間は小艇を容るべく洞頂洞側洞底悉く五角六角の稜々たる石柱より編成し奇拔無比關東野人の紀錄に據る其の神崎の七ッ釜唐津町の西北凡三里全岬亦た玄武岩より編成し斗壁側立岬三又に分れ東又の基脚に七横洞を鑿つ所謂七ッ釜とは即ち是れ七洞各西々北に向ひ第一洞間口四間餘第二洞一間餘第三洞第四洞各一間半第五洞五間餘第六洞一間半第七洞七間餘各洞奥行或は三十間以上に及び皆な舟を容るべし西又の西側基脚に二洞あり駢列して内部

肥前神崎の「七
ッ釜」

那前神時より呼
子港に到る間の
玄武岩

陸中の「岩屋」

鹽原の「材木石」
富士川の「屏風
岩」

相通ず其の裏側に二三洞あり齊しく神工鬼斧の彫刻するに類す洞頂洞
側時に小懸泉の岩間に滴瀝するあり冷々として絃の如く琴に似人の神
氣を竦然たらしむ其の神崎より呼子港に到る間一里餘程懸崖斗壁峭然
として連續し崖や壁や皆な玄武岩特に供ノ岬呼子ノ鼻飛島の如き轟々
聳拔玄海の舟中より觀る者をして覺せず日本にもフンガル窟あり巨漢
ノ石道あり否是等より優るもの此所に在りぞ絶叫せしめん其他陸中の
「岩屋」陸中國南岩手郡西根村岩手山南麓網張温泉より瀧ノ上温泉に到る
途上平石川の北岸の如き亦た玄武岩の洞窟にして日本國中到る處此物
に乏しからず其の乏しからざるこそ火山國の本色なれ玄武洞の日本に
多在する固より然り何ぞ復た英國のフンガル窟巨漢ノ石道を説かんや
玄武岩と化合を異にするも等しく火山岩種に係るものにして稜角非々
たるものは粗面岩に鹽原温泉福渡戸の「材木石」挿畫に詳なりあり安山岩
に富士川右岸の「屏風岩」甲斐國岩淵より富士川の激流を舟下し松野村に
到らんとするや六角形の石柱屏立するもの是れなりあり阿仁銅山内の

阿仁の「柱石」

火山力の地味に
於ける功蹟

火山力の日本國
に於ける功蹟

「柱石」羽後國阿仁銅山内一ノ又川畔に露出すあり火山力の痛奇なる産物
日本國に多在する此の如し其の多在するは火山國の火山國たる所而か
も之れを知らず之れを認めず却て英國に在る如き少許の火山産物を羨
む是れ抑何等の事ず眞個に吾が火山岩の爲めに其の知己少きを惜む
客あり曰ふ火山力爆裂の多災殘酷なる得て具狀すべからず日本に火山
の普遍する太患の極なりと焉んぞ知んや火山力の爆裂あるなけんか太
地に凸凹なく起伏なく渾圓球上一面に平然克く一奇一美一壯觀を認め
ず上天茫茫後土冥々些の跌宕高邁なる者を看得ざることを唯だ此の火
山力の在るあり以て克く渾圓球上に奇を添へ美を装ひ壯觀を呈出す火
山力愈劇烈にして后土愈跌宕を恢弘益益益大にして益其の高邁を加倍
す時に日本の如き火山力にして劇烈猛大ならざらしめんか如何ぞ其の
景物の警拔秀俊なる此の如きあらんや火山力は日本の江山を洵美なら
しめたる主源因たり且つや此方は山嶽を去て到る處殊に高崇ならしめ
たれば山麓より絶頂に到るまで氣候の偏差多様に半熱帶温帶半寒帶寒

日本には火山岩の多々なる事

羅馬國と火山岩

日本には火山岩の多々なる事
百十二
帯を併有し、隨て生物の種類も亦た多様即ち氣候上、日本國の面積を加倍せしもの況んや、山嶽高崇なるを以て其の側面積自から廣大に實際亦た日本國の面積を加倍せしをや、火山力の日本を利益せしもの寧ろ量るべからず、何ぞ復た太思を説かんや。
客又た曰く、火山力有形上の功蹟、我れ謹みて命を聽く、獨り其の無形上なる悪感化を如何、歐米列國の如き皆な火山なきも、吾が日本獨り是れ在り、而して火山時々爆裂、人々爲めに悸々、居常寧所なきが如く、其の結果不知不諱の間に恒心定念の發達を殘賊する若干ぞと、嗚呼、客夫れ説くを止めよ、客歐米列國と曰ふ、能く歐米列國文明の淵源を知るか、火山岩の上に建ちたる羅馬國實に是れにわらずや、昔時兩ブルッス、兩シピオ、兩カト、チチエロ、チエサーレ(所謂シーザー)、ザルデル皆な火山岩の上に生産去、中古ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオ、コロムボ所謂新世界發見者コロムブス、サダナラ、アンヂエロ、ラーファエロ、ガリレオ齊しく火山岩の間に成長し、近世ガリバルデー、カザール共に火山岩の表に偉業を成就す、歐米列國

歐米文明の淵源
火山岩國に在り

火山、火山岩を
本國の本色にあらす

文明の淵源、果然、火山岩國に在り、吾が日本亦た火山岩國の天職として、東洋將來文明の淵源たらざるべからず、復た無形上の惡結果を云ふ勿れと、客唯々として退く。
嗚呼、造化の洪爐や、火山、火山岩を多々陶治して、日本人に贈賜す之れを、願せず之れを讚美せざるは、咄々日本人の本心にわらず。

此稿完了す、會し硯を洗ふ、硯は葡萄酒なる門前石より作る、是れ明治十八年の冬、馬關に求めたるもの、石亦た火山質、硯に保り、文字關外に三十尺の厚サとなして懸崖の上部に露出せるもの、硯を洗ふに當りて、當年曾遊の山水は恍として胸中に想起し來る、伏仰亦た幾箇の感慨、矧、川



島スタダア
(渚八凡南ノ島留助摩中ノ島列島千)
(る成りよ礁嶽の個三)
(し如の船三るせ帆滿はれす思遠)



(側南) 島留助摩
(中ノ島列島千)
(リナ詳二頁三十六第)

日本には火山岩の多々なる事

百十三



登山の氣風を興作すべし

山は太地の彩色を絢煥す

登山の氣風を興作すべし

山、其の平面世界より超絶する所多々。

(一) 山は太地の彩色を絢煥す

紅、白、玄、黄、青、緑は、平面世界に在りと雖も尋常之れを認め得花の紅月の白雲の玄沙の黄水の青木の緑何れの處よりか認め難からん而かも太地面の純粹無垢なる紫色藍靛色は山を仰望するにみらざるに竟に觀るべからず想ふ山の紫色藍靛色は細緻鮮麗加ふるに光澤燦然特に一雨洗ふが如く新霽水に似たり此際に縹緲せる凝黛堆藍は染具を以て此の如く調合せんとするも庸凡の頭腦を以て到底爲し得べからず太地の彩色は山

雲の美、奇、大は山を得て映發す

水の美、奇、大は山を得て映發す

を得て始めて絢煥す。

(二) 雲の美、奇、大は山を得て映發す

唐人巖を雲根と呼ぶ趣ある哉此種や雲山より起り山雲を得て愈美益奇一層々に大を添ふ若し夫れ雲縷々として藕絲の如く山の背腹を曳くや宛として神女の羅裳を織るに似朝暎夕陽會之れと映發して純紅火の如く羅裳桃花色に染めたる倏忽にして雲來往迅速澎湃として天を捲き百道狂馳山其間より或は湧き或は没し或は浮び或は沈み汎々として大海上の島嶼と化成す頃刻にして空氣の運動靜穩となるや雲は漸く下降して山腹に縹繞し其上より絶頂の峭然孤尊するを觀る要するに山雲を得雲山を待ち相互に愈美益奇一層々に大を映發す。

(三) 水の美、奇、大は山を得て大造す

水山に在りて愈美益奇平面世界に在りて看得ざる水の現象は山に在りてのみ能く認め得水の最晶明なる者最平和なる者最藍靛なる者は山中の湖之れを代表し水の最激烈なる者は山蔭の瀑布之れを代表し水の

登山の氣風を興作すべし

最清冽なる者最可憐なる者は山間の溪水之れを代表す凡そ水の睡り怒り咲ふの狀貌は山に入らずんば竟に觀るべからず加之ならず巖は水を承けて緑潤となり水に溢まれて奇態怪狀を呈出す水の美水の奇は山を得て茲に大造し巖の美巖の奇は水を待ちて始めて始めて完成す

山中の花
木は蒙健
磊落なり

(四) 山中の花木は蒙健磊落なり

平面世界に在る花木は自から平面世界の感化を受け且つ人間に成長するを以て爲めに蒙健磊落ならず畢竟艶を競ひ媚を呈するもの往々然り山中に在る花木に到りては然らず自然の儘に成長し人間外に不羈獨立するが上に時に風餐雨虐或は土壤を剝かれ或は巖石に壓抑せられ而かも悍然勇往一層々に不羈獨立の素養を助長し來る要するに山中の花木は蒙健なり磊落なり氣骨あり況んや花は山に開きて愈鮮かに木は山に長じて益蒼翠秀潤を添ふ花木の妙所を太悟せんと欲せば山に入らずんば竟に得ず

澤元世の「登
富士山記」

登富士山記

維昔地湧而山出焉遂滙爲淡海屹者富士淡海之大千里富士跨四國山高四十里海之最深處耶自沙走村至回馬夷陵十有二里阪有衙門過此可三里途窮北折而六里抵中宮祠登者受杖於此雜樹茂草鬱然森布是爲山腰崕蹊遞迤以登又十里許曰沙篩坂自坂已上所謂四十里削成而四方者也望之兀然壁峭無草樹無正路沙石處處見山骨可踰者不可踰者羊腸萬折但守先導之武以轉趾鬆脆之石或泐而碎於脚底步步輪退將偃而杖扶焉仰之三峯在顛上一眺而可至矣余神先飛足之不進十弓幾十里爾日夕入石室而息導者出纒衣以授服時維七月尙寒於十月矣余適出室而瞰雲間燈々然正是玉兔浴海之時也不覺大呼稱快須臾三竿世界變爲銀地是不知白雲停而不動但見積素三尺萬有爲白玉已而此山孤立于大虛真如一朶芙蓉湧出大銀海中也豈又有如是觀哉又登五六里愈寒愈凝積雪耳乃宿第七合之室合猶言級也四十里爲一升十折爲合每合置室室大丈許高五六尺板屋四柱磚石固封所置遠近倚巖

登山の氣風を興作すべし

勢之可倚登者以息以宿以辟風雨云夜半鉢畢乃發山愈壁而曲愈逼前者後者頂踵不能尺也八合九合峻極恂悽匍匐且登且息呼吸將通帝坐耶悚然疑立顧曰我無仙骨韓子之哭不可謂也反顧東方初如發丹竈比至絕頂丹流不知幾千萬里非烟非雲蓋海影與潁氣相映也喘定神王振衣瞪然以縱觀焉意亦何壯乃入室以憩頂上之室十餘連簷皆小於路傍者記曰貞觀十一年最頂建祠今唯存衙門導者告報曰曦車將出温谷急起望之紫赤之中潁氣輝々金縷萬條倒射余衣熟脉之輪轉如飛金縷莽亂眼睛將熏質一大奇觀也漸升大如盤盂而下界猶且朧明縹緲之際海色淡黃始知古人登岱詩有黃海句遂行八葉此山一名芙蓉故有此稱三峯隆起正中陷爲池乃傍池而行也相傳初有水而竹木蔭蔽寶永殆發之後水涸今唯窟窟而已約徑二十餘丈深數十仞一覽意盡三峯最高爲中臺又名雷電岩不可攀也岩下南轉而行數百步巖巖相連又不可攀者名曰駒峯有石窟置金馬余詫曰聖德太子騎甲斐驪始登此山故事歟不然陸遜所得巴滇馬類已守者茫莫以答焉懸梯以登下則銚子口也池缺而

沙流故名東南之角寶永峯在脚下寶永年陽焰噴發雨沙石於千里外歇則山之瘴見云俯臨咫尺傍有發焰之穴問之曰距此六里險甚未嘗聞有至者以沮人意故不果往也西南絕險有劍峯手捫石坎而踵半外垂者二十餘步過此平坦踏凍雪而行嗚乎萬古雪尙存耶身在水晶宮裏詎知人間苦熱池邊處々置金人又搆小堂堂側有玉井僅々盆大不竭不溢人以爲靈乃破堅冰而飲冽甚寒氣徹骨凡骨竟不得久留欲下復躊躇四面猶且銀海唯甲之二山見其顛如島嶼然問之不知蓋聞黑駒白嶺之椒賦富士於正南是耶下而二三合雲間覬函根之湖尙在扉屨之間下路險急足之使目不遑應接時一回首田塍雜衆山如線者酒川導出所齋草鞋以授厚可二寸大如盤着之似板矣若或一蹶挺走數十丈欲止不止僵而後止六合已下細路一條直下十有餘里曰沙拂坂即沙篩南也植杖以瞰前行人一瞬十里忽如嬰兒杳如鏡中之象疾於走盤之丸比下回馬坂日正晡時適昨躋坂之時也搔頭回顧三峰峻嶒而立天表未嘗不悅然自失也聞之群嶽之長爲俗宗封者七十以爲至極其記云自下至顛凡四十里日觀

登山の氣風を興作すべし

百二十

峯觀日於鸞鳴此山中宮而上四十里。眺瀕於半夜。何況容貌絕美。其孰企及。蓋天地間。獨我 天皇。萬古一姓。莫有革命者。是其無疆之鎮。亦有與于茲哉。特立于天下。而無比倫。不亦宜乎。

澤 元 愷

登山の氣風を興作すべし

(一) 登山の氣風を興作すべし

樓に登りて下瞰す。猶ほ且つ街上來往の人を藐視するの概あり。東京愛宕山に登りて四望す。猶ほ且つ廣遠の氣象胸中より勃發するを覺ゆ。何ぞ況んや嵯峨天に挿むの高山に登るをや。山に彩色の絢煥あり。雲の美雲の奇雲の大あり。水の美。水の奇あり。花木の豪健磊落なるあり。萬象の變幻や。此の如く山を得て大造し。山を待ちて映發するのみならず。其の最絶頂に登りて下瞰せば。雲煙脚底に起り。其下より平面世界の形勢は。君に向ひて長揖し來り。悉く之れを掌上に弄し得。君是に到りて人間の物にあらざ。宛然天上に在るが如く。若くは地球以外の惑星より。此の惑星を眺臨するに似。眞個に胸宇を宏恢し。意氣を高邁ならしめん。加ふるに山の組織の壯絶な

るを頓悟し。山の形体の完美なるを大覺し。坐るに太氣の清新洗ふが如き處に長嘯し。兼て四面の閒然寂靜なるに。潜思默想せば。君が頭腦は神となり。聖となり。自から靈慧の煥發するを知る。況んや山に登る愈。高ければ。愈。困難に益。登れば益。危險に愈。益。萬象の變幻に逢遭して。愈。益。快樂の度を加倍す。之れを要するに。山は自然界の最も興味ある者。最も豪健なる者。最も高潔なる者。最も神聖なる者。登山の氣風興作せざるべからず。大に興作せざるべからず。

學校教員に
申言す

學校教員たる者。學生生徒の間に。登山の氣風を大に興作すること。力めざるべからず。其の學生生徒に作文の品題を課する。多く登山の記事を以てせんことを要す。

登山の氣風を興作すべし

百二十一

(三) 器

登山の際携帶すべき切要必須の器具たる銃一挺、小刀一張、望遠鏡一口、燧木(水半なるもの)、油紙(山中にて物を裹むに最も切要)、麻繩(懸崖絶壁を下る際に用ゆ)、手帳及び鉛筆なりとす。其他専門學家なりせば、地學家は岩石採取用の鎚等、動物學家は蟲捕り網、玻璃塔、酒精等、植物學家は植物採取用の錫函、植物壓乾器及び用紙等、物理學家は風雨計、測量器械等を携帶する、固より其所なり。

準備了る、乃ち登山せんとせば、須らく火山岩の山嶽ならんことを要す。第六十三頁より第九十八頁の間に詳なり。火山岩の山嶽に次ぎて最も高邁爽快なるは、

(三) 花崗岩の山嶽

是れなり。想ふ日本の山嶽中、火山岩に次ぎ高邁なるは花崗岩に屬し。秩父岩より組成せる甲斐の白根山系を除く、三千米突以上なる甲斐の駒ヶ嶽を始め、殆んど三千米突に近き越中の大蓮華山、甲斐の鳳凰山等、齊しく花

花崗岩の山嶽

日本の山嶽中、火山岩に次ぎて高邁なるもの

花崗岩、片麻岩の本色

花崗岩、片麻岩の有形的結果と無形的感化

崗岩に係り、其他二千米突以上の者に到りては寧ろ列擧するに違わらず。加ふるに日本の地質たる花崗岩の普遍する、火山岩と殆んど比肩し、其の同質なる片麻岩亦た多在し。日本の景象をして一層々の豪爽、雄快を添へしむ。蓋し花崗岩、片麻岩の本色は堅硬なる所、純潔なる所、色澤の燦然たる所、實に是れ其の堅牢なるは堂々たる大丈夫漢の如く、昂然として幾多岩石中に覇を稱し來り、其の組織亦た雜多物を交へず、簡單純潔、此間の流水も亦た澄澈、白練を布くに似、加ふるに岩質堅硬なるを以て軟弱なる植物は其上に蔓生し得ず、太氣雨雲光線に最も曝白するを以て其の表面常に清新色澤燦然、四面に煥發す。特に酸化鐵を多量に包含するものに到りては、其色淡紅、會夕陽殘照の之れに掩映するや、忽ちにして桃花撩亂、絶愛すべきの觀あり。之れを要するに日本の地質たる花崗石、片麻岩到る處に普遍し、中國の大概、本州の中部、奥羽の各地皆な此岩より成り、其の結果は江山の洵美、流水の澄澈、太氣の清爽、地盤の堅硬、土壤の淨潔、微菌發達の豫防となり、無形上亦た其の所在、民人の氣風を感化する所多し。蓋し伊太利は

登山の氣風を興作すべし

伊太利人ミ山嶽

九州の花崗岩

歐羅巴洲中、山水明媚の區と稱す、而かも其の地質たる花崗岩、片麻岩極めて少く、特に美術の淵藪たるミラノ、フレンゼ(所謂フロレンス)の四周に到りては、大概白黯蒼なる石灰岩に係り、ロムバルデヤ州の如き古來石灰の産出を以て名ある處、太陽の光線之れに反映するや、最も凄凉楚愴なりと、是れ伊太利の文人畫師が古往今來、山嶽に對しては常に悒鬱憂なる觀念を以て待ちたる所因、ダンテ、造化の景象を賦する皆な神に入る、獨り山嶽に到りては厭世的の觀念を以てす、而かも若し夫れ伊太利の地質にして花崗岩、片麻岩多からんか、國の地勢上、流水の浸蝕も激烈に引きて其の詩文繪畫の山嶽を描寫せるもの必ずや豪爽雄快を極めたるならん、吾が日本、火山岩に加ふるに花崗岩、片麻岩を以てす、造化の厚贖豈に嘆謝せずして可ならんや(第百六十四頁、花崗岩に於ける浸蝕と参照すべし)。

(一) 九州の花崗岩

九州の土たる、花崗岩は、火山岩に比較せば普遍せず、唯だ南方には大隅國

領巾振山

四國の花崗岩

屋久島の全半、佐多岬の三分一(北西部及び南端一片を除く)、南大隅郡の半島と、北方には筑前の南部筑前肥前の境上に曝白せるのみ、片麻岩も亦た僅かに豊後國杵築町の北、竹田町より大分町に到る街道に露出せるのみ、夫の想夫の情凝りて化成せる領巾振山宜べなり、其の堅緻にして淡紅色なる花崗岩より構造せるを。

(二) 四國の花崗岩

四國亦た花崗岩多、在せず、唯だ西南方には伊豫國宇和島町背部の諸山嶽、土佐國踰陀、一切の二岬、一切岬外の諸島嶼と、北方には伊豫國松山市北の半島、讃岐阿波の境上、讃岐國より北出せる四岬(三崎、觀音崎、大串崎、虎ヶ鼻)に露出せるのみ、土佐南部の諸島嶼たる、四國の花崗岩山脈に連り、悉く花崗岩の太平洋上に峭然矗立するもの、乃ち山嶽にあらざるも探討せんか。

土佐國

登山の氣風を興作すべし

土佐國多郡の西南端一切岬(花崗岩)の四南に群在す。諸島花崗岩より成り、太平洋より黒潮來り、迫り海岸は峭。相島一切岬の南端と距る五町、島の南端は北緯三十二度四十四分、在り、周囲二十八町三十間、海抜凡二百二十米、東及び北二面は傾斜し、船舶と泊すべし、柏島港あり、南及び西二面は斷崖懸崖、潮水花崗岩壁と蓋みて壯觀、柏島港の一祠堂に巨大なる榕樹あり、島は土佐海漁業の中心場にして、人口七百二十九あり、飲料水に乏し。

瀬戸内の
花崗岩

登山の氣風を興作すべし

(四) 瀬戸内の花崗岩

瀬戸内海馬關より淡路島に到る、瑠璃一碧、大小の島嶼星羅點接す。蓋し今の中國、四國たる、太古相聯絡したるも、海水の浸蝕、地下の變遷に因り、分離して此所に瀬戸内なる多島海を化成せしもの、而して這般の島嶼たる、淡路島の北半全部を始め、十中の八九は花崗岩より構造せらる。若し夫れ

春といへば霞にけりなきのふまで

俊惠法師

なみまに見えし淡路しまやま

の候となるや、縦令平常太氣の乾燥せるも、猶ほ且つ淡靄は諸島の頂上若くは中腹を籠め、燕子新に來りて、恰かも

うす墨にかく玉つさと見ゆるかな

津守國基

かすめる空にかへるかりかね

を見るや、島裡の麥苗漸く秀で、而して島の地積素と些少、爲めに岸崖より直ちに圃隴を作すを以て、麥浪は海浪と瀾漫して相接し、農舍疊屋其間に突元し、桃花菜花之れを繞り、舟は錦繡圖畫の中を行くが如し。既にして

瀬戸内の夏

瀬戸内の秋

小豆島寒霞溪

瀬戸内の冬

「世界の絶勝」

澤元燈の「汎海紀行」

東南風の季節となるも、風は四國中央の山系に障屏せられ、其の餘力のみ微かに到り、海面細く紋を生じて、氷の如き一輪此間に躍り、花崗岩に反映して更に皎潔を増す、會、漁船を走らして此間を過ぐ、月色の大觀此の如きもの復た他處に需むべけんや、漸くにして秋氣長空に横はり、風霜花崗岩骨を砒すや、楓樹は錦を溪間に織り、島際の風煙染むるに似特に小豆島寒霞溪原名神懸の如き、紅葉は花崗岩、火山岩の表に錯錯し、其勝克く丹青も盡く能はず、實に諸島に冠絶す。秋去り、冬來り、六花浙瀝として飛ぶや、雪白は花崗岩の白と映發し、諸島皆な體々、風趣更に一層春夏秋冬、其の景象此の如く妙、而して舟を此間に行らんか、海、島嶼に圍繞せられ、宛として湖に似、忽ち窮まるが如くして、島轉じ、海開き、復た窮りて湖を作り、復た開きて舟を通ず、變化百回、宜べなり、歐米人の激賞して「世界の絶勝」を呼ぶや。

初九舢舨發室津、萬里一碧、島嶼磊落、如瑠璃盤上列壁、其名可辨者、吉美島、鴉島、三賢大高、兄長其間、爲繪島、爲小豆島、海岸金崎之濱、與毛振相抗、室祠、卓立其灣中、而岸上民屋、千數楹比、亦海路之一勝也、然地以包海、而登山の氣風を興作すべし

山環其外。是以無處立錐耳。我船俄頃數十里。經奈波抵石神。石神一名坂越。音謬而字轉焉。海島之名不可辨者。皆此類。石神一聚落也。過此有二嶼。曰黑島。曰藁島。隣石神曰尾崎之濱。又五六里。山足入海。曰赤穗岬。有祠。乃古所謂伊和都媛也。赤穗城在目下。距海濱可二里矣。同僚輩々譚大石。其雄復讐事。因問余以大宰純四十六士論。欲辯難爲言。乃呼酒觴之。呵水手以撈船。又行半更。今依六十里。播磨往。而備前來。經大多府。水曾泊。筏洲。鼠島。而至牛窓。門。此亦一大泊所也。相傳。神功皇后征三韓。水牛出而護御。故有此名也。本又作宇志。蓋好事之誕耳。間門一作窓。自國歌而轉譌耳。自室至牛窓。海路六十餘里。鍼在未申交。是日天朝。乃上柁樓。以望海面。蒼々多島嶼。已不計其麗。詎辨其名。而山無奇峯。水唯蕩雲。沃日而已。段令足觀。棹手挖工。鳥能對。但見豆島之陂陀。獨偃蹇其間耳。是夕應泊牛窓。而長綯秋風。當留不留。又行半更。經迷崎。犬子島。而栖于出崎之洲。夜將三更。我船啣々作聲。起而睹之。水手倉惶。挽錨復進。一發十里。抵手島。而留。手島亦屬備前。翌日微雨。食時發糧。過上臈二島。日企。則讚岐與備兩地突出。將相倚。

未倚者也。望之其間十數里。作聲可答。遙望五劍之山。不待問而知之。吾友伯和嘗游此。而極其椒。爲余言之。奇險可想。屋島之山。連窓一面。一轉爲象頭山。其岸則志波高松。昔者平氏諸盛之困於源。豫州人與骨。今已矣哉。近則大槌小槌。相對爲門。俗呼龍宮門。門前篠島松嶼。相續點々者。鹽飽之七嶼。自餘小島。布置其間。而飯盛象頭諸山。隱見無時。須臾改觀。不可端倪也。蓋聞鹽飽之島。衍沃千里。居民充塞。幾爲邦矣。而租調壹是庸。以格軍於官船矣。余所乘水手。亦皆島民也。過鹽飽則藤戶口。昔時佐盛綱。單騎絕海之處也。子岳常稱吾家先登。憾不俱。船使其虛誇也。其地昔爲島嶼。今則小山在田疇之間。桑田之爲海。何足深怪。日暮至下津伊。此亦室廬千數。枕岸臨水。青帘遙相望。豈亦當爐待游客耶。欲舍船而往。有禁。乃呼漁舟。以買鮮。足以一醉矣。十一日。風不順。而潮逆。餘艘相聚一處。有所相議耶。日飯啣軋聲。急。忽破余睡。起登飛盧。衆船亂行爭先。其復何役。余則尋討洲名而不止。恐爲人所厭。櫃石辨天。大小提島所經。凡二十里。乃泊亨島。十二又雨。食時過水島。從此以西。隸備中。阿部侯治城在近。司船帥連舫數十隻。以挽我船。又

專使有遺贈焉。濱海之邦咸然。是日余與焉。故記。遂過大杓。小杓。嘉納。浮蕨。舟士多加佐。奈諸島。又行半更。抵白石迫門。海之隘口。是謂迫門。可泊之處。是謂湊門。大抵白石峽已東。島嶼多泊所。出峽則海勢鴻濬。島罕而大。距白石十八里。有鞞湊門。鞞音獨。木二合。本射具之稱。蓋取其狀也。亦一通邑。古來名于酒。故亦有猷笑之賦云。距此十許里。有泊曰阿斧。兔不知何謂。望之嵐烟簇々。紫翠當反照。稍近。怪岩特起于沙際。其上構一小堂。廊廡如尾。又似覆斗。一奇也。堂置觀音。寺曰盤登。亦復徒望而過。十三別色。正東風急。船行駛快。經田島。因島。而風微轉。則百千白馬奔騰而來。時激則飛入座。船上咸臥。余尙被中問曰。此何地方。乃曰。此名道士峽。相傳豐關白征朝鮮。船停于此。有一道士。上舶獻海物而去。公使人尾之。不得。故有此名。余曰。公蹂躪三韓。其勢覆篋。堂々大國爲之鼎沸。勇哉。鬼神陰助。或然也。臥而不動。船抵蒲刈。告曰。昔者平相國。每詣嚴島祠。患海路迂曲。遂破山以通焉。名曰御門。余遽々起而望。罵曰。稍公汝。勸我耶。段使相國得寵於天女。奚渠得然。然亦說之。盜乃威武所致爾。船泊加諸。早起開雀窓。朝暾映發。風波不驚。西南伊豫。

東北豐前。佐田。神與左。巖關。奇勢遙相迎。超此大西洋也。紫淵瀟瀟。觀愈壯。而意不復在洲嶼之際。行可半更。其濱曰仙巴泊。仙巴。周防之望也。山足浸海之處。亦名云爾。近此大小硫黃島。相傳島中有王童墓。俗說至此。拙窮日沒。船抵上關。暗昧不詳。地力唯兩山相對作門。既入門。兩岸喧填。問之一大馬頭。昔時置關之處也。海面燦々。月出兩山之間。時維中秋。四望無雲。一行船上。競起開窓。余亦呼酒而灑。詩。乃得小律三首。拙速誇人。爲可恥耳。望後一日。距關二更。有泊曰笠戶。不至笠戶。沿管松而行。一島不甚大。沙嘴甚長。松樹森列。蒼翠襲人。漸遠。明爽淡々。真如畫。亦憾少畫手耳。其它地不同。而觀則不異。無可記者。是夕泊母哥島。翌下椀本山。本山。陶氏故墟也。陶晴賢殺其君大內子。而一旦霸于西陲。遂爲毛利氏所殺于嚴島矣。比抵長府。日將下春。維昔仲哀。天皇行在所。今猶有原廟。所謂豐浦宮。神功后所築。長堤距此不遠。已抵田浦。諸疾行人。幡幟相望。舟船魚貫而進。是日余爲之小相。無違回首極浦。日已浴海。赤馬關。早友祠。皆暗裡過。遂泊安徳天皇狩地。壽永之役。乘輿沒海。變亂至此。而極翌十八。望門司關。一詩吊古戰。登山の氣風を興作すべし

登山の氣風を興作すべし
 百三十六
 場而過、抵小倉下船、驛吏街長、亦復廢至、以待蕭旆之臨、自茲事務復紛然、
 蕭旆之所指、如風偃之草、諸侯供給益盛、雖則盛矣、俗我亦已甚、文之余所
 不欲也、而九州之地、山咸奇、水咸明、民俗淳朴、頗存古風、自發江戶、閱月兩
 回、八月十五日、日出至長崎鎮府。
 澤 元 愷

(參考)

神戸港より長崎港に到る海上漕程

至兵庫	二漕	至明石海峡	一二漕	至與島	七三漕
至牛島	七五漕半	至中島	一四三漕	至由利島	一五四漕
至屋島	一七五漕	至姫島	一九八漕	至馬關	二三九漕
至六連島	二四八漕	至白島	二五七漕	至大島	二七五漕
至烏帽子島	三〇〇漕	至生月島	三三四漕	至中ノ島	三四六漕
至相摸岩	三七一漕	至長崎港	三八七漕		

瀬戸内の紀事、唯だ島嶼及び海上のみに係る、固より「登山の氣風を興作すべし」の項中に關せず、唯だ諸島嶼
 たる、中國、四國の花崗岩帯の間に點綴し、其の大抵は花崗岩より構成され、紀事順序の便宜上暫く
 之れを此間に挿入す。

神戸港より
 長崎港に到
 る海上漕程

畿内の花
 崗岩

(五) 畿内の花崗岩

五畿の地火山岩特に少々花崗岩之れに代り處々に延縁す、即ち攝津の西
 南部東北部河内大和山城の境上山城大和伊賀近江の境上山城近江の境
 上皆な花崗岩に係る、其間の山嶽列擧すべし。

攝津國の

西南部

攝津西南部の花崗
 岩は大坂灣の北岸
 に帯の如く延縁す
 即ち四は攝津の境
 上より起り、矢野郡
 郡と斜に貫き東北
 走して漸く膨大と
 なり、宛原郡に入り
 麻耶山を中心とし
 更に東北走して有
 馬郡の南境に入り
 武庫郡の西北部に
 達して、茲に盛く
 此の花崗岩帯と海
 灣の間に須磨、兵
 庫、神戶、住吉、御
 影あり、此等の市邑
 は細紛せる花崗岩
 の化成せし地層上
 に在ると以て百餘
 の景氣自づから潔清

鐵拂山 海拔二二六米突、須磨停車場の西北、巖石落し、一ノ谷は
 此所に在り、皆な花崗岩、致盛の墓の石塔亦た花崗岩に反映せし當年を
 の奇蹟せしは此邊に在り、相ひ起す白旗の花崗岩に反映せし當年を
 再度山 海拔四五三米突、一名多々都山、神戸市の北北西、山に大
 龍寺、弘法龍、絲織龍、赤松氏の城墟あり、小徑を北に登り、絶頂に
 達せば、神戸、兵庫の市街、大坂灣と下瞰し、船舶の來往掌中に弄し得
 麻耶山 海拔六九四米突、神戸市三ノ宮停車場の東北、凡一里二十
 町、布引麓より山路十八町、石階數百級と登れば、初稗天上寺あり、麻
 耶夫人を祀る、寺より更に登る百二十米突にして、絶頂に達す、北に
 丹波の巡山、東に西ノ宮、尼崎の市街、南に大坂灣、和泉、紀伊の群
 嶺、南西に神戸の市街、和野岬、鐵拂山、淡路島と望み、眼界壯宏
 六甲山 海拔九二七米突、一名武庫山、麻耶山の東北、住吉停車場
 と西ノ宮停車場の中間より登る、山に白山神社あり、四ノ峯に石の
 小祠あり、土俗「石ノ寶殿」と稱す、絶頂よりの眺望は、麻耶山に優
 過す、此の山嶽は大坂灣を障屏し、海風の携帶せる水蒸氣を凝結する
 と以て、「武庫山に雲つぎ雲る千鳥帯」(團團)の句、自づから理學的なり
 奥山 海拔三〇七米突、西ノ宮町の北北西、山は花崗岩より成るも、
 觀音堂の在る少片の處のみは火山岩に係る、大井、九想、乾、鳴の四
 瀧、花崗岩を穿ち來り、廣田神社、日向岩、辨財天、影向岩、白龍石は花崗岩
 其他高尾山(海拔二八三米突、須磨の北)、高取山(海拔三三〇米突)

登山の氣風を興作すべし

攝津國の東北部

攝津能勢郡の東、南、北、西、丹波國に入るもの

河内の東境

河内、大和、山城の境上に花崗岩帯を伸張し、南方に伸張し、河内、大和の境上に沿ひて

生駒山以南の片麻岩

河内、大和、山城境上の花崗岩帯は、南方に伸張し、河内、大和の境上に沿ひて延縁し、古歌に顯著なる生駒山以南は片麻岩となり、聖徳太子大捷の處たる信貴山を超え、大和川を渡るや、一塊の火山岩蟠屈するも、此所より西せば片麻岩復た連り、葛城山塊奔馬の如く南馳し、楠公勤王の鮮血を澁ぎたる金剛山に曳き去る、日本歴史の活劇多く此の片麻岩上に演せらる、即ち

生駒山

河内河内郡の東境、大和の西境に跨る、海抜六四〇米突、山頂嶺峻ならず、岩石大樹少し、真道法師の所謂「わたのへ」大江の岸にやどりして雲井に見ゆる生駒山哉、此山

信貴山

大和平群郡の西南境より河内高安、大縣二郡に跨る、全山片麻岩に成る、海抜三六〇米突、大坂鐵道八尾停車場の東五十町、王子停車場の西

二上山

河内石川郡の東境より大和葛下郡の北境に跨る、北境に火山岩あり、海抜五七五米突、山は男嶽、女嶽の二峰に分る、二峯の間に當麻街

葛城山

河内石川郡の東境より大和葛下郡の北境に跨る、西境に蟠屈す、奈良町より西南位に空淵、雲霧瀧、積尾瀧あり、山中に藥船神社あり、一尊船四十八あり

金剛山

河内石川郡の東境より大和葛下郡の北境に跨る、南境に蟠屈す、此山に到るもの、海抜二二六米突

山城、大和、近江、伊賀境上の花崗岩塊

山城、大和、近江、伊賀の境上に蟠屈せる花崗岩塊は、山城相樂郡の殆んど全部、大和添上郡の一片、近江滋賀郡の一片、栗太、甲賀二郡の全半、伊賀阿拜郡の全半に延縁し、其間近江に袴越山、笹間ヶ嶽(海抜四八〇米突)、不動山(海抜六一四米突)、矢筈山(海抜六三三米突)、鶏冠山(海抜五三九米突)、阿星山(海抜七四九米突)あり、近江、伊賀の境上に龍王山(海抜五〇八米突)、笹ヶ嶽(海抜八一米突)、高畑山(海抜七〇六米突)ありと雖も、要するに顯著なるは、

山城相樂郡木津川の上流笠置村(海抜六二六米突)に在り笠置村は片麻岩上に在り、雖も山城木津川の上流笠置村、若くは伊賀上野町より西の方島ヶ原村を經、山城相樂郡に入り、大河原村より笠置村に到り登り、即ち笠置村より直ちに木津川を南に渡り、山の西北兩より登り、十町に到り、所謂是助次郎重龍大石相對峙する處、第一城門と稱す、大平郡に

登山の氣風を興作すべし

百四十

笠置山

花崗岩なり。海抜三七一メートル。山は後醍醐天皇の處にして今は今と距離正に五百六十三年前に在り

「地獄谷」は奈良般若寺僧兵の巨石を以て城に投下たる處。薬師石、繩劬石あり。高サ各一丈一丈餘。其下空濶數人並び行くべし。門の左に「胎内ク」あり。門を出れば「大鼓石」あり。大鼓石は「四明山」の鳩る「不動岩」に平等岩あり。平等岩は其面坦平。挿石あり。挿石に登臨するに容易に而かも花崗岩の怪奇を呈出するは此山に在り

笠置花崗岩塊の南に在る片麻岩

飯道寺山

近江甲賀郡の中央。海抜七二九米突。水口驛の西南一里餘。飯道神社あり。老杉鬱蒼す

笠置の花崗岩塊は南の方直ちに片麻岩と相連り南方東方に大に膨脹して大和國の東半伊賀國の南半伊勢國の西南部に延縁し其間大山巨嶺亦多々

山城近江の境上に延縁する花崗岩塊は琵琶湖の西岸を障屏す平安城の壯麗を添へ琵琶湖の美を倍すもの實に是れ即ち

山城、近江境上の花崗岩塊

比叡山

山城愛宕郡より近江滋賀郡に跨る。天台山、合嶽、長嶽、北嶽、都宮、我立、柳の稱あり。海抜八二五米突

比良嶽

近江滋賀郡の西北。海抜一三三〇米突。大津町より絶頂まで六里二十餘町、山麓八里戸村より一里十五町、近江八景中「比良ノ暮雲」は是れ、頂よりは琵琶湖と下瞰し絶佳

竹生島

近江琵琶湖北部の早崎村より五十町。全島花崗岩に成る。琵琶湖上の小蒸氣船時々寄島することあり。雖も、特に到らんと欲せば、長瀬町より日本船を賃し渡航し得。島に辨財天の社あり。花崗岩を湖面より噴出し、島上老樹鬱蒼、黄昏千の金魚、此間に宿せん爲め歸來する所奇觀たり。其他奇觀多し。眺望亦佳

湖東の花崗岩

(六) 湖東の花崗岩

琵琶湖東近江美濃の境上國見嶽海拔八一三米突以北に花崗岩塊あり。國見嶽花崗岩塊の南秩父岩を隔て、近江伊勢の境上に沿ひ南走せる一帯の花崗岩延縁す。即ち龍ヶ嶽海拔一、一八二米突、編笠嶽海拔一、〇一六米突、釋迦ヶ嶽海拔一、一〇五米突、千草越海拔七七二米突、御在所山海拔一、一五三米突、鎌ヶ嶽海拔一、二五四米突、入道ヶ嶽海拔九八一米突、仙ヶ嶽海拔一、〇九三米突、鈴鹿峠海拔三七三米突、高畑山海拔八五一米突等あり。此帯の北部に水晶、黄玉、柘榴石を産出する所あり。東部に二温泉場あり。南部に千載集の所謂ふるまゝに跡たぬれはす。か山雪こそ關の戸さしなり。これ内大臣てふ鈴鹿關の故趾あり。

(七) 中部日本の花崗岩

花崗岩の大塊富士山、火山区の西に曳き、中部日本に蟠屈す。即ち北は大約

中部日本の花崗岩

登山の氣風を興作すべし

百四十一

海道の眞風景
たる「白沙青
松」は参河に
入り始めて眺
め得

岡崎以北の花
崗石の將來

登山の氣風を興作すべし

百四十四

崗岩に係り、其の表面の風化水蝕せしものは、分離して白種雲母片となり、石英粒とあり、玻璃狀なるもの、珠玉狀なるもの、夕陽殘照と相映じ、茲に眞成の「白沙」を成し、青松共間に點綴して初めて所謂「白沙青松」の風景を現じ來る。湘南、駿遠州の風景や實は灰沙青松たり、海道の眞風景たる「白沙青松」は、参河の南部、西部に到らざれば能く眺闕すべからず。

関得世途險似山、身歸郷國心自閑、松青沙白参州路、人在平生夢寐間。

岡崎以北の花崗石南部の花崗石は多量に雲母を包含して結晶す、故に頁石材をなさず、細粒若くは中粒にして且つ耐火性なるもの多し、是れ他州に甚だ見ざる所、且つ在來石材を伐り出すに盤石よりするの風あり、是れ最も可異日建築物に、道路の修築に、築港に、鐵道敷設に、其の事業全國に隆起するに當り、且つ相模石、伊豆石の如き安山岩質、凝灰岩質の濕氣深き日本國には、竟に建築石材となすに足らざるを

知了するの日に到らば、参河の石材は無限の取路を發見せん、唯だ今日に當りて最も稽查すべきは運搬賃に在り、運搬賃にして低廉なるを得ば、予は確として豫言す、日本將來の建築石材は、常陸、参河二州産のものを以て中部日本に覇を稱せんと、蓋し今日に到るまで相模石、伊豆石の東京に覇を稱したるは、(一)安山岩質、凝灰岩質なるを以て、石伐り器械の不完全なりし時代に在りても容易に之れを伐り出し得たる事、(二)道路、鐵道等の便なき運搬の不完全なる時代に在りても、其の産地の東京附近に在りたるを以て、容易に之れを運搬し得たる事、(三)在來建築上に石材を多用せざりしを以て、花崗石の如き堅硬なるものを多く伐り出すも割の合はざりし事、是れなり、今や時勢一變、花崗石を容易に伐り出すの器械は輸入せられ、運搬の利便は日に月に増進し、且つ花崗石を多用するの時代は將さに到らんとす、況んや東京の如き火災頻多なる處、日本の如き濕氣深き國土に在りては、耐火性にして細粒若くは中粒の花崗石にあらざれば、到底建築用となす

登山の氣風を興作すべし

百四十五

甲斐國の二花崗岩塊

登山の氣風を興作すべし
に足らざるをや、予、相互の間を過ぎ、新火成岩地を經歷し、以て北條氏
五代の覇圖と共に其の末路を憑吊し、參河に歸りて舊火成岩地を踏
み、心私かに異日の隆興を祝して去る。以上二項、鄙著地理學講義、坂本
中部日本の大花崗岩塊の東に片麻岩、延縁す。既にして甲斐國裡に入り、二
塊の花崗岩あり、西に在るを駒ヶ嶽、東に在るを金峯山塊と稱す。共に其
の延縁せる面積は些少なるも、而かも此の小塊中に高峯累々、奇拔無比試
みに登臨せんか。

鞍懸山

甲斐北巨摩郡西北 海拔一、四八三米突、釜無川右岸、教來石村より流レ川を西に沿ひ登る

駒ヶ嶽

此の山塊は甲斐國の西北隅に在り、其の北に駒ヶ嶽、南に金峯山塊と稱す。此の山塊は甲斐國の西北隅に在り、其の北に駒ヶ嶽、南に金峯山塊と稱す。

鳳凰山

甲斐北巨摩郡南部 海拔二、九一二米突、釜無川右岸、野村の左よりコム川の溪谷に下り、西南に登り、御坐

地藏嶽

甲斐北巨摩郡南部 海拔二、七九七米突、鳳凰山の近南、御坐石より清水湯と經、登り得

金峰山

此の山塊は甲斐國の西北隅に在り、其の北に駒ヶ嶽、南に金峯山塊と稱す。此の山塊は甲斐國の西北隅に在り、其の北に駒ヶ嶽、南に金峯山塊と稱す。

北日本の花崗岩

(八) 北日本の花崗岩

北日本は南日本に比量せば花崗岩普遍せず、要するに南日本特に畿内中
國は花崗岩の占有地にして、北日本北海道は火山岩の占有地たり、南日本
と北日本との間に景物の特異する固より其所。

北日本の花崗岩は、(一)常陸の筑波山塊、(二)常陸磐城の境上より磐城の全部、
岩代の東北境に延縁せる花崗岩及び片麻岩帶、(三)下野岩代間の赤安山(海
拔一、九四五米突)帝釋山(海拔凡九百九米突)、田代山(海拔凡千八百米突)あり、(四)

登山の氣風を興作すべし

岩代に入り駒ヶ嶽(海拔二〇〇四米突)より北緯三十七度線の前後に蟠屈せる一塊(五)岩代越後羽前の境上なる飯豊山塊の蘇場嶽(海拔一三四〇米突)三笠山烏帽子嶽(大日嶽(海拔一九三〇米突)飯豊山(海拔一八八〇米突)地蔵山あり(六)飯豊山塊の西南越後に入り二本平(海拔一〇七七米突)あり(七)二本平の直北飯豊山塊の直西越後新發田町の南に菅名嶽(法性山)五ッ森山五頭山あり(八)北緯三十八度線以上越後羽前の境上に蟠屈せる大塊あり其北に火山岩帯を隔て三塊あり(九)陸前羽前羽後の境上に一塊あり(十)北緯三十九度線以上に到りては陸中の各所に普遍し特に其の太平洋岸は悉く花崗岩より成り山田宮古鉾崎久慈の各港灣は皆な太平洋の激浪花崗岩を浸蝕して穿鑿する所(十一)陸中の中部と羽後の中部との間に一塊あり(十二)羽後秋田市の東北に一塊あり(十三)羽後陸奥の境上大平洋岸より蟠屈せる一塊あり其他三四所に點在するありと雖も小塊にして固より記するに足らず北日本の花崗岩にして古往今來人口に膾炙するは

筑波山

常陸筑波、眞壁、新治郡に於て、山頂に磐石あり、其の形、北緯三十七度線に蟠屈せる一塊、其の北に火山岩帯を隔て三塊あり、(九)陸前羽前羽後の境上に一塊あり、(十)北緯三十九度線以上に到りては、陸中の各所に普遍し、特に其の太平洋岸は悉く花崗岩より成り、山田宮古鉾崎久慈の各港灣は皆な太平洋の激浪花崗岩を浸蝕して穿鑿する所、(十一)陸中の中部と羽後の中部との間に一塊あり、(十二)羽後秋田市の東北に一塊あり、(十三)羽後陸奥の境上大平洋岸より蟠屈せる一塊あり、其他三四所に點在するありと雖も小塊にして固より記するに足らず北日本の花崗岩にして古往今來人口に膾炙するは

金華山

登山の氣風を興作すべし

常陸筑波、眞壁、新治郡に於て、山頂に磐石あり、其の形、北緯三十七度線に蟠屈せる一塊、其の北に火山岩帯を隔て三塊あり、(九)陸前羽前羽後の境上に一塊あり、(十)北緯三十九度線以上に到りては、陸中の各所に普遍し、特に其の太平洋岸は悉く花崗岩より成り、山田宮古鉾崎久慈の各港灣は皆な太平洋の激浪花崗岩を浸蝕して穿鑿する所、(十一)陸中の中部と羽後の中部との間に一塊あり、(十二)羽後秋田市の東北に一塊あり、(十三)羽後陸奥の境上大平洋岸より蟠屈せる一塊あり、其他三四所に點在するありと雖も小塊にして固より記するに足らず北日本の花崗岩にして古往今來人口に膾炙するは

だ花崗岩中に雲母の因りたる石を著し、黄金と銀とを著し、古歌に「宮城野の萩や小鹿の姿ならん」と詠みたる如く昔時陸前に鹿の多く追逐せしも人の口の繁殖と共に則ち今日此島に遺存するものならん

り、弘法大師の坐念せし處と傳ふる大石塔の下を通ぎ、竟に絶頂に登る、黄金神社より頂まで十六町、頂に海神命の小祠と述つ、此所より眺望せば、太平の洋水浩渺として地平線と限り、西に松島の八十八島と下瞰し、其の跌宕雄渾なる一たび眺望する者竟に忘るべからず、山を下り東岸なる花崗岩製の燈臺と看し、「道者巡り」即ち島を四周せる徑路に出で、須らく島を回行すべし、萬頃の太平洋水蒸激して花崗岩崖を激む所、壯快の極、此島は温暖海流(黒潮)、寒冷海流(親潮)の會所に當り、多量の水蒸氣發上し、山頂に撞突するを以て、草樹は之れに潤澤せられ、鬱蒼葱翠の間より泉水濺洒として噴出し、花崗岩を穿ちて流れ、清冽晶明、是れ亦た此島の美を添ふもの

北海道には花崗岩特に少々、唯だ渡島後志に四小塊點綴すると、日高山脈の南走して襟裳海角に到る間に細長き一帯あると、襟裳海角傍近に四小塊北見に二小塊あるのみ其他に散在するは小片塊に過ぎず。

登山中の注意

(四) 登山中の注意

準備了り、既に山に登る、其間自から注意すべきものあり、警戒すべきものあり、即ち

峻峻の個

峻峻なる個所に到れば、杖を堅に地に着けず、自己の身體を直角にして着くべし、即ち平地を歩む際の如く杖を脚の方に向ひて着けず、其端と眼の間に在るが如くに着くべし。峻峻危険なる個所に到れば、側目ふらさず面鏡を正前に向け、徐ろに攀るべし、脚滑りな

所を上下する注意

ば、直ちに面鏡と腹部と地面に着け、兩手を伸ばし、シガミ若くは毛氈の如くなすべし。峻峻を下るには、極めて丈夫なる麻繩を巨木に括り付け、他の端にて自己の身體を攀り、括り、繩を手にして以て下るべし、若し地を抜抜の際の如く一人(甲)杖け踏崖を下り、他の人(乙)は崖上に在るべし、崖上に在る乙は巨樹と後ろに倚り、以て麻繩の端を攀り手にし、徐々に之れを伸ばし、甲をして心強く下るを得べし。

岩石崩墮の注意

登山中、大風雨に會し、若くは氷雪の溶解するに際せば、間、岩石の頂上より崩墮する事あり、是れ秩父岩又は石灰岩に多し、秩父岩は極端に脆く、以て水蒸氣其間より入り、時々之れを崩墮せしめ、石灰岩は炭酸と多量に含有するを以て、内部に容易に溶解し、塊となりて崩墮す、故に大風雨の際、若くは春夏の交、日中太陽の温度俄かに高昇する際に當り、道傍二岩質の山の中に入れば、宜しく警戒する所なるべし。

山中、氷雪の上

山中、積氷雪の上を歩行せんとせば、環り日本の雪國にて使用する「雪鞋」を穿つを要す。洋製の長靴なりせば、所謂「ネイルド、ブーツ」即ち底に釘を着けたるものを穿つべし。積氷雪中、越後の連嶽間、立山山麓の間、信濃、飛騨の群嶽間、北海道の山中に入れば、時に或は脚を積氷雪の上より踏み外つして深淵に陥ることあり、又た地上に堅く堆積せる氷雪なりと思ひ之れを踏むや、輒ち氷雪の崩墮して共に崩崖上より墮つることあり、是れ殊に注意警戒せざるべからず、若し夫れ二人なれば、丈夫なる麻繩を以て兩々の身體を凡八九歩の距離を隔て、緊を括り、而して後歩行すべし、縱令一人脚を踏み外つしたるも他の一人全力を揮ひて曳き付ければ、容易に陥落することなし、又た一隊となすものなりせば、甲より乙、乙より丙、丙より丁と適宜の距離を隔て、全隊の人員を悉く括り付けて歩行すべし、此の如く預防は然りと雖も、個々未前に警戒するを最も必要とす。

を歩行

薄氷の上を涉らんせば、蘆荻又た芒(ノ、キ)の如き類の草と多量に荊り取り、之れを厚く氷上に敷き、其上より水を漉き、氷の堅く氷を待ちて涉るべし、車馬を漉らせんとするにも此の方法に類るべし、然し、重畳の大なるものなれば、氷りたる草の上に更に草を敷き、復た水を漉きて復た氷らし、重畳、大なるは、幾面にて此法を實施すべし。

する際

牛馬の道を誤りて雪中に陥入りたる際、は牛馬の眼前に馬具、又は厚き毛布襪のもの、を敷敷し重ねて投すべし(雪上に)、牛馬は即ち此上に飛び登り、竟に雪中より救出し得、太陽の光線、山中の積雪に反映するや、歩行者の眼を眩迷せしめ、目つ眼を傷ふこと多し、

の準備

登山の氣風を興作すべし

登山の氣風を興作すべし
 は神社なる者皆な火山を以て神佛の棲息場の如くに假定するが故
 のみ(鄙著地理學講義拔萃)



山 甲 武

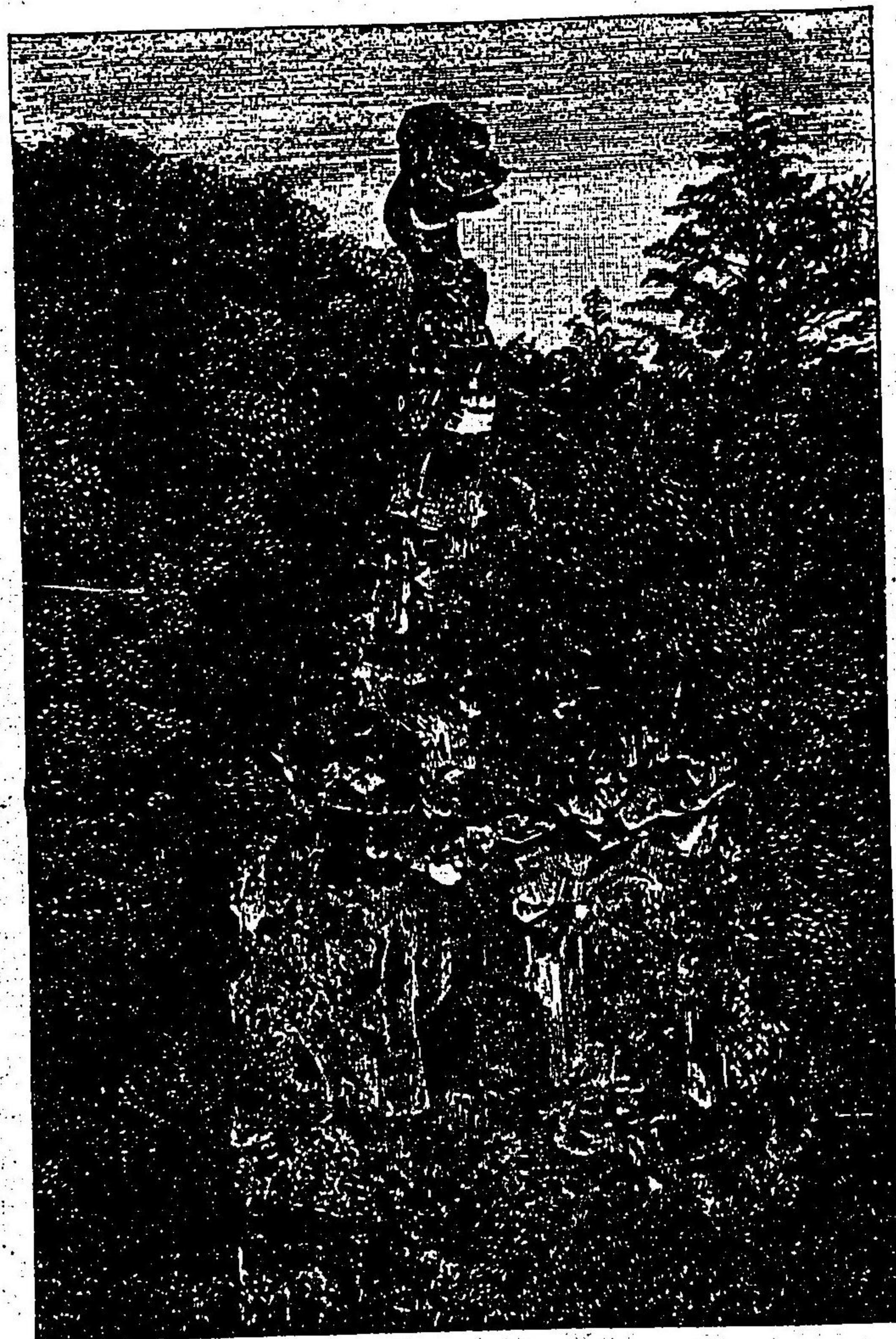
(△望=南東ヲ隔テ川平赤リヨ四ノ町野鹿小郡父秩國祿武)
 才立秀リノ側外南東の地盆父秩 突米〇一三、一拔海
 リハ觀外き如の山火熄し似類に鐘洋形其
 ひ散とれ之て以を岩灰凝輝てしに岩板礎は髓骨もごれ然
 ふ散を岩灰凝輝て以を岩灰石に更
 強里二徑直でま麓山リヨ町 リ在に内地盆父秩は町野鹿小
 (ル 據 = 誌 雜 學 地)

日本には流水の
 浸蝕激烈なる事

(四) 日本には流水の浸蝕激烈なる事

日本○の○地○形○幅○狭○く○丈○々○長○く○蜿○蜒○と○し○て○細○く○伸○張○し○而○し○て○峻○崇○た○る○山○脈○
 は○海○岸○線○に○并○行○し○て○國○の○中○央○に○連○續○す○況○ん○や○火○山○力○多○大○な○る○が○故○に○警○
 拔○秀○俊○な○る○峯○頭○は○颯○然○聳○起○し○玉○筍○簇○々○森○列○し○て○際○な○し○是○を○以○て○か○若○し○
 夫○れ○天○魔○を○賞○し○來○り○神○斧○を○揮○ひ○て○日○本○國○土○の○上○よ○り○切○割○せ○し○め○ん○か○其○
 の○横○切○面○は○銳○尖○な○る○三○角○形○を○作○さ○ん○此○時○に○當○り○四○周○な○る○大○瀨○の○水○よ○り○
 發○上○せ○る○多○量○の○水○蒸○氣○は○雨○と○な○り○霜○と○な○り○氷○雪○と○な○り○泉○と○な○り○澗○水○と○
 な○り○河○流○と○な○り○以○て○三○角○形○の○頂○點○よ○り○急○激○な○る○斜○面○を○直○瀾○し○て○下○り○來○
 る○日○本○に○於○け○る○流○水○の○浸○蝕○激○烈○雄○快○な○る○固○よ○り○然○り○其○の○初○め○泉○水○聲○な○
 き○に○似○既○に○し○て○幽○咽○微○かに○音○あり○既○に○し○て○濺○々○既○に○し○て○浚○々○會○磐○石○に○
 會○ふ○や○迂○曲○し○て○下○り○漸○く○斜○面○の○急○劇○な○る○と○共○に○漸○く○其○の○速○力○を○増○進○し○
 忽○ち○巨○巖○に○當○る○や○爲○め○に○止○め○ら○れ○て○進○行○し○得○ず○鬱○勃○憤○然○奮○躍○し○て○巖○に○
 上○り○之○れ○を○剝○磨○し○去○り○勢○ひ○驅○逐○し○て○下○り○更○に○峭○然○た○る○巖○壁○に○當○る○や○激○

日本には流水の浸蝕激烈なる事



岩籠山名嶽

(在=(行南)側左ノ口入社神山名嶽 岩折九嶽雅)
 成化して蝕没と岩山火の雲、氷、霧、雨、水、溪、風、氣、大
 (シベス照參ト部ノ山名嶽頁一十七第)

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百六十

して飛雨となり、濺沫澗に滿ち兼ねて内部の孔竅に浸入し、内外交、攻撃して遂に彼の

於藏奇哉鬼橋奇鬼耶神耶將化兒海内異觀歸一掃天台石梁亦徒爲吟
 客夜投帝釋窟大獻壓夢夢纒支曉霧攀入急峽際怪障危巒貫翠園石門
 重開雲吞吐波角牽掣倒垂枝忽看大壑中否塞飛來長流何處之寧知空
 際通山脈百丈橫跨千尋躡萬古不撓穹隆勢雲根天矯逸蟠螭上生老樹
 爲欄楯牛馬來往似坦夷下如大月生溟渤水滂仙氛相爭馳縱有霖潦漂
 山至洞然流去屹不移疑他老蚪奔蹶觸山死鱗甲化石不絕離又疑天半
 長虹飲谷夕靈淑固結凝不腐不然太古架橋梁始眞宰教民運巧思萍梗
 嘗搜東方勝金洞庚申屈指推不知絕奇在目睫一條壓倒萬嶽巖寄語天
 下烟霞客公論不是我言私不攀異嶽勿談美不渡鬼橋勿說奇

坂谷朗廬

てふ

備後國坂可郡帝釋 備後國福山町より五里二十町、若くは尾道町より六里十一町、廣田
 村に在り 郡府中村に出で、村より北行し、二里、同郡木野山村に到り、更に